年次（昭和）／道別	京畿	忠北	忠南	全北	全南	慶北	慶南	黃海	平南	平北	江原	咸南	咸北	計
昭和二 男	三、二八〇	一〇四	—	八	—	—	—	—	—	—	一〇	—	四、〇〇〇	四、五一三
昭和二 女	一〇〇	六八	—	七	—	—	—	—	—	—	一〇	—	四、〇五三	四、一五四
昭和二 計	三、三八〇	一七二	—	一五	—	—	—	—	—	—	二〇	—	八、〇五六	八、二六七
昭和二 地	二	三	—	一	—	—	—	—	—	—	一	—	三	一〇
三 男	三、三八〇	五八	—	七五	—	—	—	—	—	—	二〇	—	四、〇五六	四、一二一
三 女	一〇〇	五六	—	七〇	—	—	—	—	—	—	二〇	—	四、〇六二	四、一二二
三 計	三、三八〇	一一五	—	一四五	—	—	—	—	—	—	四〇	—	八、一一八	八、二四三
三 地	二	三	—	二	—	—	—	—	—	—	一	—	三	一〇
四 男	三、三八〇	五八	—	七五	—	—	—	—	—	—	二〇	—	四、〇五六	四、一二一
四 女	一〇〇	六〇	—	七〇	—	—	—	—	—	—	二〇	—	四、〇九九	四、一二九
四 計	三、三八〇	一一七八	—	一四五	—	—	—	—	—	—	四〇	—	八、一六五	八、二五〇
四 地	二	三	—	二	—	—	—	—	—	—	一	—	四	一〇
五 男	三、三八〇	五八	—	七五	—	—	—	—	—	—	二〇	—	四、〇五六	四、一二一
五 女	一〇〇	六〇	—	七〇	—	—	—	—	—	—	二〇	—	四、〇六二	四、一二二
五 計	三、三八〇	一一八八	—	一四五	—	—	—	—	—	—	四〇	—	八、一一八	八、二四三
五 地	二	三	—	二	—	—	—	—	—	—	一	—	四	一〇
六 男	三、三八〇	五八	—	七五	—	—	—	—	—	—	二〇	—	四、〇五六	四、一二一
六 女	一〇〇	六〇	—	七〇	—	—	—	—	—	—	二〇	—	四、〇六二	四、一二二
六 計	三、三八〇	一一八八	—	一四五	—	—	—	—	—	—	四〇	—	八、一一八	八、二四三
六 地	二	三	—	二	—	—	—	—	—	—	一	—	四	一〇
七 男	三、三八〇	五八	—	七五	—	—	—	—	—	—	二〇	—	四、〇五六	四、一二一
七 女	一〇〇	六〇	—	七〇	—	—	—	—	—	—	二〇	—	四、〇六二	四、一二二
七 計	三、三八〇	一一八八	—	一四五	—	—	—	—	—	—	四〇	—	八、一一八	八、二四三
七 地	二	三	—	二	—	—	—	—	—	—	一	—	四	一〇
八 男	三、三八〇	五八	—	七五	—	—	—	—	—	—	二〇	—	四、〇五六	四、一二一
八 女	一〇〇	六〇	—	七〇	—	—	—	—	—	—	二〇	—	四、〇六二	四、一二二
八 計	三、三八〇	一一八八	—	一四五	—	—	—	—	—	—	四〇	—	八、一一八	八、二四三
八 地	二	三	—	二	—	—	—	—	—	—	一	—	四	一〇
九 男	三、三八〇	五八	—	七五	—	—	—	—	—	—	二〇	—	四、〇五六	四、一二一
九 女	一〇〇	六〇	—	七〇	—	—	—	—	—	—	二〇	—	四、〇六二	四、一二二
九 計	三、三八〇	一一八八	—	一四五	—	—	—	—	—	—	四〇	—	八、一一八	八、二四三
九 地	二	三	—	二	—	—	—	—	—	—	一	—	四	一〇

五　崇神系教團の分布消長狀況

崇神系教團の分布及消長は、次掲第三十四表に示すが如く、明治二十八年頃江原道に於てその發現を見てより次第に各地に分布するに至つた。即ち

明治二十八年頃から　江原道に(淮陽に七星教)
明治三十二年頃から　咸鏡南道に(永興に大倧教―今なし)
明治四十二年頃から　平安南道に(順天に檀君教)
明治四十五年頃から　京畿道に(京城に關聖教)
大正二年頃から　忠清南道に(新都内に檀君教)
大正十年頃から　黄海道に(金川に崇神人組合)
大正十一年頃から　慶尙北道に(安東に皇祖敬神崇神教)
大正十五年頃から　慶尙南道に(咸安に大倧教)
昭和五年頃から　忠清北道に(永同に詠歌舞教)
昭和八年頃から　全羅北道に(裡里に聖化教)

の次第を以て分布したのであつて、全羅南道・平安北道及び咸鏡北道の三道を除く餘の十道悉く多少なりその活動舞臺たらざるはない有樣であつた。

本系教團の教勢消長は、明治四十五年京畿道が江原・咸南・平南に參加してその活動舞臺となる迄は極めて微々たるものであつたが、それ以後急激に伸展して三千餘名の教徒を獲得し、爾來現狀維持の有樣にて(教區は增加したが)大正九年に至り、翌大正十一年には、斷然その勢を張つて忽ち四萬一千餘人(教區は一三)大正十三年には五萬餘人(教區は一八)に達したが、これを上昇の極點としてその翌大正十四年より漸次減衰の兆をあらはし、昭和三年以後愈この兆著しく、一萬より六千に、六千より四千に遞下、最近二三年は四千臺を漸く維持するの有樣である。

猶ほ、本系各教團の沿革は第五章を參照、各教の教勢消長に就ては第十六表乃至第二十九表を參照のこと。

第三十四表　崇神系類宗道別年次別教勢表

年次(明治)＼道別	京畿	忠北	忠南	全北	全南	慶北	慶南	黄海	平南	平北	江原	咸南	咸北	計
明治二八 男														
女														
計														
地														
一六											一			一
一六											六			六

年次（明治）／道別	二九				三〇				三一				三二			
	男	女	計	地	男	女	計	地	男	女	計	地	男	女	計	地
京畿																
忠北																
忠南																
全北																
全南																
慶北																
慶南																
黃海																
平南																
平北																
江原	六		六	一	六		六	一	六		六	一	六		六	一
咸南																三〇
咸北																
計	六		六	一	六		六	一	六		六	一	六		六	二六

年次（明治）／道別	三三				三四				三五				三六				三七			
	男	女	計	地	男	女	計	地	男	女	計	地	男	女	計	地	男	女	計	地
京畿																				
忠北																				
忠南																				
全北																				
全南																				
慶北																				
慶南																				
黃海																				
平南																				
平北																				
江原	六		六	一	六		六	一	六		六	一	六		六	一	六		六	一
咸南	六六		六六	一	六六		六六	一	六六		六六	一	六六		六六	一	六六		六六	一
咸北																				
計	三五		三五	二	三五		三五	二	三五		三五	二	三五		三五	二	三五		三五	二

年次（明治）／道別	三八				三九				四〇				四一	
	計	地	男	女	計	地	男	女	計	地	男	女	男	女
京畿														
忠北														
忠南														
全北														
全南														
慶北														
慶南														
黃海														
平南														
平北														
江原	六	一	六		六	一	六		六	一	六			
咸南	六六	一	六六		六六	一	六六		六六	一	六六			
咸北														
計	三	二	三		三	二	三		三	二	三			

年次（明治）／道別	四二				四三				四四				四五			
	計	地	男	女	計	地	男	女	計	地	男	女	計	地	男	女
京畿													三、三三〇	一	二、〇〇〇	一、〇〇〇
忠北																
忠南																
全北																
全南																
慶北																
慶南																
黃海																
平南																
平北																
江原	六	一	六		六	一	六		六	一	六		六	一	六	
咸南	六六	一	六六		六六	一	六六		六六	一	六六		六六	一	六六	
咸北																
計	三	二	三		三	二	三		三	二	三		三	二	三	四

年次（大正）＼道別	京畿	忠北	忠南	全北	全南	慶北	慶南	黃海	平南	平北	江原	咸南	咸北	計
大正二 男	二、〇〇〇		四								六	六六		二、〇六六
大正二 女	一、三〇〇		四								六	六六		一、三〇〇
大正二 計	三、三〇〇		四						一		六	六六		三、三六六
大正二 地	一		一								一	一		五
三 男	二、〇〇〇		四								六	六六		二、〇六六
三 女	一、三〇〇		四								六	六六		一、三〇〇
三 計	三、三〇〇		四						一		六	六六		三、三六六
三 地	一		一								一	一		五
四 男	二、〇〇〇		四								六	六六		二、〇六六
四 女	一、三〇〇		四								六	六六		一、三〇〇
四 計	三、三〇〇		四						一		六	六六		三、三六六
四 地	一		一								一	一		五
五 男	二、〇〇〇		四								六	六六		二、〇六六
五 女	一、三〇〇		四								六	六六		一、三〇〇
五 計	三、三〇〇		四						一		六	六六		三、三六六
五 地	一		一								一	一		五
六 男	二、〇〇〇		四								六	六六		二、〇六六
六 女	一、三〇〇		四								六	六六		一、三〇〇
六 計	三、三〇〇		四						一		六	六六		三、三六六
六 地	一		一								一	一		五
七 男	二、〇〇〇		四								六	六六		二、〇六六
七 女	一、三〇〇		四								六	六六		一、三〇〇
七 計	三、三〇〇		四						一		六	六六		三、三六六
七 地	一		一								一	一		五
八 男	二、〇〇〇		四								六	六六		二、〇六六
八 女	一、三〇〇		四								六	六六		一、三〇〇
八 計	三、三〇〇		四						一		六	六六		三、三六六
八 地	一		一								一	一		五
九 男	二、〇〇〇		四								六	六六		二、〇六六
九 女	一、三〇〇		四								六	六六		一、三〇〇
九 計	三、三〇〇		四						一		六	六六		三、三六六
九 地	一		一								一	一		五
一〇 男	三、六六六		四								六	六六		二、〇六六
一〇 女	一、八三三		四								六	六六		一、九二一

年次（大正・昭和）／道別	京畿	忠北	忠南	全北	全南	慶北	慶南	黃海	平南	平北	江原	咸南	咸北	計
一一 計	四一、五四九		一四					八五	六三		二三			四一、七三四
一一 男	四四、二三三		一四			一〇		八五	四四		六二			四四、三六二
一一 女	一、八三四					九		八五	二一		四五			一、九八四
一一 地	三		二			一九		六五	四		一〇六			四六、三五六
一二 計	四六、〇六七		一四			一九		六五	四四		一二六			四六、四一〇
一二 男	四八、二五七		一四			一〇		一	四四		九五			四八、四一〇
一二 女	二、九一一					九		二〇	六四		二一			二、九二一
一二 地	四		二			一		四	四		六			一七
一二 計	五一、一六八		一四			一九		六四	六四		一二六			五一、二六八
一二 男	四六、三八三		一〇四			一〇		四四	四四		一二六			四六、六三七
一二 女	三、三三二					九		一九	二四		二四			三、三八四
一三 地	四		二			一九		六三	四		七			四九、〇五四
一三 計	四九、七一五		一〇四			一九		六三	一四		一〇六			四九、七一五
一三 男	四六、三八三		一〇四			一〇		四四	一六		六			四六、六三七
一三 女	三、三三二					九		一九	二四		二四			三、三八四
一四 男	四五、八八三		一〇四			一〇		六三	四		七			四五、一四七
一四 女	三、三三四					二		八	四		一三			三、三四七

年次（大正・昭和）／道別	京畿	忠北	忠南	全北	全南	慶北	慶南	黃海	平南	平北	江原	咸南	咸北	計
一四 計	四五、八八六		一〇四			一〇		六三	四四		一〇			四五、八八六
一四 男	四四、三六二		一〇四			一〇		六三	四四		一〇			四四、三六二
一四 女	一、九八四					九		一九	二四		二四			一、九八四
一五 地	四		二			一九		六三	四		七			四九、〇五四
一五 計	四九、七一五		一〇四			一九		六三	一四		一〇六			四九、七一五
一五 男	四六、三八三		一〇四			一〇		四四	一六		六			四六、六三七
一五 女	三、三三二					九		一九	二四		二四			三、三八四
昭和二 地	六		二			一九		六三	四		七			四九、〇五四
昭和二 計	九、七九一		一〇五			一九		六三	一四		一〇六			九、七九一
昭和二 男	六、六六〇		七二			一〇		四四	一六		六			六、六六〇
昭和二 女	三、一三一		三三			九		一九	二四		二四			三、一三一
三 地	六		二			一九		六三	四		七			四九、〇五四
三 計	五、一三七		一〇九			一九		六三	一四		一〇六			五、一三七
三 男	二、四〇七		一〇七			一〇		四四	一六		六			二、四〇七
三 女	二、七三〇		二			九		一九	二四		二四			二、七三〇
四 地	六		二			一九		六三	四		七			四九、〇五四
四 計	五、一二		九六			一九		六三	一四		一〇六			五、一二
四 男	二、七二四					八		一二	二四		五九			二、七二四
四 女	二、三八七		九六			一二		六三	二四		二三			二、三八七
計	四九、一〇七	四	二			一一		八五	四四		一五二			四九、一〇七
計	四九、一〇七	六	三			一一		八五	四四		一〇四			四九、一〇七

年次（昭和）／道別	京畿	忠北	忠南	全北	全南	慶北	慶南	黃海	平南	平北	江原	咸南	咸北	計
五 男	一、九六二	一	九三	—	—	二	一五	五二〇	四二	—	一九一	—	—	二、八三六
五 女	二、〇九九	一	—	—	—	三	—	—	三	—	三八	—	—	二、一三三
五 計	四、〇六一	一	九三	—	—	五	一五	五二〇	五四	—	二三九	—	—	四、九六八
五 地	七	一	四	—	—	一	一	一	四	—	一	—	—	三〇
六 男	一、四七三	一	一八五	—	—	二	九	五八一	四三	—	一七五	—	—	二、四六七
六 女	一、七一八	一〇	四一	—	—	三	—	—	三	—	三三	—	—	一、八一七
六 計	三、一九一	一〇	三六	—	—	五	九	五八一	五四	—	二〇八	—	—	四、二八四
六 地	九	—	四	—	—	一	—	二	四	—	一二	—	—	三三
七 男	一、四九五	二九	一九六	—	—	二	一	五八〇	四五	—	一七六	—	—	二、三三七
七 女	一、六三三	一七	七〇	—	—	三	—	—	三	—	二五	—	—	一、七六〇
七 計	三、一二七	四六	二六六	—	—	五	四	五八〇	五七	—	二二	—	—	四、二六六
七 地	九	二	四	—	—	一	一	—	四	—	一	—	—	三三
八 男	一、八二二	一	三四二	—	—	一	四	五八二	五六	—	四九	—	—	二、三三七
八 女	二、三二七	一〇	七〇	—	—	三	一	—	五八	—	二九	—	—	二、五〇七
八 計	三、六〇九	二一	四一二	—	—	四	五	五九二	一二四	—	七八	—	—	四、八三四
八 地	九	二	七	—	一	一	一	一	四	—	八	—	—	三四
九 男	一、二七一	—	二一七	—	—	一	—	五九三	二〇	—	一〇	—	—	二、二二
九 女	二、三三五	一	六三	—	—	三	—	—	二九	—	六六	—	—	二、四九六
九 計	三、六〇六	一	二七九	—	—	四	一	五九三	四九	—	一七六	—	—	四、七〇七
九 地	九	一	七	—	—	一	—	一	四	—	九	—	—	三三

第九章　類宗の信仰意識

朝鮮の類似宗教がその教徒の間にどんな風に考へられて居るか、即ち類宗の信仰意識が如何なるものであるかを、こゝに暫らく考察して見ようと思ふ。

第一節　入教の動機

先づ第一に之等類似宗教團體に入教した教徒は、どんな動機で入教したか。いま之を考察するが爲に、各教の各地に於ける延べ教區(一地域に二教があればこれを二教區とするから延べ教區と云ふ)七百七十四教區に於て各箇に調査せる入教動機表を集計し、各種別に依つて之を分類した次掲第三十五表全鮮教別信仰表を作製して統計的に檢討するであらう。さて分類せられた入教の動機は同表「入教の動機欄に示すが如く、

(1) 布教者の勸誘に依るもの　一八二
(2) 布教者の甘言利說又は迷信的言辭に乘ぜられたもの　一五六
(3) 布教者の無稽な言辭又は流說に惑はされたもの　八六
(4) 官許の如く裝ひ强制的に入教を迫られたもの　一
(5) 地方の勢力者が入教し又は勸誘したので、これに附加したもの　四
(6) 親族知己が勸誘したので已なきもの　二四
(7) 父祖が信仰したからこれをそのまゝ繼承したもの　五
(8) 父祖の遺言に遵つたもの　一
(9) 教堂の建設されたのに刺戟されたもの　一〇
(10) 布教所に出入中刺戟を受けたもの　一
(11) 教理又はその教の主義に共鳴したもの　二一
(12) 教主に私淑したもの　一
(13) 教を何等かに利用せむが爲のもの　三
(14) 好奇心に驅られて漫然と入教したもの　一八
(15) 新聞廣告に動かされたもの　一
(16) 自ら進んで入教したもの　一
(17) 他教から轉教したもの　一三
(18) 動機の不明なるもの　二四六

總計　動機の種類十八　七七四

等であり、これを入教者の態度「入れられた」か「入つた」か、即ちその入教が所動的なものか能動的なものかの二つに分けて見ると、上掲十八種の内(1)(番號以下同じ)から(10)までのものが所動的動機に屬し(11)から(17)までのものが能動的動機に屬するやうに思はれる。そこでいまこの兩者をそれ〴〵合計して比較するに

	種別	教區數	割合
所動的動機に屬するもの	一〇	四七〇	〇・八九
能動的動機に屬するもの	七	五八	〇・一一

の如く、所動的動機の方が種別に於ても多く、教區數に於ては斷然優勢、その割合、能動的動機の一割一分に對して實に八割九分を示し、動機不明のものを合計したる總教區數七百七十四に對しても、その六割強を占めて居るのが觀取せられる。

かく動機總數の過半數を示し、明らかなる動機中の八割九分即ち大部分を占むる所動的動機中、如何なる種類のものが最も多く働らいて居るか。それは「他よりの勸誘に從つたもの」が(1)(2)(3)(4)(5)(6)合計四五三の絶對多數を占め、而してこの「他よりの勸誘に從つたもの」の内、最も多く働らいてゐるものは(2)(3)の二種類合計二四二にして首位を占め、(1)及び(6)が第二位第三位に次ぐのである。處が(2)及び(3)は布教者が甘言利說、迷信的言辭乃至無稽の言辭流說等を以て入教を勸誘したものであり、(1)も亦如何なる勸誘法に依るかこの表の面に於ては明でないけれども、布教者が教徒獲得の爲め、民度低き地方に於て勸誘したものが少くないのであるから、必ずやうまいこと、を以て勸誘したことゝ想像することも不可能ではない。そこで朝鮮類宗に入教せる者の入教動機は大部分所動的「入らされた」のであり而して教徒に最も力强く働きかけたものは勸誘、しかもその勸誘が民衆をしてころりと參らせるやうなうまいことであつたことが、明確に認識せられるのである。

然らば最も强く働きかけ、朝鮮の民衆をして類似宗團にころりと入教せしめたうまいことは一體どんなことであるか。このうまいことは入教する教徒がそれを目ざして入教したものと密接な關係があり、或は目ざすそのものでもあるから、これは次節「入教の目的」に於いて併せ觀察する方がよからうと思ふ。

從つて次に第三十五表を掲げて各教の入教動機類別を明示することとした。

第三十五表　全鮮教別信仰表　その一　入教の動機

教別＼動機類別	天道教	侍天教	青林教	上帝教	水雲教	大道教	人天教	大華教	東學教
入教の動機 布教者の勸誘に依り	四三	三	八	三	二六	一	二	二	一
布教者の甘言利說又は迷信的辭に乘ぜられ	四五	六	五	二	一〇		七	二	一
布教者の無積な言は流說に惑はされて	二三	六	一	八	三				
官の許可あるを如く強制的に入教を迫つたでの									
地方勢力者が入教又は勸誘したのでの之に附和し	二								
親族・知己等が勸誘したのでの	九	一			一				
父祖の信仰を繼承	一			一					
祖先の遺言に依り	一								
教堂を建てたのでの	一	一			二			四	
布教所に出入して刺戟を受け	一								
教理又は主義と共鳴してすると	一〇		一	一	二		一		
教主に私淑して									
同教何等かの利用をしたのでして	一			二					
一時的奇好心に驅られて漫然と	三	四	一	三	一		一		
新聞廣告を見て									
自發的に認めらるゝもの									
轉教者	一	一		四					
不明	五五	一六	九	二四	一八	一	四	三	八
計	一九五	四七	二四	八三	六七	一	一五	二	九

	大同教	平化教	天伏教	白々教	无窮道	天命道	无極大道教	天法教	元倧教	小計	普天教	無極大道教	甑山大道教	甑山教	彌勒佛教	太乙教	龍華教	東華教
入教の動機 布教者の勸誘に依り										二八	三〇	三		三	一			
布教者の甘言利說又は迷信的辭に乘ぜられ							一			九	四一	二			一	一	一	二
布教者の無積な言は流說に惑はされて										四	二九	三			一		一	
官の許可あるを如く強制的に入教を迫つたでの																		
地方勢力者が入教又は勸誘したのでの之に附和し										二								
親族・知己等が勸誘したのでの己むなく										二	九		一	一				
父祖の信仰を繼承	一									三								
祖先の遺言に依り										一								
教堂を建てたのでの										八								
布教所に出入して刺戟を受け										一								
教理又は主義と共鳴してすると										五	三							
教主に私淑して											一							
同教何等かの利用をしたのでして										三								
一時的奇好心に驅られて漫然と							一			三	二					一		
新聞廣告を見て																		
自發的に認めらるゝもの																		
轉教者																		
不明	一			一			一		一	一〇			四	一五	一	一	一	五
計	二	四	二	四	一	九	一	一	一	四九	一七	二	一	二四	四	四	一	八

教団別＼動機類別	入教の動機
元君教	布教者の勧誘に依り
大世教	布教者の甘言利説又は迷信的辭乗せられ
仙道教	布教者の無稽な言説に惑はされて流
小計	官的に許可あつた強制的入教を迫るでの如く
金剛道	地方勢力者が入教又は勧誘し附和したのである
圓覺玄元教	親族・知己等が勧誘したのである
光華教	父祖の信仰を承繼
正道教	祖先の遺言に依り
大覺教	教堂を建てたので
佛法研究會	布教所に出入中て受戒を受け
甘露法會	教理又は主義とすると共鳴して
靈覺教	教主に私淑して
佛教極樂會	同教を何等かの利用せんとして
圓融道	一時的奇心に駆られて漫然と
小計	新聞廣告を見て
檀君教	自發的と認めるものゝ
三聖教	轉教者
大倧教	不明
箕子教	計
七星教	
關聖教	
靈神會	
崇神人組合	
皇祖敬神崇神教	
聖化教	
文化研究會	
西鮮神道同志會	
矯正會	

教団別＼動機類別	入教の動機
元君教	一
大世教	一
仙道教	一
小計	三九
金剛道	二
圓覺玄元教	一
光華教	一
正道教	二
大覺教	一
佛法研究會	二
甘露法會	一
靈覺教	一
佛教極樂會	一
圓融道	一
小計	七
檀君教	三
三聖教	一
大倧教	一
箕子教	一
七星教	一
關聖教	二
靈神會	一
崇神人組合	一
皇祖敬神崇神教	三
聖化教	二
文化研究會	一
西鮮神道同志會	一
矯正會	一

教団別＼動機類別	入教の動機
元君教	一
大世教	一
仙道教	一
小計	三四
金剛道	一
圓覺玄元教	一
光華教	一
正道教	二
大覺教	一
佛法研究會	二
甘露法會	一
靈覺教	一
佛教極樂會	一
圓融道	一
小計	七
檀君教	三
三聖教	一
大倧教	一
箕子教	一
七星教	一
關聖教	二
靈神會	一
崇神人組合	一
皇祖敬神崇神教	四
聖化教	一
文化研究會	一
西鮮神道同志會	一
矯正會	一

教団別＼動機類別	入教の動機
元君教	一
大世教	一
仙道教	一
小計	五六
金剛道	一
圓覺玄元教	一
光華教	二
正道教	一
大覺教	五
佛法研究會	二
甘露法會	一
靈覺教	一
佛教極樂會	一
圓融道	一
小計	二二
檀君教	四
三聖教	一
大倧教	三
箕子教	五
七星教	二
關聖教	七
靈神會	一
崇神人組合	一
皇祖敬神崇神教	一
聖化教	六
文化研究會	一
西鮮神道同志會	一
矯正會	一

教團別＼動機類別	入教の動機	神理宗教	知我教	詠歌舞教	小計	太極教	大聖院	孔子教	性道教	大宗教	大成教會	慕聖院
布教者の勸誘に依り				一	二	一			三	二		
布教者の甘言利說又は迷信的辭に乘ぜられ					八					一		
布教者の稽無な說に惑はされて												
流官の許可あるかの如く言はれて					一							
制強的に入教を迫つたので												
勸誘し方法は又教勢力者が附和したのである												
親族・知己等が勸誘したものである					二							
父祖の信仰を承繼なくなる												
祖先の遺言に依り												
教堂を建てたので					二							
布教所に出入中												
刺戟を受けて												
教理又は主義と共鳴し						二						一
教主に私淑して												
同教用利を何等かせんとして												
一時的好奇心と					一					一		
驅られて漫然と												
新聞廣告を見て												
自發的と認めらるゝもの						一						
轉教者												
不明					七						四	一
計		一	一	一	四	四	一	一	四	八	一	一

教團別＼動機類別	入教の動機	小計	天人道	東天教	覺世道	濟化教	天化教	小計	總計
布教者の勸誘に依り		六					一	一	八
布教者の甘言利說又は迷信的辭に乘ぜられ		一							一五六
布教者の稽無な說に惑はされて									八六
流官の許可あるかの如く言はれて									一
制強的に入教を迫つたので									四
勸誘し方法は又教勢力者が附和したのである									二四
親族・知己等が勸誘したものである									五
父祖の信仰を承繼なくなる									一
祖先の遺言に依り									一〇
教堂を建てたので									一
布教所に出入中									二
刺戟を受けて									一
教理又は主義と共鳴して		三							三
教主に私淑して									一
同教用利を何等かせんとして									六
一時的好奇心と		一							一
驅られて漫然と									
新聞廣告を見て									一
自發的と認めらるゝもの									一
轉教者									三
不明		八		一	一	一	一	三	二五
計		一〇	一	一	一	一	一	五	七四

第二節　入教の目的

類似宗教團體の入教者がその大部分所動的に勸誘され、就中布教者の甘言利說、無稽の言辭及迷信的勸誘に依つて入教したものである事は、前節「入教の動機」に於て觀たるところであるが、然らばこの勸誘に動かされて入教した人々の入教に依つて獲得せんとする目的即ち教徒の目さす利益は如何なるものであるか。いまこれを全鮮の教區にひろつて見れば(第三十六表)凡そ次の如きものどもである。即ち

(1) 招福(無病息災・生活安定・所願成就・處世安樂・幸福來・良緣を得る・子寶――男子――を授かる等)を獲得せむことを目的とするもの　一九八
(2) 特權階級(政治上社會上の特權階級)たらむことを目的とするもの　一二四
(3) 高位高官に就任するを目的とするもの　八三
(4) 社會的に認められ一般より厚遇せらるゝを目的とするもの　一三
(5) 生活の資を得る目的のもの　一一
(6) 經濟的扶助を目的とするもの　一
(7) 公に祈禱行爲をなし得るを目的とするもの　六
(8) 權力を得る目的のもの　二
(9) 免災拱食(惡疫・凶年・戰爭・大洪水時、獨り該教徒のみその災禍を免れ、勞せずして衣食し得る)を目的とするもの　一〇
(10) 斷髮を免るゝ目的のもの　四
(11) 玉皇上帝に遭遇する目的のもの　二
(12) 父母の靈魂に會ふ目的のもの　一
(13) 死亡せる父母の回生を目的とするもの　一
(14) 靈術を得、神秘力を得る目的のもの　七
(15) 死後極樂淨土に行く目的のもの　六
(16) 精神修養を目的とするもの　二三
(17) 道學君子として名を後世に遺す目的のもの　四
(18) 東洋の道德を鼓吹する目的のもの　一
(19) 農村啓蒙・文化開發を目的のもの　一
(20) 目的不明のもの　二七六
總計　目的の種別　二十種　七七四

等であるが、これ等の種類を同種のものに依つて集約分類すれば大體次の三種目に分類することが出來るであらう。

一、現實的利益を目的とするもの(種類番號(1)から(10)までを含む)
二、宗教的安心を目的とするもの(種類番號(11)から(15)までを含む)
三、道德的修養を目的とするもの(種類番號(16)から(18)までを含む)

いま之等三種を比較するに、

現實的利益を目的とするもの　種別　一〇種　教區數　四五二

宗教的安心を目的とするもの　種別　五種　教區數　一七
道德的修養を目的とするもの　種別　三種　教區數　二八

であつて、現實的利益を目的とするものがその種類に於ても教區數に於ても最も多く、これを教區數の上から觀察すれば、目的教區數總計七百七十四から不明のもの二百七十六を控除した四百九十八、即ち目的あるもの四九八に對して四五二の絶對多數(比率にして九割一分)を占め、不明の分をも合せた總數七百七十四に對しても五割八分と云ふ高率を示して居り、それ以外のもの、即ち宗教的安心を目的とするものは極めて僅少、論ずるに足らぬ位であり、たゞ道德的修養を目的とするものに於いてやゝ宗教的目的よりもその多きを視るのであるが、要するに類似宗教團體に依つて窺はるゝ教徒の入教目的は、その大部分が現實的利益を目的とするものに他ならないやうである。

然らば、この入教目的中の絶對多數を占むる現實的利益とはどんなものであるか、而してその中如何なるものが最も望まれて居るか。それは概觀するに、病災を免れ、幸福を求めて生活の安定を求むると云ふ個人的な生活安定希望と、高位高官に登り社會の上位を占めて好遇特權を恣にせむとする政治的社會的權勢獲得希望との二者に他ならず、而してその割合は次の如く、

(1)　生活安定・所願成就・良緣子寶を求むる等　一九八
a 生活安定希望
(5)　生活の資を求むる等　一一
(6)　經濟扶助を求むる等　一
(7)　公に營業し得るを求める等　六
(9)　災禍を免れることを求むる等　一〇
(10)　斷髮を免れるを求める等　四
合計　二三〇
b 權勢獲得希望
(2)　政治的特權を得るを求むる等　一二四
(3)　高位高官を求むる等　八三
(4)　社會的好遇を求むる等　一三
(8)　權力を得るを求むる等　二
合計　二二二

個人的に日常生活の安定增進を希望するもの二三〇、社會的・政治的に權勢を獲得せむと希望するもの二二二であつて、兩者は殆んど相半ばする(生活安定五割一分、權勢獲得四割九分)を見るのである。

入教の目的が生活安定にあること、即ち除災招福を求めて現實生活の維持と安定とを希ふこ

とは、ひとり朝鮮の類似宗教團體のみに限られた事ではない。凡そ如何なる民間信仰、宗教類似のもの、及び既成宗教にせよ、入教の目的がかゝる現實的生活希望に出發しないものは殆んど皆無と云つて差支ないのであるが、宗教の信仰、宗團に入教することに依つて政治的權力社會的勢力を求め、高位高官に就き社會の特權階級に上らむとする希望の表現は、あまり他の宗教に於いて見ざるところである。然るに朝鮮の類似宗教に於いては、それが現實的入教目的の約半數を占めて居ることは極めて特異なる現象と云はねばならぬ。

この信仰に依つて現實的な政治的社會的權勢を求めむとする希望は、朝鮮では、今新しくこの類似宗教に於てのみ表現せられたのでなく、昔から今に、一般的には墓地風水信仰に於てあらはれ、特殊的には韓末の巫教信仰北廟に居つた巫女眞靈君に依つて官位が左右された事などその一例である)に於て認められるのであつて、可なり普遍的な傳統的なものと考へられる。かゝる傳統的な信仰意識は如何にして發達したであらうか。詳論はこゝに之を省き、要するに易姓革命が屢々行はれたこと、社會階級が嚴存し、上位階級は一切の權勢を恣に振舞ひ、常に下級階級の羨望するところとなつて居つたこと、而してこの羨望は時あつて現はれる革命期にその一部が達せられたこと、などの觀念が凝り固まり、之に對する熾烈な希望感情が遂に宗教的な信仰意識に發達し、この意識が傳統的に一般民衆に普及したものゝ如くである。

かくの如く朝鮮民衆の傳統的信仰意識が現實的生活安定と現實的權勢慾の滿足にある以上この民衆に呼びかける朝鮮類似宗教の布教者が、その入教勸誘にこの傳統的信仰意識を看却することは到底考へられない事である。是に於てか入教勸誘の手段が、第一節「入教の動機」に於て檢討せるが如く甘言利說、無稽の言辭として弄せられたことも首肯せられるであらう。然らば所謂甘言利說、無稽の言辭は如何なるものであるか。それはとりたてゝ言ふまでもなく、民衆の傳統的信仰意識を喚びさましたものであり、この意識に投じて教勢の擴大强化を謀つたものに他ならない。即ち「斯の教に入教し、斯の教を信ずるものは生活安定も權勢獲得も二つながら完全に確保することが出來る、何故なれば斯教こそ革命を成就するものであり、斯教こそ新王を出すものであり、斯教こそ新都出現に密接な關係を有するものであるから、斯教の教徒はその時選ばれた者として優遇され、教に對する致誠の大小に比例して高位高官又は特典ある社會的地位が約束せられるであらう」と云ふのが入教勸誘の一般的言辭であつた。觀よかゝる入教勸誘の言辭を以て權勢獲得の確實性を誇張した類宗程、その教徒數を增加して教勢の擴大を致したことを。又李朝時代に久しく官界に入るを許されず、從つて權勢獲得の機會に惠まれずに棄て置かれた西鮮北鮮に於て如何に多く之等類宗の教徒を出だしたかを。而して尙ほ、古來新王都の地として迷信せられた鷄龍山下が各類宗の競つて占據する處となり、教徒の移住者續出數年な

らずして三倍の戸口增加を來したことを。これ皆入教の目的が單に生活安定のみでなく、布教勸誘に依つて刺戟された任官希望權勢慾の熾烈さからでなくて何であらうか。いま左に、之等類宗の布教者に依つてなされた入教勸誘の言辭と稱せられる(民間に)もの數種を摘錄して參考の資に供するであらう。

「我が教は、內政紊亂し外敵に苦しむ韓國の國權を恢復し無辜の人民を救濟し、無識者を啓蒙し幸福を得せしめる云々」

「我教は、五萬年無極の大道を以て地上天國を建設するにあり、やがて現在の政府を顚覆し我教その政權を掌握すべし、かくて教徒は誠米金納付の多少に依りそれ〴〵高官大職の地位を得べし云々」

「我教は、韓末に塗炭の民衆を解放せし唯一の團體なり、朝鮮の〇〇は我教に依りてのみ斷行せらるべく、その際は教徒は皆幸福なる地位を與へらるべし云々」

「大正八年三月一日の〇〇運動は我教が最重要なる役割を演ぜり、從つて我教に入教する者は一般朝鮮人より尊敬と好遇を受くべし云々」

「朝鮮民族に幸福を享受せしむる團體は我教を措きて他になし、他の社會團體、思想團體等多くありしも皆有名無實に歸し、只我教こそ朝鮮民族運動の代表團體として活躍す云々」

「我教の地上天國は教徒の團結に依つて達成される、故に我教の信者は、その際一般民衆よりも特別の地位を與へられ優遇せらるべし云々」(以上天道教)

「東學の教祖崔濟愚は神人なり、東學教創始後六十一年目に(大正九年)再生して世界統一の大業を成就すべしと豫言せしが我教主こそその再來なり、故に教主に拜謁する者は無上の幸福を得べく、極貧より救濟せられ、官吏に推薦せられ、子孫は繁榮し、死後は安らかに昇天することを得べし云々」

「我教を信ずるものは病氣平癒幸福增進、朝鮮〇〇の際は夫れ〴〵相當の官職に就き榮達するを得べし云々」(以上水雲教)

「我教に入教する者は生涯衣食住に困難せず、惡疫に罹ることなく、又不治の疾患も全治して健康を保つ。信念篤ければ神明に通じて靈通し飛行自在、暗中にでも物を視得べし。又戰亂ある時はその兵禍を免れ、死して後その靈天國に上り得。國權回復の曉は(又或は曰く教主登極の曉は)我教徒のみ高位高官に任用せらる。又我教徒のみは斷髮するを要せず云々」

「朝鮮の〇〇は我教によつてのみ達成せらる、達成の際は教徒は皆それ〴〵誠米金納付の額に應じて必ず優遇せらる。かくて自己の榮達は勿論子孫の繁榮も亦疑なし云々」(以上普天教)

「我教に入教せば、下層民は生業を得、勞働者は內地渡航其他の職場に斡旋され、天神を信仰する

こと熱心なれば遂に開眼(靈通)して精神宇宙に貫通し、萬事意の如くならざるなく將來の幸福期して待つべし云々」(無極大道)

「本教を信仰すれば自然道德を修養して偉人君子となり、從つて高位高官に上り、子孫の繁榮をも得べし云々」(金剛道)

「我教に入教する者は、鄭氏鷄龍山に奏都せし時(南海に南辰島又の名紫霞島と稱する島あり、此島に七仙官居住し、將來鄭天子を援助して新國家を建設し忠淸南道鷄龍山に都を奏むべしと云ふ)優遇せられて高位高官に就くを得べく、又將來天變地異起り凶作續き惡疫流行して人類悉く死滅すべきも、右仙官の造りし仙藥を服用する時は此の災厄を免れ得べし云々」(靑林教)

などに依つて、その目的が主として如何なるものであつたかゞ窺はれるであらう。猶ほ各教に就いての詳細は次揭第三十六表を參照すべきである。

第三十六表　全鮮教別信仰表　その二　入教の目的

教別 ＼ 目的類別	天道教	侍天教	靑林教	上帝教	水雲教	大道教	人天教	大華教	東學教
入教の目的									
無病息災・生活安定・所願成就・天惠に樂安りよし世間子孫繁榮する幸福來を賞子、得を緣良か授る	二七	二	四	二五	二八		七	九	一
民族主義・朝鮮獨立運動の特典・地位獲得	八	二	四	六	六		一		
教主登極後の高位高官就任	一	一	一	七	三		一		
役員となる、一般會員は社會的厚遇を受けるなる	五		一	二	一				
事業組合の活資を得る	二	二							
冠婚葬祭時に於ける經濟的相互扶助	一								
祈禱が公認される									
除暴救民し權力を得	二								
教本徒、惡、戰亂の禍を免れ勞せずして食ふ 水害は他人に侵入し、大洪水、凶年・飢饉を受けない	一			二	一		一		
斷髮を免る									
玉皇上帝に相過する									
死亡した父母の靈魂と會し得た									
死亡した父母が回生する					一				
靈神術秘的を修得し得る	一								
死後極樂淨土に行ける	三			一					
精神修養	六	二	一	四	一	一		九	一
道後學世君子名と遺なす	一				一				
東洋道德鼓吹									
農村啓蒙・文化運動	一								
不明	天	二〇	二三	二五		一	六	二	八
計	一九五	四七	二四	八三	六七	一	二五	二	九

教團別＼目的類別	入教の目的	大同教	平化教	天伏教	白々教	无窮道	天命道	无極大道教	天法教	元倧教	小計	普天教
	無病息病成世授り良縁を得幸福來る	二	二		一	一	一	一			二〇	二六
	民族主義遂行獨立の後の特典地位獲得		一						一	一	二七	七
	教主登極後の高位高官就任			一	二						二七	六
	役員となり一般の社會的に認めらる、厚遇さるる										九	
	事業組合員と生活の資を得る										四	
	冠婚葬祭時共他に於ける經濟的互扶助										一	
	祈禱が公認される											
	除暴救民して權力を得										二	
	本教徒數、惡疫に侵され受ける洪水、大戰亂の禍を免れ食べずして死者は他に侵され受けず勞せずして年凶・										五	四
	斷髮を免る											四
	玉皇上帝に相遇す										一	一
	死亡したる父母の魂靈と會し得た											一
	死亡したる父母が回生す										一	
	靈術を修得し神秘的力を得る											二
	死後極樂淨土に行ける										二	二
	精神修養			一							二六	二
	道學君子となり後世に名を遺す										一	一
	東洋道德鼓吹											
	農村啓蒙・文化運動										一	
	不明			一	一						一六九	四六
	計	二	四	二	四	一	一	一	一	一	四九	一五七

教團別＼目的類別	入教の目的	無極大道教	甑山教	甑山大道教	彌勒佛教	太乙教	龍華教	東華教	元君教	大世教	仙道教	小計	金剛道	圓覺玄元教	光華教	正道教	大覺教	佛法研究會	甘露法會
	無病息病成世授り良縁を得幸福來る	二	二		二	二	一	一	一	一		三八		一	二	三	一	一	一
	民族主義遂行獨立の後の特典地位獲得											七							
	教主登極後の高位高官就任		二	一								六六							
	役員となり一般の社會的に認めらる、厚遇さるる																		
	事業組合員と生活の資を得る																	一	
	冠婚葬祭時共他に於ける經濟的互扶助																		
	祈禱が公認される																		
	除暴救民して權力を得																		
	本教徒數、惡疫に侵され受ける洪水、大戰亂の禍を免れ食べずして死者は他に侵され受けず勞せずして年凶・											五							
	斷髮を免る											四							
	玉皇上帝に相遇す											一							
	死亡したる父母の魂靈と會し得た											一							
	死亡したる父母が回生す																		
	靈術を修得し神秘的力を得る											三							
	死後極樂淨土に行ける											二							
	精神修養											二			一				
	道學君子となり後世に名を遺す											一							
	東洋道德鼓吹																		
	農村啓蒙・文化運動																		
	不明	一七	五			二	二	六			一	七九	一		一	一	一	五	
	計	二四	九	一	四	四	二	八	一	一	一	二二	一	四	一	五	二	七	一

教團別 ＼ 目的類別	入教の目的
靈覺教	一	無病息災・生活安定・所成就世間・天惠に安樂を子孫繁榮す子、る來福寺得を良緣を授か
佛教極樂會	一	獨鮮朝・行遂義主民族の特典的地位獲得
圓融道	二	任就官高位高の後極登主教
小計	三	役員となり社會的に認めらるる、一般より厚遇さるる
檀君教	五	事業組合の資格を得る生活
三聖教	一	冠婚葬祭時其他に於ける經濟的相互扶助
大倧教	一	祈禱が公認される
箕子教	二	除暴救民して權力を得
七星教	一	死皆年囚・洪大水
關聖教	三	斷髮を免る
靈神會	一	玉皇上帝に相遇す
		死亡し父母の得し會靈魂
		死亡し父母が生同す
		靈術を修得し神秘的力を得て
		死後極樂淨土に行け
		精神修養
	二	道學君子となり後世に名を遺す
	二	東洋道德鼓吹
		農村啓蒙・文化運動
	九	不明
	二七	計

教團別 ＼ 目的類別	入教の目的
崇神人組合	一	本教徒のみは他教に惡、惡戰亂の禍を受けいな、大洪水を免れず勞せずして食ふ
皇祖敬神崇神教	一	斷髮を免る
聖化教	一	玉皇上帝に相遇す
文化研究會		死亡し父母の得し會靈魂
西鮮神道同志會	一	死亡し父母が生同す
矯正會	一	靈術を修得し神秘的力を得て
神理宗教	一	死後極樂淨土に行け
知我教		精神修養
詠歌舞教	一	道學君子となり後世に名を遺す
小計	一七	東洋道德鼓吹
太極教	一	農村啓蒙・文化運動
大聖院		不明
孔子教	一	計
性道教	一	
大宗教	五	
大成教會	一	
慕聖院		
小計	九	

教團別＼目的別＼教目	天人道	東天教	覺世道	濟化教	天化教	小計 六七	總計
入教の目的 無病息災・生活安定・成就世間所・天惠に樂安りよ子孫繁榮す處に樂子、る來福幸得を賓を緣良りか授る			一			一	一六
民族主義・行遂・獨立 鮮朝・特典・後位地獲得							二四
教主登極後高位官就任							公
役員と一般社會的に認めらるる、組合員と生活の資を得る							三
冠婚葬祭時他に扶助							二
祈禱が公認される							一
除暴救民して權力を得							六
死者は他教徒の本戰、惡魔の亂を免れ水洪大、いなけずせ勞ふ食てし							三
斷髮を免る							四
玉皇上帝に相遇す							二
死亡し父母に會ひ魂靈の得							一
死亡し父母が回生す							一
靈術を修得し神秘的力を得る							七
死後極樂淨土に行け							六
精神修養	一	一				二	三
道學君子と後世に名を遺す							四
東洋道德鼓吹							一
農村啓蒙・文化運動							一
不明					一	二	二六
計	一	一	一	二	一	五	七四

第三節　信受狀態

類似宗教團體の教徒がその屬する教團の教理を如何に理解し、如何なる信念に燃えて居るかを觀察することは、類宗の信仰意識を明確にする重要な事項たるを失はない。そこで今第三十七表全鮮教別信仰表「信受狀態」「次揭」に就て檢討するに、次の如く

(1) 教理は解するが信仰觀念薄弱なもの　二
(2) 熱心に信仰するが教理を解しないもの　二
(3) 少しも教理を解しないもの　三九
(4) 信仰觀念濃厚なもの　四九
(5) 信仰觀念薄弱なもの　一一六
(6) 教本部に移住を決行し、又は私財を獻じたもの　一五
(7) 同教に嫌惡を感じて居るもの　二
(8) 信受狀態不明のもの　五四九
　　總計　八種目　七七四

等であつて、これを教理の理解から觀察するに、教理を解すると認められるものは極めて少なく殆んど論ずるに足らない位であるから、一般は教理に對する理解を有して居ないものと考へなければならぬ。然らば信念に於ては如何。それは右(1)(2)(4)(5)に於て觀察せられるが如く、

信念濃厚なもの　(2)(4)　合計　五一

信念薄弱なもの　(1)(5)
合計　一一八

であつて、信念濃厚なものは極めて少なく、教本部に移住を決行し、又は私財を擧げて教に獻する行爲の如きは信念濃厚の結果と見做され得るが故に、この一五を加算しても信念濃厚なものは六十六の少數で信念薄弱なるもの丶約半ばに達するにすぎない程度である。然しながらこの表は昭和九年八月頃の狀態に基づいて作製したものであるから、この表には類宗が既に民衆の間にその掌握力を失ひつゝあることが反映されて居ることを考慮に入れる必要がある。況や(7)の如くその數少なりと雖も嫌惡を感じつゝあるものすら表現されて居るに於ておや。故に右の比較は最近に於ける狀態であつて、類宗の勢力盛なりし頃に於ける信念狀態はもつと／＼熾烈な濃厚なものであつたと考へなければならないであらう。從つて右に表示せられた信念狀態、即ち信念の薄弱なるものが優勢を占むる狀態は現在の信念狀態であることゝ認めねばならない。なぜなれば最近に於ては次節に述ぶるが如き脫教が頻々として行はれつゝある有樣であるからである。

第三十七表　全鮮教別信仰表　その三　信受狀態

信受狀態（信受類別＼教團別）	天道教	侍天教	青林教	上帝教	水雲教	大道教	人天教	大華教	東學教	大同教	平化教	天伏教	白々教	无窮道	天命道
教理は解するが信仰觀念薄弱	—	—	—	—	一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
熱心に信仰するが教理を解しない	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
少しも教理を解せず	八	三	一	八	四	—	一	三	一	—	—	—	一	一	—
信仰觀念濃厚	一七	二	二	三	三	—	—	—	—	一	三	—	—	—	—
信仰觀念薄弱	四四	七	四	三	七	一	一	—	—	一	—	—	—	—	—
教本部に移住を決行し又は私財を獻じた	一	一	—	二	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同教に嫌惡を感じた	—	—	—	—	一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一
不明	一二五	三四	一七	六六	五一	—	一三	八	八	—	一	二	三	—	—
計	一九五	四七	二四	八三	六七	一	一五	一一	九	二	四	二	四	一	一

教團別 ＼ 信受類別	信受狀態						
	教理は解するが信仰觀念薄弱	熱心に信仰するが教理を解しない	少しも教理を解せず	信仰觀念濃厚	信仰觀念薄弱	教本部に移住を決行し又は私財を獻じた	同教に嫌惡を感じた	不明	計
无極大道教									
天法教									
元倧教									
小計	一		三	三	七	四	二	三	四六九
普天教		二	五	三	八	九		一〇	一五七
無極大道教	一			一		二		二〇	二四
甑山教					一			八	九
甑山大道教			一		二			二	四
彌勒佛教					一			三	四
太乙教								一	一
龍華教								六	八
東華教			一					一	一
元君教									一
大世教									一
仙道教									一

教團別 ＼ 信受類別	信受狀態						
	教理は解するが信仰觀念薄弱	熱心に信仰するが教理を解しない	少しも教理を解せず	信仰觀念濃厚	信仰觀念薄弱	教本部に移住を決行し又は私財を獻じた	同教に嫌惡を感じた	不明	計
金剛道									
圓覺玄元教									
光華教									
正道教									
大覺教									
佛法研究會									
甘露法會									
靈覺教									
佛教極樂會									
圓融道									
小計				三		四		二〇	二七
檀君教									
三聖教									
大倧教									
箕子教									
七星教									
關聖教									

教團別＼信受類別	信受狀態					
	教理は解するが信仰觀念薄弱	熱心に信仰するが教理を解しない	少しも教理を解せず	信仰觀念濃厚	信仰觀念薄弱	教部本に移住を決行し又は私財を獻じた	同教に嫌惡を感じた	不明	計
靈神會									
崇神人組合									
皇祖敬神崇神教			一						
聖化教									
文化研究會									
西鮮神道同志會									
矯正會									
神理宗教									
知我教									
詠歌舞教									
小計			一		四				四
太極教									
大聖院									
孔子教									
性道教									
大宗教									
大成教會									
慕聖院									
小計				六					六
天人道									
東天教									
覺世道									
濟化教									
天化教									
小計六七									
總計									

第四節　脫教の動機

類宗の盛況を極めし大正十二三年の頃は、無慮六十二萬餘の教徒を擁したものが(當時天道教も普天教も何れも教徒百萬等と號して居たが、これは各教ともその教勢を誇張したものであらう)その後次第に教勢を減じ現在に於ては漸く十七萬餘人を保つの有樣であるが、かく教勢の減

衰せし理由如何。それは何よりも時勢の推移が最も有力な作用を及ぼしたものであることは云ふまでもない。併しながらかく急激な教勢の減退は新しく入教する者の減少したが爲でなく全く教徒の脱教が續々頻々として行はれた事を雄辯に物語るものである。然らば之等脱教々徒は如何なる動機に依つて脱教したか、それは有力な時勢の影響に依ること勿論であらうが、脱教を致した直接の動機機會はそも〳〵何であつたか。いまこの動機機會を全鮮七百七十四教區に就いて調査すれば、それは次掲第三十八表「脱教の動機」に示すが如く、

(1)	誠米金納付等の經濟的苦痛並に集會等時間の空費あるのみで、何等得るところなしとして	一七五
(2)	教主の登極又は自己の野望が實現しないので	一一
(3)	何等社會的活動なしとして	二
(4)	同教の主義遂行が容易に實行し得ず、集合禮拜は家業に支障あるのみとして	二
(5)	教主又は布教幹部の不正行爲が暴露されたので	一六
(6)	中央本部の紛爭に因りて	一四
(7)	信頼せし教徒が脱教したので	一
(8)	大正八年三月一日事件を機會に	一七
(9)	布教中心人物を失つたので	一六
(10)	布教所が他に移轉したので	二
(11)	官憲の取締を受けたので	一五
(12)	結髪する教旨を嫌忌して	一
(13)	男子側の反對で(婦女教徒)	一
(14)	入教して破産した者を見たので	二
(15)	他に生活の安定が確立されたので	二
(16)	一般から侮蔑を受けるので	七
(17)	革命思想の注入團體たるを知つたので	一
(18)	農村振興運動等の刺戟に依り、又各自々覺して	一二二
(19)	脱教する者のなきところ	三六七
	總計　脱教の動機種目十八	七七四

即ち、全鮮七百七十四教區(延べ教區)中三百六十七教區だけが脱教者を喰止めて居るのみで、他の四百七教區と云ふ大多數は悉く多少の脱教者を出して居ることが觀察された。然らば右掲脱教の動機十八種目中、如何なる動機がその多きに居るか。それは支拂ふだけ負擔するのみだ

けで何等得るところなしとするもの(1)が百七十五の最大多數を占め、農村振興自力更生運動等に刺戟されて教徒として止まることの無意義なるを自覺したもの(18)が百二十二を以てその次位に位し、この兩者のみにて脫教動機數の殆んど大部分を成して居るのである。而して脫教種目の(2)(3)(4)も、等しく大いに成すあるべき期待がはずれた爲であり、而してその期待は、その大いに成されたる時獲得せらるべき何物かの期待であるから、これまた(1)と同質の動機たるは云ふまでもない。(18)も亦同樣に、農村振興・自力更生運動の刺戟に依つて自覺を喚起された限りに於て、それまではその教に何等かの物質的期待を繫いで居たものと推察することが出來るであらう。何故なれば農村振興自力更生の運動は先づ主として自家の經濟更生を捉し依つて以て各家の社會的地位や向上を計ることに努めるものであるから。

かく觀じ來れば脫教動機の種目(1)も(2)も(3)(4)乃至(18)も悉く同性質のものであり、等しくその教に依つて何物かの現實的・物質的利益を獲得せむと期待して居たものが、その期待の滿されざるにあきたらず、誠米金等の經濟的負擔や時間的空費と、支拂ふことだけで何物をも握み得ないことに業を煮やしたからであり、これは教と教徒との關係が、支拂ひに對して何物かを與ふると云ふ取引關係が、拂込金に對して配當を約束する株式會社と株主との關係に於けるが如く、全く利益を目的とした社會關係に於いて結合せられて居たものである事を證明するものに他なら

ない。この脫教の動機に依つて窺はるゝ如く、教と教徒との關係が、かくの如き利益を目的とする社會關係であつて、教は教徒に何物かの物質給付を約束し、教徒は何物かの物の獲得を期待するものである限り、一方教に於てその約束を果し得ざるか——宗教的に物質的何物かの給付をなすべき約束は到底困難なことであるが——他方教徒の文盲が啓蒙せらるるに從つて、兩者の結合は次第に弱められ脫教の傾向は日に日を次いで遂に停止するところがないと考へられる。

第三十八表　全鮮教別信仰表　その四　脫教の動機

動機類別 ＼ 教團別	天道教	侍天教
脫教の動機：誠米金納付等の經濟的苦痛並に時間の空費あるのみで何等得るところなしとして	七五	一三
教主の登極又は自己の野望が實現しないので	一	一
何等社會的活動なしとして	—	—
同教の趣旨（主義遂行・禁酒斷煙等）が容易に實行し得ず又は集合禮拜は家業に支障ありとして	一	—
教主又は布教幹部の不正行爲が暴露された時	一	二
中央本部の紛爭に因り	二	一
信賴してゐた信者が脫教したので	—	—
大正八年三・一事件後	一五	二
布教中心人物を失つたので	—	—
布教所が移轉したので	一	—
官憲の取締を受けて	四	三
結髮する教旨を嫌ひ	—	—
男子側の反對で（婦女子信徒）	—	—
破産者を見たので	—	—
他に生活の安定が確立されたので	—	—
一般地方民の侮蔑を受けるので	二	一
革命思想注入機關たることを知つた時	一	—
教徒の自覺に因り（農村振興運動等の刺戟）	一三	五
脫教せざるもの	七四	一九
計	一九五	四七

動機＼教團別＼類別	青林教	上帝教	水雲教	大道教	人天教	大華教	東學教	大同教	平化教	天伏教	白々教
脱教の動機	誠米金納付等の經濟的苦痛に並時間の空費あるのみでなることなしとして何等得ると	三	三四		四						二
	教主の登極又は自己の望み現實なしでの	二									
	何等社會的活動なしとして		一								
	同教の趣旨（主義）行禁酒斷煙等）が容易に得ず又は集合禮拜障支に家業とり										
	教主又は教布幹部の正行爲が暴露されし時	三	二								
	中央本部の紛爭に因り										
	信頼してたる信者が脱教したでの	一									
	大正八年三・一事件後										
	布教中心人物を失つたでの					二	一				
	布教所が移轉したでの										
	官憲の取締を受けて										一
	結髮するを旨教を嫌ひ										
	男子側の反對で（婦女子信徒）										
	破産者を見たでの										
	他に生活の安定が確立されたでの										
	一般地方民の侮辱を受けるでの										
	革命思想注入機關時つたをとる										
	教徒の自覺に因り農村振興運動等の刺戟	一五	八				一	一	一		
	脱教せざるもの	一五	二六	一	一〇	八	八	二	三	二	二
	計	二四	六七	一	一五	二	九	二	四	二	四

動機＼教團別＼類別	无窮道	天命道	无極大道教	天法教	元倧教	小計	普天教	無極大道教	甑山大道教	甑山教	彌勒佛教	太乙教	龍華教	東華教	元君教	大世教	仙道教	小計
脱教の動機						三六	三	三				一						三
				一		六	五											五
		一				二												
						二												
						八	七											七
						三	一	一										二
						一												
						一七												
					一	五	三	一				一		一		一		六
						一	一											一
						八	三	二										五
							一											一
						一	一											一
						二												
						四	二											二
						一												
						六四	四三	六	二	一		一		一				五三
						二〇七	五九	一二	七	三	三	一	七		一		一	九三
						四六九	一五七	二四	九	一	四	四	一	八		一	一	二二

教団別＼動機類別	金剛道	圓覺玄元教	光華教	正道教	大覺教	佛法研究會	甘露法會	靈覺教	佛教極樂會	圓融道	小計
脱教の動機											
誠米金納付等の經濟的苦痛											
並に時間の空費あるのみで											
何等得ることなしとして	二			一							三
教主の極又は自己の											
望み實現なしとして											
何等社會的活動											
同教の趣旨（主義）行動											
禁酒斷煙（等）が容易に											
行ひ得ず又は集合禁止											
家業に支障あり											
教主又は布教部幹部の											
正行爲が暴露され	一										一
中央本部の紛爭に											
信頼してゐた信者が											
脱教したのである											
大正八年三月一日事件後											
布教中心人物を失つたので											
布教所が移轉したので											
官憲の取締を受けて											
結髮する旨を嫌ひ											
男子側の反對で（婦女子信徒）											
破産者を見たので											
他に生活の安定が確立されたので											
一般地方民の侮蔑を受けるので											
革命思想注入機關たる知つたので											
教徒の自覺に因り農村振興運動等の刺戟											
脱教せざるもの	二	一	一	一	七	二	四	三	一	一	二三
計	二	一	一	一	七	二	五	三	一	四	二七

教団別＼動機類別	檀君教	三聖教	大倧教	筭子教	七星教	關聖教	靈神會	崇神人組合	皇祖敬神崇神教	聖化教	文化研究會	西鮮神道同志會	矯正會	神理宗教	知我教	詠歌舞教	小計	太極教
脱教の動機																		
誠米金納付等の經濟的苦痛																		
並に時間の空費あるのみで																		
何等得ることなしとして	一								二	一							四	
教主の極又は自己の																		
望み實現なしとして																		
何等社會的活動																		
同教の趣旨（主義）行動																		
禁酒斷煙（等）が容易に																		
行ひ得ず又は集合禁止																		
家業に支障あり																		
教主又は布教部幹部の																		
正行爲が暴露され																		
中央本部の紛爭に																		
信頼してゐた信者が																		
脱教したのである																		
大正八年三月一日事件後																		
布教中心人物を失つたので																		
布教所が移轉したので																		
官憲の取締を受けて																		
結髮する旨を嫌ひ																		
男子側の反對で（婦女子信徒）																		
破産者を見たので																		
他に生活の安定が確立されたので																		
一般地方民の侮蔑を受けるので																		
革命思想注入機關たる知つたので																		
教徒の自覺に因り農村振興運動等の刺戟																		
脱教せざるもの	一	五	二	二	三	三	一	一	三	一〇	六	一	一	一	一	二	二七	四
計	七	一	二	二	三	三	一	一	三	一〇	六	一	一	一	一	二	二七	四

教團別＼動機類別	脫教の動機	大聖院	孔子教	性道教	大宗教	大成教會	基聖院	小計	天人道	東天教	覺世道	濟化教
	誠米金納付等の經濟的苦痛並に時間の空費あるなどとなりてしみでのる得ることしなし				二			三			一	
	何教主の登極又は現實の自己の望野が望し											
	等社會的活動											
	同教旨趣（主義）禁酒斷煙等）行遂し得ず又は集合障支あり											
	教正主又は布教部の幹部が暴露され時											
	中央本部の紛爭に因り											
	信者が頼脫し教たるてのたし											
	大正八年三・一事件後											
	布教中心人物を失つたので							二	一	一		
	布教所が移轉したので											
	官憲の取締を受けて											
	結髮する教旨を嫌ひ											
	男子側の反對で（婦女子信徒）											
	破產者を見たので											
	他に生活の安定が立たれたので											
	一般地方民の侮辱を受けるので											
	革命思想注入機時たつ知ることを											
	教徒の自覺に因り農村振興運動等の刺戟							一				
	脫教せざるもの	一		一	四	四	一	四	一	一	一	
	計	一	一	一	八	四	一	一〇	一	一	一	一

教團別＼動機類別	脫教の動機	天化教	小計六七	總計
	誠米金納付等の經濟的苦痛並に時間の空費あるなどとなりてしみでのる得ることしなし	一	二	三五
	何教主の登極又は現實の自己の望野が望し			二
	等社會的活動			二
	同教旨趣（主義）禁酒斷煙等）行遂し得ず又は集合障支あり			二
	教正主又は布教部の幹部が暴露され時			二六
	中央本部の紛爭に因り			一四
	信者が頼脫し教たるてのたし			一
	大正八年三・一事件後			一七
	布教中心人物を失つたので			一六
	布教所が移轉したので			二
	官憲の取締を受けて			一五
	結髮する教旨を嫌ひ			一
	男子側の反對で（婦女子信徒）			一
	破產者を見たので			二
	他に生活の安定が立たれたので			二
	一般地方民の侮辱を受けるので			七
	革命思想注入機時たつ知ることを			一
	教徒の自覺に因り農村振興運動等の刺戟			一三
	脫教せざるもの	一	三	一六七
	計	一	五	七四

（附）第三十九表　各道教別信仰表

1. 京畿道

教別＼信仰類別名	脫教の動機	天道	侍天	靑林
	入教の動機 布教者の勸誘に依り	二		一
	布教者の無糖な言説に流惑は又てれさ			
	官制的許可あり如く裝ひ強迫を教入につたので			
	不明			
	計	二		一
	入教の目的 安活生・災病無息定所・天惠に就頗安樂りよるす繁榮孫子・世處し	三		一
	獨鮮朝・行遂義主族民立得獲位地典特の後	五		一
	教主登極後の教高任官就位高			
	事業組合員となり生活の資を得る			
	精神修養			
	不明	八	三	
	計	三	三	一
	信受狀態 信仰觀念薄弱			
	信仰觀念濃厚			
	不明	三	三	一
	計	三	三	一
	脫教の動機 誠米金納付等の經濟的苦痛並に時間の空費あるなどとなりてしみでのる得ることしなし	一		
	布教者を失つたので人物中心			
	脫教せざるもの	三	三	一
	計	三	三	一

信仰類別 ＼ 教名	水雲	大道	人天	大華	白々	普天	圓覺玄元	正道	大覺	佛法研究會	甘露法會
入教の動機 布教者の勸誘に依り	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
布教者の流説は稽無の惑に言なされて又	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
官制的に入教を迫つたので許可あるく如く裝ひ強	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
不明	一	一	一	一	一	六	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	七	一	一	一	一	一
入教の目的 無病息災・活生・安定所	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
頌成就・天惠に世處し・子孫繁榮す	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
民族主義・行政的特典の獨立後鮮朝獲得	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
教主登極後の高位高官就任	一	一	一	一	一	二	一	一	一	一	一
事業組合員となり生活の費を得る	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
精神修養	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
不明	一	一	一	一	一	五	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	七	一	一	一	一	一
信受狀態 信仰觀念薄弱	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
信仰觀念濃厚	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
不明	一	一	一	一	一	七	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	七	一	一	一	一	一
脫教の動機 誠的あると米金納付時間等何でいながら苦痛のみのること	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
布教中心人物を失つたので	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
脫教せざるもの	一	一	一	一	一	七	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	七	一	一	一	一	一

2. 忠清北道

信仰類別 ＼ 教名	總計二九	東天	天道	大成教會	大宗	神理宗	矯正會	文化研究會	聖化	崇神人組合	靈神會	關聖	檀君	圓融道	佛教極樂會	靈覺
入教の動機 布教者の勸誘に依り	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
布教者の流説は稽無の惑に言なされて又	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
官制的に入教を迫つたので許可あるく如く裝ひ強	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
不明	四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二	二	一	一
計	五	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二	二	一	一
入教の目的 無病息災・活生・安定所	六	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二	二	一	一
頌成就・天惠に世處し・子孫繁榮す	六	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
民族主義・行政的特典の獨立後鮮朝獲得	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
教主登極後の高位高官就任	四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
事業組合員となり生活の費を得る	四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
精神修養	一七	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
不明	五	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二	二	一	一
計	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
信受狀態 信仰觀念薄弱	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
信仰觀念濃厚	四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二	二	一	一
不明	五	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二	二	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
脫教の動機 誠的あると米金納付時間等何でいながら苦痛のみのること	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
布教中心人物を失つたので	四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二	二	一	一
脫教せざるもの	五	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二	二	一	一

2. 忠清北道（續）

名＼類別＼教信仰	聖化	詠歌舞	性道	大宗	總計一五
信受狀態					
教理は解する	一	一	一	三	三
少しも教理を解せず	一	一	一	一	三
信仰觀念濃厚	一	一	一	一	五
信仰觀念薄弱	一	一	一	一	二
不明	一	一	一	一	一
計	一	一	一	三	四七
脫教の動機					
誠金米納付の經濟的苦痛	一	一	二		二〇
時間の虛費あるところの					
何でもでのいなかつた					
教主の登極又は望み	一	一	一		五
己の自由なる現實の野心					
同教の趣旨（主義遂行）	一	一	一		六
禁酒斷煙（等）が容易に					
行はれず又は集合し得て					二
家業に支障あるとして					
教主又は教幹部の不正	一	一	一		一
布教が暴露されたる爲					
男子側の反對（婦女子信徒）	一	一	一		四
一般地方民の侮蔑	一	一	一		一
教徒の自覺（農村振興運動）の刺戟	一	一	一		三
脫教せざるもの	一	一	一		四
計	一	一	一	三	四七

名＼類別＼教信仰	天道	侍天	青林	上帝
信受狀態				
教理は解する	一	一	一	一
少しも教理を解せず	一	一	一	一
信仰觀念濃厚	一	一	一	二
信仰觀念薄弱	二	一	一	一
不明	五	二	一	四
計	九	三	一	七
脫教の動機				
誠金米納付の經濟的苦痛	四	二	一	六
時間の虛費あるところの				
何でもでのいなかつた				
教主の登極又は望み				
己の自由なる現實の野心				
同教の趣旨（主義遂行）				
禁酒斷煙（等）が容易に				一
行はれず又は集合し得て				
家業に支障あるとして				
教主又は教幹部の不正				
布教が暴露されたる爲				
男子側の反對（婦女子信徒）				
一般地方民の侮蔑				
教徒の自覺（農村振興運動）の刺戟				三
脫教せざるもの				一
計	九	三	一	七

名＼類別＼教信仰	天道	侍天	青林	上帝	水雲	人天	東學	普天	無極大道	金剛道	光華
入教の動機											
布教者の勸誘に依り	二	三	一	二	五		一	二	一	二	一
布教者の甘言利說に乘ぜられ	四			四	二	一	一	一	一		
布教者の無稽な說に惑はされ								三			
教流の主義と共鳴し											
理說又は奇怪なる心理的に											
教ろと時流に乘じて											
一驅的好奇心を刺戟し											
不明											
計	九	三	一	七	八	一	一	六	一	三	一
入教の目的											
無病息災・就職・子孫繁榮・家庭の安定・生活の安樂・天惠に恵まれ・世間に處する	四	二		五	四		一				一
民族主義・獨立・朝鮮行政・遂行の特權・後援の獲得・地位の典型	三		一		一						
教主の登極・後援・高官・高位・高任・就職									一		
社會的に認められる					一						
事業組合員となる生活の資を得る											
惡疫・年凶・ずれに侵されず・戰亂の禍を受けない											
靈術・神秘的力を得て修得し											
精神修養											
道學君子となり後世に名を成す											
不明											
計	九	三	一	七	八	一	一	六	一	三	一

信仰類別 ＼ 教名	水雲	人天	東學	普天	無極大道	金剛道	光華	聖化	詠歌舞	性道	大宗
信受狀態	教理は解する	信仰観念薄弱	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	教理を解せず	少し	—	—	二	—	—	—	—	—	—
	信仰観念濃厚	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	信仰観念薄弱	三	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	不明	三	—	二	—	三	—	—	—	—	二
	計	八	—	六	—	三	—	—	—	—	三
脫教の動機	米金納付の等経済的苦痛	五	—	—	—	—	—	—	—	—	二
	時間の虚費あるとみなし	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	教主の登極又は己れの望む現実なしとみなし	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	同旨趣の教主（行義逢主）の煙酒禁斷等が易容に実行し得ず又は集合礼拝を禁止し支障あるとして	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	教主又は布教者の不正行為が暴露されたとき	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	男子側の反封建（婦女子信徒）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	一般地方民の侮蔑を受けるもの	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	教徒自覚の振興運動等の村農（戴剌）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	脫教をさせるもの	—	—	四	—	—	—	—	—	—	—
	計	八	—	六	—	三	—	—	—	—	三

3. 忠清南道

信仰類別 ＼ 教名	天道教	侍天教	青林教	上帝教	水雲教	大華教	大同教	天伏教	總計
入教の動機	布教者の勸誘に依り	—	—	六	三	—	—	—	一五
	布教者の甘言利說又は迷信的言辭に乘ぜられ	二	一	二	二	—	—	—	三
	布教者の無稽な言說流布又は惑說に依てされ	三	—	—	—	—	—	—	三
	地方勢力者が入教を勸誘し又は附和雷同したのである	—	—	—	—	—	—	—	—
	父祖の信仰を承繼	—	—	—	—	—	—	—	—
	教堂を建てたのである	—	—	—	二	二	—	—	一
	教理は主義と共鳴して又共にすると	—	—	—	二	—	—	—	—
	同教を何か等利用して會社（反感的）又は物質的慰安を與へんとして	—	—	二	—	—	—	—	一
	轉教者	—	—	—	—	—	—	—	—
	不明	—	—	—	—	—	—	—	—
	計	九	二	一	〇	五	二	一	一
入教の目的	病息災・生活安定に依り	—	—	五	八	四	二	—	一
	無病息災・生活安定・天惠に依り世代繁榮し子孫に福祉を期待する	—	—	—	—	—	—	—	—
	民族主義・獨立運動に依り民族の特典を得る	七	—	—	—	—	—	—	—
	教主の登極後高位高官に就任	—	—	—	—	—	—	—	—
	社會的に認められる	—	—	—	二	—	—	—	—
	金儲が出來、警察の取締を受けない	—	—	—	—	—	—	—	—
	死亡した父母の霊魂と相會し得る	—	—	—	—	—	—	—	—
	死後極樂淨土に行く	—	—	—	—	—	—	—	—
	精神修養	—	—	—	—	—	—	—	—
	不明	—	—	—	—	—	—	—	—
	計	九	二	一	〇	五	二	一	一

3. 忠清南道（續）

信仰類別＼教名	天道	侍天	青林	上帝	水雲	大華	大同	天伉	普天	金剛道
信受狀態 少し教理を解せず	二	一	一	一	一	三	一	一	一	一
信受狀態 信仰觀念濃厚				一			一		二	一
信受狀態 信仰觀念薄弱	三	一	一	三	一	一	一	一	二	一
信受狀態 不明	四	一		六	九	二		一	七	一
信受狀態 計	九	二	一	二	一〇	五	二	一	二	一
脫教の動機 誠的あること										
脫教の動機 米金苦痛のころがみで										
脫教の動機 納付時間何等いなしでの										
脫教の動機 經濟費の虛得等のでの	一		一	六	五			一	一	
脫教の動機 教主登極又は自己の野望が實現しないでの										
脫教の動機 教主登極又は自己の野望が實現しないでの										
脫教の動機 布教中心人物を失つたでの										
脫教の動機 信頼してたいた信者が脫教したでの										
脫教の動機 教徒の自覺（農村振興運動等の刺戟）	五								五	
脫教の動機 脫教せざるもの	三		一	一	二	四	四	二	四	
脫教の動機 計	九	二	一	二	一〇	五	二	一	二	一

信仰類別＼教名	普天道	金剛道	光華	檀君	箕子	七星	關聖	聖化	性道	覺世道	總計一八
入教の動機 布教者の勸誘に依り	二								一		一四
入教の動機 布教者は又利甘言迷信的言辭に乘ぜられ	六	一		一		一		二			一〇
入教の動機 布教者は又流説無稽な言葉に惑はされて	一										六
入教の動機 地方勢力者が誘惑し又は教入者に附和雷同し勸誘のでの	二										二
入教の動機 父祖の信仰を承繼											二
入教の動機 教堂を建てのでの							二				七
入教の動機 理教は又主義と共鳴し教理とすると											二
入教の動機 同教を何等か利益反感を與へ（社會的）てしとんせに物喰はせ（てしとんせに物喰は）											三
入教の動機 轉教者											一
入教の動機 不明											六
入教の動機 計	二										六三
入教の目的 無病息災・生活安定・福祉向上・天惠に浴し子孫繁榮し世代に亨受する待期を信じ帝天	四										三三
入教の目的 民族主義・朝鮮獨立運動ノ特殊的典型											九
入教の目的 教主登極後の高位高官就任	二										五
入教の目的 社會的認められ											二
入教の目的 儲金の出納、警察の取締を受けない											二
入教の目的 死亡の父母と魂相會し得											一
入教の目的 死後極樂淨土に行く											三
入教の目的 精神修養											二
入教の目的 不明											七
入教の目的 計	二										六三

4. 全羅北道

信仰類別 ＼ 教名	光華	檀君	箕子	七星	關聖	聖化	性道	覺世道	總計一八
信受狀態 少し教理を解せず									八
信仰観念濃厚	一								五
信仰観念薄弱							一		二
不明						二		一	三九
計	一	一	一	一	二	二	一	一	六二
脱教の動機 誠的あと米苦るこ金痛のろ納とみが付時でな等間何いの等の経虚得で済費る									一五
教主登極又は自己の望が実現しないので									一
布教中心人物を失つたので									三
信頼してたいたので者が脱教したので									一
教徒の自覺（農村振興運動等の刺戟）									一四
脱教せざるもの									二九
計	一	一	一	一	二	二	一	一	六二

信仰類別 ＼ 教名	天道	侍天	青林	上帝	水雲	大華	東學	普天	無極大道	甑山大道	甑山	彌勒佛
入教の動機 布教者の勧誘に依り												
布教者又は説辭に迷信の甘言乗ぜられ利言	一					一		一	一			
布教者流説の無惑に糟なさは言れて又				一				四				一
教堂を建てたので						二						
教轉										一		
不明	二	一	一	七	三	一	一	五	一	一	一	一
計	三	一	一	八	三	四	一	一〇	一	二	一	二
入教の目的 無病息災・定所・成就・生活安惠天・就成頗に樂なりよに世し、子孫繁榮するる						三						一
教主登極後の高位高官就任								二		一	一	
祈禱が公認される												
惡疫に侵されず、凶年・戰亂の禍を受けない												
靈術秘的を修得し力を得る									一			
不明	三	一	一	八	三	一	一	八		一	一	一
計	三	一	一	八	三	四	一	一〇	一	二	一	二

4. 全羅北道（續）

信仰類別 ＼ 教名	太乙	東華	元君	大世	光華	佛法研究會	聖化	大聖院	大宗	總計 二一
入教の動機	教者の勧誘に依り布									三
	教者又は迷信的言辭に甘言利言に乗ぜられ布	一								五
	教者の無稽な言説に惑はされて流布									六
	教堂を建てたので									二
	轉教									二
	不明									四
	計									五九
入教の目的	病息災・生活無定所・成就安楽に恵まれ世子孫繁栄す									一〇
	主教の極登後高官高位就任									五
	祈願が公認される									一
	疫病・戰乱・年凶に侵されず、受難を免れ									一
	霊術・秘術を得て力を得修し									一
	不明									四
	計									五九

信仰類別 ＼ 教名	天道	侍天	青林	上帝	水雲	大華	東學	普天	無極大道	甑山大道	甑山	彌勒佛
信受狀態	信仰觀念濃厚											
	信仰觀念薄弱											
	教本部に移住を決し又は私財を獻じたり											
	不明											
	計	三	一	一	八	三	四	一〇	一	一	二	二
脫教の動機	誠的苦痛と虚費の得なること米金納付の時間等何でのいながら等の經濟											
	中央本部の紛争に因り											
	布教中心人物をつ失ったので											
	官憲の取締を受けて											
	教徒の自覺（農村振興運動等の刺戟）											
	脫教せるものも											
	計	三	一	一	八	三	四	一〇	一	二	一	二

信仰類別＼教名	總計	佛法研究會	大世	東華	太乙	彌勒佛	甑山	普天	水雲	上帝	侍天	天道
入教の動機	一一											
教布者に誘勧の依り	一六	一						五		二		八
教布者の甘言迷信乗せられ又は説辭言的	一五			一	一	一		四		六		二
教布者の無稽な流言蜚語に惑はされて	一三							九		三	二	八
親族・知己等の誘勧がなくなむしたこと	二						一					一
祖先の遺言に依り	一											一
同利を教用せんとして何等かの	一		一									
轉教者	四			一					二	一		
計	六	一	一	二	一	一	一	八	二	三	二	一〇
入教の目的												
無病息災・長生・安定・福祉・天惠に就て所謂世界に樂安り子孫繁榮す	一三			一	一	一	一	三	二	七		六
獨立・自主・民族・朝鮮・義・人・行・遂特の後立獨鮮朝典得獲位地的	一三									三	一	八
教主登極後の高位高官就任	一四							三		一		
社會的に認められる	三											三
事業組合員となり生活費を得る	二	一									一	
除暴救民し權力を得て	二											二
惡疫に侵されず因年・戰亂の禍を受けいなし	一							一				
斷髮を免る	一							一				
精神修養	一										一	
不明	三		一	一						一		
計	六	一	一	二	一	一	一	八	二	三	二	一〇

5. 全羅南道

信仰類別＼教名	總計	大宗	大聖院	聖化	佛法研究會	光華	大世	元君	東華	太乙
信受狀態	二一									
信仰觀念濃厚	一				一					
信仰觀念薄弱	五						一		一	
教本部に移住を決行し又は私財を獻じたこと	一									
不明	五	二	一	一	二	一	一	一		二
計	五九	二	一	一	三	一	一	一	一	二
脫教の動機										
誠金納付等の苦痛と時間の費消の為に止むなく	二									
中央本部の争紛に因り	一									
教中心人物の失つたこと	一						一			
布教の官憲の取締を受けて	一									
教徒の自覺(農村振興運動等の刺戟)	六							一		
脫教せざるもの	四	二	一	一	三	一		一		二
計	五九	二	一	一	三	一	一	一	一	二

5. 全羅南道（續）

信仰類別＼教名	天道	侍天	上帝	水雲	普天	甑山	彌勒佛	太乙	東華	大世	佛法研究會
信受狀態　信仰觀念濃厚	一			一	四						
信仰觀念薄弱	八		三		一						
不明	二一	二	九	一	一三	一	一	一	二	一	一
計	二〇	二	三	二	一八	一	一	一	二	一	一
脫教的動機　誠心的苦痛のあることと米金納付時の間等何でみのいながろと納付等の得等のでのいなが	一〇		九		六						
教己主登極望が又は現実のいなの主の野なし	一	一	一		一						
中央部に因り紛爭本	二				一						
大・正八年一事件後三	一										
結髮を嫌つて教旨するる					一						
破産者を見たもので					一						
一萬般地方の民の受けるもので悔	一		一		一						
教徒の自覺（農村）興運動の等（戟刺）	三		一		四						
脫教せるもの	二		一	二	三	一	一	一	一		
計	二〇	二	三	二	一八	一	一	一	二	一	一

6. 慶尚北道

信仰類別＼教名	天道	侍天	青林	上帝	水雲	東學	天伏	普天	無極大道	總計
入教の動機　布教者の勸誘に依り				一				三	一	六
布教者又は甘言利說の迷信に乘ぜられ辭言的信に言れ								二		三
布教者の無稽な流說に惑はされ言て	二	一						一	二	四
親族・知己等が勸誘したくなるものでの								一		六
教堂を建てたもので		一								六
教理又は主義と共鳴すること	一									二八
轉教者					一					四
不明	九	三	五	一〇	六	七	一	一六	一四	三
計	一〇	四	五	一二	七	七	一	二三	一七	一二
入教の目的　民族主義獨立的行動特後地位得獲									一	一
鮮族主義獨立的行動特後地位得獲										一
朝鮮の特典										一
侵略戰爭に伴ひ、惡疫流行・凶年・飢饉・疫病・戰亂・ずれの禍を受けはみす死者は榮養不良・他の原因により				一				二		三
不明	四	五	一〇	七	七	一	二	一六		八
計	一〇	四	五	一二	七	七	一	二三	一七	一三

信仰類別＼教名	概山	東華	皇祖敬神崇神	總計 一一
入教の動機 布教者の勸誘に依り				五
布教者又は甘言利誘に迷信的言辭に乘ぜられ				二
布教者の無稽な言説は流説に惑はされて				三
親族・知己等が勸誘したくなるもの				一
教堂を建てたもので				一
教理又は主義として共鳴するところ				一
轉教者				一
不明	二	一	一	五
計	二	一	一	八九
入教の目的 民族的獨立主義の後に遂行される特典の地位を獲得				一
惡疫・戰亂・侵略・禍の徒に苦しめられ、教徒は皆死亡す				三
不明	二	一	一	五
計	二	一	一	八九

入教の動機欄―不明なものの大多數は布教の衝に當る教幹部の甘言利說を以てする勸誘に依り入教

入教の目的欄―不明なものの大多數は無病息災家運を挽回し、好運に惠まれ子孫繁榮して聽て富を得、或は高位高官に就くものとなし、中には民族的觀念から朝鮮を獨立せしめて特典的地位を獲得せんとするものである

6. 慶尙北道（續）

信仰類別＼教名	天道	侍天	靑林	上帝	水雲	東學	天伊	普天	無極大道	甑山	東華	皇祖敬神崇神	總計 一二
信受狀態 信仰觀念濃厚	一							一					二
信仰觀念薄弱								一					一
教本部に移住を決行し又は私財を獻じたもの		一						一					二
不明	九	三	五	二	七	七	一	一〇	一七	二	一	一	八四
計	一〇	四	五	二	七	七	一	一三	一七	二	一	一	八九
脫教の動機 誠米金納付等の經濟的苦痛と時間虛費のあること								一					一
教自現主己し主の登野なし極望いのは實で								一					一
教部墓主の露又は不正布行れたと教爲幹がき	一							一					三
中央本部に因り									一				一
紛爭事件の													一
大正八年三・一八事件後		一											一
布教者の心中つた人物を失ひ								一					一
官憲の取締を受けて	一								一				二
一般地方民を受けるもの								一					一
教徒振興自覺運動等（農村改良）				一				九	五				一五
脫教せざるもの	八	二	五	一〇	七	七	一	九	一〇	二	一	一	五六
計	一〇	四	五	二	七	七	一	一三	一七	二	一	一	八九

信受狀態欄―不明なものの大多數は不純な目的を有するもので信仰觀念濃厚

7. 慶尚南道

信仰類別＼教名		天道	侍天	青林	上帝	普天	無極大道	甑山	龍華	大覺
入教の動機	布教者の誘勸によりて	二	二	一	五	二	一	二	一	一
	布教者の甘言利說又は迷信の迷信的辭言に迷ひ	二	二	一	三	五				
	布教者の稽無な言說流惑に說は又てれさ	三			一	一	一	一	一	
	親族・知己等が誘勸し奬めたのでなくて	二				一				
	布教所に出入して中載刺を受け	一								
	教理又は主義と共鳴してすること					一				
	教主に私淑して					一				
	一驅時的奇心に流れて好と漫然					二				
	不明	二			二					
	計	三	四	一	二	三	二	二	一	一
入教の目的	無病息災・安定生活・惠天就成願所・世處に樂安りよに天、るす榮繁孫子し待期を福幸じ信を帝	一	二		三	二	一	一	一	
	民族主義・遂行・特の後立獨鮮朝得獲位地的典	六				一				
	教主登極後の高位官就任				二	一〇	一			
	一般朝鮮人厚りよしとしべるき遇	二								
	事業組合員となりる得を資の活生	一								
	靈術を修得し神秘を得る豫來未を力的知を風換雨の呼術を萬事意如るなと得て					一				
	精神修養	一			二					
	不明	一			四		一	一		
	計	三	四	一	二	三	三	二	二	一

7. 慶尚南道（續）

信仰類別＼教名		佛法研究會	大倧	總計 一〇
信受狀態	熱心に信仰し教旨を解なるがいなし	一	一	四
	少しも理解せず	一	一	三
	信仰觀念濃厚	一	一	七
	信仰觀念薄弱	一	一	四
	不明	一	一	一
	計	一	一	一
脫教の動機	誠金納付等の經費苦痛と時間虛的のみでの得ないあるのなどこと	一	一	二
	教部の主暴露又は不正行爲がきたれと	一	一	七
	布教者の心人物中を失つたのでの	一	一	五
	官憲の取締を受けて	一	一	三
	教徒の自覺（農村振興運動等の刺戟）	一	一	一
	不明又は脫教せざるもの	一	一	一
	計	一	一	一
		一	一	二

信仰類別	侍天道	青林道	上帝道	水雲道	人天道	大華道	平化道	白々道	无窮道	普天道	彌勒佛	仙道	正道	筑子	崇神人組合	聖化	太極道	性道	總計 一九
入教の動機	一		五	五						三			二						三二
		一	二		一					六					一				三
	二			一						三		一							九
	一									四									七
													二						三
			一		一														七
																			二
	一		一						一										二
	一		一											一					七
	七	一	二	七	四					一七		一	四						八〇
入教の目的	一			三	三	三			一	四				一	三				二五
							一												一四
				一	一					五					三				九
														一					一
																			一
										一									一
												一							二
										一									二
	四		二	一						五		一		一					二五
	七	一	二	七	四					一七			四						八〇

8. 黃海道

信仰類別	龍華大覺	佛法研究會	大徐	總計 一〇
信受狀態				
熱心に信仰はなし敎旨を解せずして				一
少もし敎理を解せずして				五
信仰觀念厚濃				二
信仰觀念薄弱				五
不明	一	一	二	三七
計	一	一	二	四〇
脫敎の動機				
全く誠實な苦痛的時間と費用の為に得る何等かのみのあるものでないことを				一六
敎部の暴露は又不正行爲を敎主の幹部たちが				一
敎中心人物の失つたものを布敎			一	三
官憲の取締を受けて				一
敎徒の自覺（農村振興運動等の刺戟）				五
不明又は脫敎せざるもの	一	一		一四
計	一	一		四〇

信仰類別	天道
入敎の動機	六
	一
	二
	二
	一
	五
	一
	一
	二
	八
入敎の目的	三
	九
	一
	一
	一
	一
	一
	一
	四
	八

8. 黄海道（續）

信仰類別 ＼ 教名	天道	侍天	青林	上帝	水雲	人天	大華	平化	白々	无窮道	普天
信受狀態											
少しも教理を解せず										一		
信仰觀念濃厚	三							一			二
信仰觀念薄弱	三	二		三	二	一					六
教本部に移住を決行し又は私財を獻じたる				二							四
不明	一三	五	一	六	五	三	一		一		五
計	八	七	一	二	七	四					一七
脱教の動機											
誠意苦痛のあることろなくみのいなでの	四	三		二	二				一		二
教主の自己現野極望なし又は登實でのい											一
同行易集合禮拜實行斷酒禁煙等の趣旨に支障あり主義者が容ず得し又は家族と					一						
教主部本部は、又不正確布教が爲行されたきと					一						三
中央本部に紛爭の原因	二										
大正八年三月一日事件後	六										
布教を中心人物失つたもの				一			一				
官憲の取締を受けて		一									
教徒の自覺振興運動等（農村啓蒙及農村改良）	二	一		三	一						四
脱教せざるもの	四	二	一	五	二	四		一		一	七
計	八	七	一	二	七	四					一七

9. 平安南道

信仰類別 ＼ 教名	彌勒佛	仙道	正道	箕子	崇神人組合	聖化	太極	性道	總計一九	天道
入教の動機										
布教者の誘勸に依り									一	五
布教者の甘言利說に迷ひ信仰は迷言的辭									六	八
布教者の稽言無なれは惑に流說は									一九	一
親族・知己等の勸誘なくしたでのなむ									六	一
教理と主義は又にすると鳴共ろしてし									四	一
一驅時的好奇心と然漫れて									四	一
轉教者									八〇	一
不明										一
計									一五	一六
入教の目的										
生活・災病息・安定無天惠・就成願所世界に樂安りよにす榮繁孫子、し			一						一五	四
民族主義遂行・特立獨鮮朝の後典得位地的獲									一	八
教主登極後の高官位就任										一
役員と社會組織なれ										一
事業組合員生活資を得る									四	一
死亡し父母生回す									二	一
靈術を修得し力借的力縮地言豫（身道）神秘									六	一
精神修養									二	一
農村啓蒙及文化運動									二	一
不明									三	三
計									三五	一六
									八〇	

信仰類別＼教名	檀君	西鮮神道	同志會	天化	總計一四
受信狀態					
少しも教理を解せず	三		一		二六
厚い信仰觀念					二〇
薄い信仰觀念					一〇
教本部又は移住者に決行した私財を獻じ					一
同じく教感化した青年等を嫌惡し					一
不明					六
計					二
					四
	四	一	一	一	一〇
脫教の動機					
誠金米付納の時間等何でのいながらと					六
苦痛と虛費の經濟の	二				二
のみでなること					一
何等社會的活動として					四
教主又は布教の部不正行爲が					二〇
墓露されたきと					四
中央本部の紛爭に因り					一
大正八年三・一事件後					一
官憲の取締を受けて					一
破産者を見たので					一
他に生活の安定が確立されたので					一
教徒の自覺（農村振興運動等の刺戟）					二
脫教せざるもの					一
					二
計	四	一	一	四	一〇

9. 平安南道（續）

信仰類別＼教名	天道（六任）	同（聯合會）	侍天	青林	上帝	水雲	人天	平化	天命道	无極大道	普天	太乙
入教の動機												
布教者の勸誘に依り	三				一	六			一		六	
又は利甘言的に迷信者の言辭に說迷ひ				一	一	三	三	一		一	一	
布教者の無稽な流說に惑はされて言	一				一	二		一			五	
親族・知己等の誘勸が強いなくしたなでの						一						
教理又は主義と共鳴して奇心と												
一時的好奇心に駆られて漫然と			一		一		一				一	
轉教者		一				一						
不明											二	
計	四	一	二	一	四	三	四	二	一	一	一四	一
入教の目的												
無病息災・定住所・就職に安樂を求め						二	三	二	一	一	三	
生活・天惠・子孫繁榮を												
民族主義獨立の後に		一			一	四					四	
朝鮮人の獨立運動の後に												
民族主義獨立の後に特權的地位を獲得し												
教主登極の後に						一					三	
高官就任の後に												
役員となり社會的に											一	
事業組合員となり認められる												
生活の責任を得る												
死亡した父母が												
回生して生活する						一						
靈術・神秘的力を得て修身・借地・豫言等を												
精神修養											一	
農村啓蒙及文化運動												
不明						六					一	
計	四	一	二	一	四	三	四	二	一	一	一四	一

10. 平安北道

信仰類別＼教名	水雲	人天	平化	天命道	无極大道	普天	太乙	檀君	西鮮神道	同志會	天化	總計一四
受信狀態 少もし教理を解せず	二				一							五
信仰觀念濃厚			一		一							八
信仰觀念薄弱	二					一	一	三		一		三
教本部に移住を決し又は私財を獻じたる					一							一
同教に感じたる惡嫌を（青年等）				一								二
不明	八	四	一			二	一	一	一			四
計	三	四	二	一	一	四	一	四	一	一	一	七
脫教の動機 誠金米納付等の苦痛と時間の虛費と得る何等のあるみでのいながらこと	五	三				七					一	二六
何等の會社的活動	一			一								二
教主は又布教部の不正行爲が暴露されたきと						一						一
中央本部の爭紛に因り												一
大正八年三・一事件後												二
官憲の取締を受けて						一						一
破産者を見たもの												一
他に生活の安定が確立されたもの												二
教徒の自覺（農村）振興運動の等（戟刺）	三		一		二			一				三
脫教をさせるもの	二	一	一		三	一		三	一	一		三
計	三	四	二	一	一四	一	一	四	一	一	一	七

11. 江原道

信仰類別＼教名	天道	侍天林	青天君	普天教	孔子	總計五
入教の動機 布教者の勸誘により	二					二
布教者の甘言利說又は迷信的辭言に迷ひ	一〇	一		三		四
親族・知己等が勸誘したくなむでのた	一			二		三
不明	一〇	三	一	一		五
計	二三	四	一	五	一	四
入教の目的 無病息災・生活安定・就所成願・天惠世に安樂りよし・處樂繁榮孫子、るす	二				一	三
民族主義運動・朝鮮獨立の後行・特典獲得地位	一〇					二
教主登極の後高位官就任				五		五
不明	二	三	一			五
計	二三	四	一	五	一	四
信受狀態 信仰觀念薄弱	二	三		二		六
不明	三	一	一	三	一	八
計	二三	四	一	五	一	四
脫教の動機 誠金米納付等の苦痛と時間の虛費と得る何等のあるみでのいながらこと	九	一		一	一	二
中央本部の爭紛に因り	四					四
大正八年三・一事件後	一					一
教徒の自覺（農村）振興運動の等（戟刺）	一			一	一	二
脫教をさせるもの	八	三	一	三	一	一六
計	二三	四	一	五	一	四

11. 江原道（續）

信仰類別	侍天	天道	聖三	星七	皇祖敬神崇	我知	道性	宗大	化濟	總計 二〇
信受狀態 少し教理を解せず	一	一	一	一	三	一	一	一	一	三五
信仰觀念濃厚	一	二	一	一	三	一	一	一	一	二九
信仰觀念薄弱	一	一	一	一	一	一	一	一	一	八
教本部に移住を決行し又は私財を獻じたる	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二
明不	六	一六	一	一	一	一	一	一	一	二
計	六	一八	一	一	一	一	一	一	一	一
脫教の動機 誠米金納付等の間時何いなかろ的苦痛と時みがこと	一	六	一	一	三	一	一	一	一	三三
教主己の登野望極又は現實でのいなし	一	一	一	一	九	一	一	一	一	一〇二
教部暴主の露又は不正れさ布行たと教爲がき	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二四
中央本部に爭の紛の因	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一六
大一正八年三・件事後	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一三
布教を中心人物尖つたで	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一三
布轉教し所が移たで	一	一	一	一	三	一	一	一	一	三
官憲の取締を受けて	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二
革命思想注入機關であること知つたで	一	一	一	一	一	一	一	一	一	五
教徒の自覺運動等振興（農村載刺）	三	一	一	一	五	一	一	一	一	三八
脫教ぜさるもの	三	二	一	二	九	一	一	一	一	一〇一
計	八	六	一	二	九	一	一	一	一	一〇一

信仰類別	侍天	天道	青林	上帝	水雲	人天	平化	白々	天法	普天	無極大道	旣山	東華
入教の動機 布教者の依り誘勸に	二	一	三	一	六	一	一	一	一	三	一	一	一
布教者は甘言利説迷信的言辭に迷ひ	一	一	一	三	一	二	一	一	一	二	一	一	一
布教者は無稽な言説流布の惑に迷はされて	一	一	一	一	一	一	一	一	一	七	一	一	一
親族・知己等が誘勸したでのなく	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
地方有力者が入教したでの又は誘勸	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
教理又は主義と共鳴したるすでのこと	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
新聞廣告に依り	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
轉教者	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
不明	三	一	四	五	三	二	一	一	一	二	一	一	四
計	六	五	七	四	三	四	一	一	一	二	三	二	四
入教の目的 無病息災・生活安定・就所・願惠に安樂に繁榮孫子、し世處りよ す	一	一	一	二	七	一	一	一	一	七	一	一	一
民族主義・獨立・朝鮮・特の後・行遂獨典得獲地位的	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
教主登極後の高位官就任	一	一	一	一	一	一	一	一	二	一	一	一	一
祈禱が認公される	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
斷髮を免る	一	一	一	一	一	一	一	一	二	一	一	一	一
精神修養	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
不明	二	三	四	五	四	一	一	一	一	一	一	一	四
計	六	五	七	四	三	四	一	一	一	二	三	二	四

信仰類別＼教名	青林	上帝	水雲	人天	平化	白々	天法	普天	無極大道	甑山	東華	三聖
信受状態　少し教理を解せず	—	—	—	一	—	一	—	一	—	—	一	—
信受状態　信仰観念濃厚	一	—	一	—	一	—	—	一	—	—	—	—
信受状態　信仰観念薄弱	一	一	—	—	—	—	—	三	—	—	—	—
信受状態　教本部に移住を決行し又は私財を献じた	—	—	—	—	—	—	—	二	一	—	—	—
信受状態　不明	三	六	一二	三	—	—	一	一四	二	二	三	一
信受状態　計	五	七	一三	四	一	一	一	二一	三	二	四	一
脱教の動機　誠米金納付等の經濟的苦痛と時間の虚費あるのみで何等得るところがないので	—	一	六	—	—	一	—	三	一	—	—	—
脱教の動機　教主の登極又は自己の野望が實現しないので	—	—	—	—	—	—	一	二	—	—	—	—
脱教の動機　教主又は布教幹部の不正行爲が暴露されたとき	二	—	—	—	—	—	—	一	—	—	—	—
脱教の動機　中央本部の紛争に因り	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
脱教の動機　大正八年三・一事件後	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
脱教の動機　布教中心人物を失つたので	—	—	—	一	—	—	—	一	—	—	—	—
脱教の動機　布教所が移轉したので	—	—	—	—	—	—	—	一	—	—	—	—
脱教の動機　官憲の取締を受けて	一	—	—	—	—	—	—	一	—	—	—	—
脱教の動機　革命思想注入機關であると知つたので	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
脱教の動機　教徒の自覺（農村振興運動等の刺戟）	—	三	一	—	—	—	—	七	一	一	—	一
脱教の動機　脱教せざるもの	二	三	五	三	一	—	—	五	一	一	四	—
脱教の動機　計	五	七	一三	四	一	一	一	二一	三	二	四	一

	七星	皇祖敬神崇神	知我	性道	大宗	濟化	總計 二〇
信受状態　少し教理を解せず	—	一	—	—	—	—	五
信受状態　信仰観念濃厚	—	—	—	—	—	—	六
信受状態　信仰観念薄弱	一	—	—	—	—	—	六
信受状態　教本部に移住を決行し又は私財を献じた	—	—	—	—	—	—	三
信受状態　不明	一	八	一	一	一	一	八一
信受状態　計	二	九	一	一	一	一	一〇一
脱教の動機　誠米金納付等の經濟的苦痛と時間の虚費あるのみで何等得るところがないので	—	二	—	—	—	—	二一
脱教の動機　教主の登極又は自己の野望が實現しないので	—	—	—	—	—	—	三
脱教の動機　教主又は布教幹部の不正行爲が暴露されたとき	—	—	—	—	—	—	四
脱教の動機　中央本部の紛争に因り	—	—	—	—	—	—	一
脱教の動機　大正八年三・一事件後	—	—	—	—	—	—	三
脱教の動機　布教中心人物を失つたので	—	一	—	—	一	—	四
脱教の動機　布教所が移轉したので	—	—	—	—	—	—	二
脱教の動機　官憲の取締を受けて	—	一	—	—	—	—	五
脱教の動機　革命思想注入機關であると知つたので	—	—	—	—	—	—	一
脱教の動機　教徒の自覺（農村振興運動等の刺戟）	—	三	—	—	—	—	二〇
脱教の動機　脱教せざるもの	二	二	一	一	—	一	三七
脱教の動機　計	二	九	一	一	一	一	一〇一

12. 咸鏡南道

信仰類別＼教名	天道	侍天	青林
入教の動機　布教者の勧誘に依り	四	三	四
入教の動機　布教者の甘言利説又は迷信的言辭に迷ひ	七	—	一
入教の動機　布教者の無稽な言又は流説に惑はされて	四	一	—
入教の動機　親族・知己等が勧誘したので己むなく	一	—	—
入教の動機　教理又は主義とするところに共鳴して	一	—	—
入教の動機　一時的好奇心に驅られて漫然と	二	二	一
入教の動機　自發的に	—	—	—
入教の動機　不明	—	—	—
入教の動機　計	一九	六	
入教の目的　無病息災・生活安定・所願成就・天惠により安樂に處世し、子孫繁榮する	四	二	二
入教の目的　民族主義遂行・朝鮮獨立後の特典的地位獲得	一〇	二	二
入教の目的　教主登極後の高位高官就任	—	一	一
入教の目的　役員に就任すれば子孫まで優遇される	—	—	—
入教の目的　玉皇上帝に相遇する	—	—	—
入教の目的　靈術を修得して神秘的力を得る（遁身・借力・縮地・豫言等）	一	—	—
入教の目的　死後極樂淨土に行ける	二	—	—
入教の目的　精神修養	一	—	一
入教の目的　東洋道徳鼓吹	—	—	—
入教の目的　不明	一	一	—
入教の目的　計	一九	六	六

12. 咸鏡南道（續）

信仰類別		天道	侍天	青林	上帝	水雲	人天	白々	元倧	普天	大倧	太極	大聖院	總計
信受狀態	熱心に信仰して教理を解し旨とする者									一				一
	少しも信仰を理解せず	二	一	一	一									五
	信仰觀念厚濃	三		一		一				二				七
	信仰觀念薄弱	五	一											六
	教本部に移住し又は私財を擲じて決行	一								一				二
	不明	八	五	三		三		一	一	四	一	一	一	二九
	計	一九	六	六	一	四	一	一	一	八	一	一	一	五〇
脱教の動機	誠心的に金付納と苦痛のあること	五	三	二										二
	來の等の時間の虚費	三				一								三
	教部暴露又は不正行為									一				三
	大正八年三月一日事件	二												二
	布教中心人物を失つたもの													一
	官憲の取締を受けて	二								一				三
	一般民衆が地方の人々に受けて													一
	教徒の自覺振興運動（農村の等載則）	七	一	一		一				二				三
	脱教をさせるもの	三	二	三						四				八
	計	一九	六	六	一	四	一	一	一	八	一	一	一	五〇

信仰類別		上帝	水雲	人天	白々	元倧	普天	大倧	太極	大聖院	總計
入教の動機	布教者に依り誘惑		一				一				三
	布教者の甘言利說に迷ひ信仰に迷は		二				五				五
	布教者の無責任な言流說に迷はされて					一	二				八
	親族・知己等の誘惑に流されたもの							一			二
	教主又は義理共鳴に依りて										一
	一時的奇心に驅られ好奇心漫然と	一	一								七
	自發的に								一	一	二
	不明			一	一						二
	計	一	四				八				五〇
入教の日的	病息災・生活安定・就職・所定の幸福に惠まれ、子孫榮樂を願ひ		二				三				三
	民族・朝鮮獨立・義士・行方不明の後得獲得典地位				一	一					六
	登極後の主教高位高官就任			一	一	二					七
	役員に就任すれば優遇される孫子								一		一
	皇帝に謁見を許される		一								二
	靈術・修得・身體・力借（等）を得て神秘力・縮地・豫言力										一
	死後極樂浄土に行けるもの										二
	精神修養										二
	東洋德道鼓吹									一	一
	不明										五
	計		四				八				五〇

13. 咸鏡北道

信仰類別＼教名	天道	侍天	普天	太極	大宗	慕聖院	總計六
入教の目的：布教者の勸誘に依り	三	一	一	一	一	一	五
入教の目的：布教者は甘言利說迷信的言辭に迷ひ	二	一	一	一	一	一	五
入教の目的：布教者は無稽な言說流惑に迷はされて	一	一	二	一	一	一	二
入教の目的：親族・知己等が勸誘したのでなく	一	一	一	一	一	一	一
入教の目的：教理又は義主と共鳴してすると	一	一	一	二	一	一	五
入教の目的：不明	四	二	一	一	一	一	六
入教の目的：計	二	三	四	二	一	一	三
入教の目的：病息災・無定所・生活安定・就成願に惠まれ、子孫繁榮す	一	二	一	一	一	一	三
入教の目的：民族主義・獨立・朝鮮特有の典獲得	六	一	一	一	一	一	八
入教の目的：教主の高位高官に就任	一	一	一	一	一	一	一
入教の目的：役員と會社の認められる	一	一	二	一	一	一	四
入教の目的：事業組合員となり生活費を得る	一	一	一	一	一	一	一
入教の目的：大洪水を免れず食せし	一	一	一	一	一	一	一
入教の目的：精神修養	一	一	一	一	一	一	一
入教の目的：不明	三	一	一	一	一	一	三
入教の目的：計	二	三	四	二	一	一	三

13. 咸鏡北道（續）

信仰類別＼教名	天道	侍天	普天	太極	大宗	慕聖院	總計六
信受狀態：少しも教理を解せず	二	一	一	一	一	一	四
信受狀態：信仰觀念濃厚	一	一	一	一	一	一	一
信受狀態：信仰觀念薄弱	六	一	一	二	一	一	一〇
信受狀態：不明	三	一	二	一	一	一	七
信受狀態：計	二	三	四	二	一	一	三
脫教の動機：誠的苦痛と時間の虛費なる得のみでなく米金納付等の經濟的損失得ることのないのである	三	一	一	一	一	一	六
脫教の動機：中央本部の紛爭に因り	一	一	一	一	一	一	一
脫教の動機：一般地方民の侮蔑を受けるのである	一	一	一	一	一	一	一
脫教の動機：教徒の自覺（農村振興運動等の刺戟）	一	一	一	一	一	一	一
脫教の動機：脫教せざるもの	五	二	三	二	一	一	三
脫教の動機：計	二	三	四	二	一	一	三

第十章　類宗の影響

朝鮮の類似宗教が朝鮮社會及び民衆に與へた影響は、この類似宗教が朝鮮社會の最も多事多端な時、民衆の生活及び思想が最も過渡的恐惶不安の狀態に彷徨して居た場合に發現活躍したものであることのみを考へても、それが相當なものであつた事は想像に難くないことであるが、いま便宜概括的に、次の如く生活上への影響、政治上への、社會上への、而して思想上への影響に分類して、それらを觀察することゝした。

第一節　生活上への影響

昭和九年八月全鮮各地延べ教區七百七十四に就き調査する處に依れば、各教を通じて民衆の生活上に(主として經濟生活上への)與へた影響は凡そ次掲第四十表全鮮教別影響表第一段に示すが如く

(1) 入教後生計に困窮するに至つたもの　八三
(2) 教本部に移住を敢行し遂に破産したもの　一〇
(3) 入教を强制され、且つ强制的に金品を搾取されて困つたもの　四
(4) 入教したので生業に不自由を感じたもの　一
(5) 幹部が教徒の宅を訪問して宿泊饗飲を受け且つ致誠金を强要するの弊あるもの　三
(6) 教の役員たらむとして金員を不正に空費する弊あるもの　五
(7) 教の附屬事業に依り經濟的利益を受けたもの　三

種目總計　七　　教區總計　一〇九

であつて、經濟生活上に影響を受けた教區數總計百九の內僅に三區のみ、教の附屬事業たる經濟組合(天道教の附屬事業とて計畫した共生組合と云ふ共同購買販賣組合の如きものであつた)に依つて若干の經濟的利益を受けたのみで、他の百三區と云ふ絶對多數は何れも經濟生活上の弊害を蒙らないものはないのである。

類宗の教徒が入教後經濟生活上に打擊を蒙つたことは右の統計表にあらはれたものゝみでは、七百七十四教區に對する百三教區であるからまことに僅少の如くに考へられる。併しこの百三はその影響極めて著しいものであるが故に、他の注意を惹き又は自ら訴へたものであつて、かゝる著しき打擊を受けないもの、從つて自らも訴へず他からも注意せられないものに至つては他の殆ど全部がさうであると云はれて居る。類宗の隨一に位する某教の重要幹部が嘗て筆者に向つて「本教は教徒をして一致團結せしむる事には成功したが、教徒の個人的經濟生活を向

上せしむるには失敗した。これが本教の最も遺憾として居るところである」と語つたことは、直ちにその他の類宗等の教徒に對する失敗をも代言して居るものと見做すことが無理でなからうと思ふ。

かく類宗の教徒が經濟生活の上に於て殆んど悉くが、多少なり向上にあらずして向下的困窮化の影響を受けたのは何の爲であるか。それは前掲影響種目の(3)(5)の如く强制的に致誠金の搾取を敢てされ、或は頻りに客となつて飲食の饗應に苦しましむる等、教及び教幹部からの與へ蒙らした事にも由るが、多くは「致誠金の多少がやがて教の目的成るの曉、立身出世の標準となる」と信じて教徒自ら競つて致誠金品納付の擧に出で、その極遂に破産の止むなきに至りしものすら出づるの有樣であつた事、及び一度び相當の金品を納めて致誠の實を示せし以上、必ずや何等かの地位か特權が配當されるに相違なしと盲信して、生業家計を措いて顧みなかつたことにもその大なる理由が存すると觀られる。

朝鮮の類宗は殆んど悉く一二を除いて教主・教幹部だけは、教徒のはかなき希望を繫けた納金に依つて美しき殿堂や私邸に贅澤なその日を太平に暮して居るにも拘らず、教徒は困窮破産の悲境に沈淪しながら一縷ののぞみをあだなる期待に囑して居ると云ふ有樣である。類宗がその教徒に與へた經濟生活上への影響はまことに慨嘆すべきものと云はねばならぬ。

生活上の影響中、誠米或は致誠金の納付或は搾取に依つて困窮を來したものが非常に數多いのであるが、この致誠米とは教徒が毎日の食事に際し、その食物の一部を省いてこれを信教に對する自己の誠心を表現するものとなし、之を集めて教に納入し、教はこれを以て教財政に充當するのであつて、普通に飯を炊ぐ時に一匙の米を省くことにしてあるから致誠米と云ふが、米でなくても食物でありさへすれば粟でも豆でも玉蜀黍じやがいもでもよいのである。しかしこの現物では遠く離れた教本部に送附する時困難であるから、普通この現物をその土地で賣却し、得たる金を以て納付する、そこで致誠金とも云ふのである。さてこの致誠米・金は教徒の教に對する誠意の表現であるから、之が納付を缺くときは教徒としての資格を喪失すること勿論であるが、その量又は額の多少が直ちに誠意の多少を表示することゝなる譯であるから、その教が將來その教徒に對して地位向上とか榮譽とかを約束する限り、又教徒はその物質的利益を希望する慾求の强き限り、少しでも多く納めやうとするのが人情であらう。從つて信教熱の高まるの極全財産を擧げて教に納付し、而も求むるものは何ものも酬ひられず、遂に破産の憂目を見る者も決して少くないのである。この誠米の納付及び之が處理法を考察する資料として左の實例をあげるであらう。

平安北道熙川郡天道教熙川郡宗理院事務所での例。院長は事務所に備付ある教人名簿(教譜

簿と云ふ)に依つて毎月誠金を各面宗理院に督促し、面宗理院長が各教徒から集めたものを郡宗理院に現送するや、院長はそれを集計賣却して金にかへ、その半額を郡宗理院費として控除し、半額を教本部たる中央宗理院に送附する。本院に於ける昭和九年六月の誠米納入戸數は合計三百二十五戸、その誠米は各教戸の納め得る食料品で、或は玉蜀黍・馬鈴薯・或は麥・豆等であり、之を金に換算しその半額を中央に送つた。いまその誠米簿の記載を窺ふに

布德七五年六月度誠米簿

教戸責任者名	家族	實納物	換算金額	備考
鄭○麟	男二	玉一升四合	拾錢	玉とはトーモロコシ
李○鳳	女二	玉二升五合	貳拾錢	
金昌○	男四	甘子二升	五錢	甘子とはサツマイモのこと
金○彝	女一	玉二升	貳拾錢	
金弘○	男五	甘子三合朔甘子七升	貳拾錢	合朔とは二ケ月分のこと
（以下略）	女二			
	男三			
	女五			

かくして集めたものを次の如く統計して中央に送付する

月末誠米統計表

月別	道戸數	人口數	誠米高	代金高	信道觀納付高	毎戸平均	毎人平均	戸數增減
六月	三五一	七〇四	四、九石合	二六・五円錢	三二・〇四円錢	三三二升合勺	一・一八円錢	七二合勺
							四錢	一增
								六三減

（信道觀とは中央宗理院の會計を司るところ）

中央本部は之に對して誠米領受票を與へるのである。

猶ほ次に生活上著しき影響を與へた事例の二三を紹介しよう。

(全南・濟州)普天教教徒中には高位高官を得んものと家產を蕩盡して生活難に陷つた者が多く且つ教主の登極を夢想するところから勤勞の精神を消失してしまつた者も少くない。

(忠北・丹陽)普天教教徒は致誠金又は獻金の多寡が將來の地位獲得に重大なる影響ありと信じ無暴の醵金を敢てした者が少くない。一部落の如きは部落擧つて入教し、教への獻金調達の爲め各自所有の田畑を爭つて賣却したので、從來裕福であつた同部落も、二、三戸を除き他は全部小作農に轉落してしまつた。中には生計の途なく致方なく布教に藉口して轉々口つなぎをして居る者もある。

(慶南・蔚山)普天教入教以來致誠金醵出等に因り祖先傳來の田畑を蕩盡し、その日の生活にも困

るやうになつた者も尠くない。尙ほ當地の教徒は一一九戸あるが、入教以來教の爲に醵出した額は一戸で五千圓以上も出した者があり、總額概算一萬五千餘圓に達した。(因に此地に同教の布教開始は大正九年からで、大正十三年頃が最も盛なものであつた。)

(慶南・巨濟、普天教)布教者等は交互に教徒の宅を訪問するが、その機にはきつと宿泊して饗應を受けるので、教徒はその間仕事を休んで饗應費を負擔しなければならず、且つその際は概して半强制的に致誠金を徵收される。此地の教徒尹某は嘗て教本部の井邑に移轉して信仰中財產全部を教の爲に蕩盡し其の後歸鄉したが、その時は無一文で徒步で漸く歸鄉した。

(黃海・長淵、上帝教)大正十年頃、本教に依つて論山郡鷄龍山新都內に帝都出現すべし等の妄說の流布されるや、之を盲信せる教徒は同所に移住する者續出し、大正十年一月より同年五月迄の間に四十三戸の移住者を出すの有樣であつたが、此等の移住者はその後何れも資產を蕩盡して貧困に陷り流離の止むなきに至つた。

(咸南・端川、太極教)教の役員が地方で非常な名譽職の如く考へられ一般から尊敬されるので、この役員たらむが爲に一家一族擧つて凡ゆる方面から運動し、莫大な費用を厭はず遂に資產を蕩盡した者がある。(蕩盡しても敢て苦痛としない有樣である)

(咸南・新興、普天教)當地の教徒は一般に細民であるが、多少の資產ありし者も誠米・獻金等に依つてそれを盡く失つてしまつた者が少くない。

第二節　政治的なる影響

朝鮮類似宗教團體の大部分は、名を宗教に藉りた政治運動團體である、との世評は從來屢聞くところであるが、その世評は兎に角として、いま類宗の朝鮮及び朝鮮民衆に與へた影響中、その政治的色彩を帶ぶるものを觀察するに、その數決して少からず、次揭第四十表全鮮教別影響表第二段に擧げしが如く

(1)	騷擾事件を惹起し民衆を煽動したもの	二七
(2)	妄言を流布して人心を惑亂したもの	二五
(3)	官の施設に反對したもの	五
(4)	舊慣を固持して新施設(振興運動)に背馳するもの	四四
(5)	官の諒解あるが如く布教するので新施設に支障を來すもの	二
(6)	書堂を建てゝ新教育を排擊するもの	一
(7)	地方治安を害したもの	一
種目		教區總數　一〇五

であり、而してこれは大體、流言・蜚語を放つて、騷擾・煽動・惑亂等の如く積極的に政治的運動行爲に出づるものと、當局の諸施設に遵はず又は反對し、支障となる消極的政治妨碍との二者に概括せられそれ等が

A　積極的政治運動(1)(2)と(6)のもの合計　五三

B　消極的政治妨碍(3)(4)(5)と(7)のもの合計　五二

の如く二者殆ど相半ばするを見るのである。

この積極的影響は、明治二十七年東學黨の亂として一種の排外的な革命運動に現はれ、その結果日清戰爭を誘發して韓末の政界に一大衝動を與へ、次いで明治三十七年東學黨の後にして天道教の前身たる一進會の組織せられるや、これまた日露戰爭の餘波を受け、韓末の政界に少なからざる働きかけをなし、大正八年三月には天道教がリーダとなつて全鮮の民衆に民族意識を煽動し、各地に騷擾事件を勃發せしめた事などは、類宗が政治的に積極的に働きかけたものゝ雄なるものであり、その後、民族主義革命主義のリーダを以て自任せし天道教は勿論、上帝教・靑林教・普天教等も、それ〴〵新天地開闢・新王都出現・教主登極等の妄說を流布して、政治的に民心を惑亂した事は枚擧に遑なき程であつた。

消極的施政妨害に至つては、積極的なるものゝ如く力强く又大規模なものではなかつたが、或は教徒は教主の支配を受け、やがて新天地の一員となるのであるから、官の諸施設に對し服從するの必要なしと云ひ、或は吾が教徒のみは他教徒に比し特權を賦與されたものであるから、例外として教令以外の施設には服從しなくてもよいなどと稱して、地方振興・農村振興等の運動施設に頑として順應せざるもの、或は教祖の遺命なり、教主の死に對し教徒は全體にその喪に服するものなり、などと稱して舊來の陋習を固執する等、多くは新政を嫌忌して舊制に執著を感ずる民衆の弱點を利用して以て、その教勢を擴大せむとする功利的なものに他ならない。

今左に政治的影響の事例二、三を揭げて參考に供する。

(咸北・鏡城・天道教・大正八年三月輸城に於て、同教徒が中心となつて〇〇萬歲を高唱し騷擾氣勢を揭げ民心に一大衝動を與へた。(かゝる事例は各地到る處天道教區に存在するが、他は之を略する)

(全北・井邑・普天教・教主登極說を流布して民心を誑惑し、或は時局を促へて不穩言動に及び、又は風俗改善・斷髮奬勵に反對を表明する等の事が一再でない。

(咸南・永興・天道教・明治三十七・八年頃天道教が未だ一進會と稱せし當時から入教した者があつたが、それは之に入教すれば政治的滿足が得られると考へたものであり、後にはこの教が唯一の政治的滿足を約束するものと考へられて居た。

(慶南巨濟)普天教此地の教徒には我等の信ずる處は只教主にして教主の支配を受くるものであるから、國の存在は我等に無關係である從つて國旗を揭揚する必要もない、など不穩の言動を用ゐる者もあつた。

(全南光陽)天道教その初め此教に入教する者の大部分が地方の牛耳を執る兩班、有識者であつたので、此教が政治的に活動したことは大いに地方民心に影響を與へた。

(忠南論山)七星教自力更生運動の斷髮奬勵に對し、教徒にして斷髮すれば神罰ありて身命に害ありなどと稱し、斷髮運動に從はない者もあつた。

咸北城津)普天教農村振興運動の一としての色服奬勵に對し、教徒は『既に教義に依つて青服を着用して居るが、これ我が教が先見の明のあるところ、他教に優れる處であるから、教義に依らざるものは之に從ふ必要がない』などと稱して居た。

第三節　社會上への影響

類宗の影響を社會的に觀るに、第四十表第三段に示すが如く

(1)	一般から異端者として取扱はれて居るもの	七八
(2)	地元青年の排擊を受けて居るもの	五
(3)	社會的地位を獲得し得るので重視されるもの	二
(4)	醫療を妨害したもの	二
(5)	啓蒙上好影響ありしもの	四
(6)	教徒なるが故に小作權を取上げられたもの	一
	總計種目六	教區數　九二

等の點に於て社會的に影響を與へて居るが、(1)(2)及び(6)の如く社會から嫌忌されて居るものが斷然その多くを占め、その他のものは之等に比すれば殆んど論ずるに足らない有樣である。この教及び教徒がかくも一般社會から嫌忌の對象となつた事は、布教創始以來教徒の生活上及び其他の點に於て教徒の多數に意外の災厄困苦を屢々蒙らしめた點或は迷信的行爲を敢てして一般に迷惑をかけた爲に、困苦の外何等得るものなくして脫教した教徒は更なり、その教徒の親戚知己並に一般民の憤滿嫌忌するところとなり、且つ一般社會の人々がかゝる弊害に對して社會的義憤を發するに至つたからであつて、朝鮮民衆性情の特質としてそれらの弊害を除去すべく正面より積極的に攻擊を敢てすることは稀であるが、寧ろ傍觀的に苦々しく考へるだけそれだけ社會的嫌忌が高められたものであらう。

いまこの社會的影響中やゝ著しき事例を參考の爲め左に列擧するであらう

（忠北・堤川、天道教）當地には、天道教なる團體を背景として小作權を地主に對して確立し、以て教勢を細農の間に擴張せむと種々策動したが、それが失敗して却つて農民から嫌忌排斥せられ、且つ地主小作人間に惡影響を及ぼしたことがあつた。

（黃海・長淵、普天教）大正十五年九月本部特派幹部韓某が長淵正教本部に於て六週間の開眼祈禱を行つた際、同所青年會員との間に衝突を惹起し、青年會側は「迷信を以て愚民を誑惑するもの」となして詰め寄り、遂にその祈禱を中止せしめた事がある。

（慶南・釜山、普天教）當地でも同教の大講演會開催された時、青年會員との間に衝突を起して亂鬪を惹起した事がある。

（咸南・新興、普天教）教旨として保髮・青衣・大冠を使用するので老人達の舊慣に愛着を持つ者には禮節を尙ぶものとして共鳴されるが、中年・青年者間には時代錯誤の甚だしきものとして嘲笑の的となつて居る。

（京畿・加平、白々教）大正十三年教主が詐僞事件に關聯して信望を失墜し、更に大正五、六年に亙つて行はれた教主の妾殺事件が昭和五年に至つて暴露せらるゝや、教徒は勿論一般民衆から、その行動を非難され、又教に對する嫌忌侮蔑の念が强調された。

（全南・濟州、普天教）斷髮奬勵運動に反對せむとする傾があるところから、青年階級より時代錯誤の邪教で、有害無益なものと間接或は直接に排斥攻擊された。

（京畿・崇神人組合）組合設立當初は淸潔法施行、警察規則遵守、無爲徒食して居た巫夫の就職を奬勵した。一方又、從來の巫禱は隨時自由の場所で行ひつゝあつたが、この組合設立後一定の場所を限つたので一般祈禱依賴者は迷惑を感じて居た。

（忠南・天安、水雲教）大正十四年一月四日、天安郡東面杏谷里の本教徒崔某兄弟は、その祈禱中兄運某の妻子を殺害すべしと神の命令があつたと稱し、兩人共謀の上兄運某の妻姜氏及その子崔錫〇の二名を斧を振つて殺害し、一般部民に一大恐惶を與へたことがある。

（忠南・溫陽、大同教）教徒の大部分は眞夜中松林の中に靜坐して合掌、瞑目、呪文を誦唱して居たがその度の高まるや遂に寢食を忘れ家業を顧みず、恰も狂人の如き狀態を呈するので、一般部民は甚しくこれを嫌忌し爲に兩者衝突して騷ぎを演じたことがあつた。

（慶南・釜山、甑山教）教徒は機會ある毎に集合し、丹朱・解魔の呪文を誦唱し、全身を搖がし、かくして肉體を强壯にすることを得べしなどと稱するので、一般より精神病者の如く嘲笑されて居る。

（全南・長興、天道教）喧嘩口論、その結果としての告訴沙汰、及び姦通等の風紀上の問題少きは信教の良影響と認められる。

（全北・裡里、佛法研究會）本教會は概して迷信を打破し、自然の原理に基づき民衆の勤勉を奬勵す

るところがあつたので、宗教的振興會として意義ある活動をして居る。

第四節　思想上への影響

朝鮮の類似宗教が朝鮮民衆の思想上に與へた影響を考察するに、それ等が既に教義信仰と云ふ精神的なものを以て喚かけただけに、その思想上への影響も亦大なるものありしことは勿論であり、殊に之等の類宗が朝鮮民衆の思想的動搖期に發生し、その動搖に乘じて活動したものであるから、民衆の思想に相當强烈なる刺戟たりしことも想像に難からざるところである。之を總觀するに前章入教の動機及目的に於て觀察せられるが如く、類宗は民衆の現實的功利思想を刺戟してそれを高度に强調せしめたが爲に、民衆をして宗教に對する關心を全く現實的な利益を求むる手段として考へさせるやうになつた事、而してその約束せる現實的利益が遂に空なる望に終つたところから、宗教は何等民衆の生活を益するものでないと云ふ心持、否寧ろ、前節社會上への影響に認めらるゝが如く、宗教は民衆の生活を害するものとなし信教者を異端視する、宗教否定の心持すら懷かしむるに至つたのである。かくの如く類宗は民心の動搖する際、溺るゝものゝつかまんとする藁となつて暫らく一部の民衆に安心を得せしめたとは云へ、その安心の根基が現實的物質的利益であり、それが遂に空望に終つたが爲に一層民衆の宗教的關心を薄弱らしめた事は、朝鮮民衆の宗教思想開發の上に尠からざる退嬰的影響を及ぼしたものと謂はなければならぬ。

以上は類宗が與へた思想上への影響を概觀したのであるが、その影響が如何なるすがたとして表現されたか、これを具體的に觀察すれば、凡そ次の如く

(1)	革命思想を皷吹し、民族意識を濃厚ならしめた	五一
(2)	迷信を植付けた	一六
(3)	勤勞の精神を阻害した	一四
(4)	社會運動發生の基礎を作る	二
(5)	教徒の哀れな末路に鑑み一般に無宗教となつた	一
(6)	溫厚、道德、觀念に富み人道を重んずるやうになつた	三
(7)	勤勞精神を養成し、實踐に依つて一般に範を示す	一
	總計種目　七	教區數　八八

等の數種目が數へられる。この表に見得るが如く瓦石中の珠玉にも比すべき(6)(7)のなきにしもあらずであるが、それは總數の五分にも足らざる極めて少數なものであつて、他の大部分は何れも好ましからざるもの、朝鮮社會の向上、精神開展に大いなる障碍とならざるものはないので

ある。就中革命思想を鼓吹し民族意識を濃厚ならしめたこと(1)、迷信を植付けたこと(2)、及び勤勞の精神を阻害したこと(3)、は最も重大なる根本的影響であつて、他の總べての影響は皆なこの根幹より發現した枝葉に過ぎないものである。朝鮮類宗の影響はこの三大思想的影響の外に出づるものでない。

右三者の中革命思想の鼓吹、民族意識の煽動が最も多くの類宗に依つて布教の手段とせられた事は、朝鮮類宗の重要なる特色をなすものであつて、何等かの形に於てこの革命と民族意識とを云爲しない類宗は發展せず、この兩者を强調するものはする程盛大を極める有樣であつた。從つて類宗の大部分は若干程度の多少こそあれこの兩者を布教の手段內容としたのである。然らばこの革命思想及び民族意識は寧ろ民衆の間に潛在して、之を布教の手段に使用するものを喜び、之を刺戟し之を振作するものを歡迎したのであつて、類似宗教はたゞこの歡迎心理を利用したまでに他ならないとも考へられやう。勿論その意識なきところに如何に有力な宗教運動を以てしても突如としてこれを振作せしむることは容易でない。從つて朝鮮の類宗が殆ど悉く多少なりその布教手段にこの兩意識の刺戟振作を用ゐたことは、何れもこの兩意識が民衆の間に汎く潛在して居ることを看破せしに由るものだと云はねばならぬ。然しながらたとへ民衆の意識中にこの兩意識が潛在せるものにしても、これを刺戟し振作したものは類宗を除いて他にないのであるから、類宗がこの兩意識を鼓吹し振作し、且つこれを濃厚ならしめた事は爭はれない事實である。

日韓併合以前の朝鮮社會は內政に於ても國際に於ても多事多端であつた。李朝中世以後の紀綱弛緩は末期に於て愈その弊を增し、官尊民卑の極端化は倒底忍び得ざる苛斂誅求となりて民衆に臨み、民衆は政府に對して依賴せず、壓制と慘虐を事とする上流階級に對して心中常にこれを嫌忌するのみであつた、從つて若しも何等かの方法に依つてこの誅求と慘虐から免れ得るものがあるならば、それは大旱の雲の如く渴望せられたであらう。この渴望が精神的なものから一步物質的なものに轉化せむか、それはやがて革命意識の萠芽に成長する外ないであらう。朝鮮の近世にこの不安な境地を脫せむが爲に求められた宗教は天主教を以て嚆失とする。當時の天主教は極めて精神的解脫を說いたものであつた、しかも純祖六年辛酉(皇紀二四六一年)國禁を破つて信教するの罪に問はれて命を殞するもの三百餘名の迫害を蒙るや、殘黨の思想にはこゝに一變化を生じ、天主教の再興策として外國艦隊に由り政府を威嚇して宣教師の入鮮を計り、國を擧げて天主教の信仰を許す淸國皇帝の統治下に併合せむとする密書事件を惹起するに至つた(これは黃嗣永の帛書と云ひ同年十一月二日發見され、黃嗣永は二十七歲の靑年である。尙ほかゝる密書はこれのみでなく、その一通は二十六年後羅馬法王レオ十二世の王廳に達した

が、それにも軍隊の派遣方を歎願してあつた。）これ宗教信仰から革命思想に轉化したものでなくて何であらう。この事件こそ朝鮮近世に於ける宗教的革命運動の先驅をなすものである。

この賣國的天主教徒に對抗し、愛國的排外思想を宗教的に鼓舞せしめ、同時に精神的に生活安心を確保せしめむとした者が慶州の人崔濟愚の創唱せし東學であつた。然るに東學教主崔濟愚が時の政府から邪道の罪に問はれて大邱に刑せられ、教徒に對する斷壓迫害の頻りに加へらるゝに至るや、これまた、その徒は黨を組みて地方官並に王宮（漢城光化門前）に對するデモンストレーションを敢行し、遂に明治二十七年全羅道の一角古阜に官憲叛逆の一揆あらはるゝや、その勢燎原の火の如く各地に普及し、こゝに朝鮮空前の革命的暴動が東學黨に依つて勃發されたのであつた。この暴動を契機として韓國政府はこゝに動搖し、爾來國際情勢の伸展につれて自主の力なきに至り、東學系一進會の運動も參加して明治四十三年韓國政府はこゝにその終焉を告ぐるに至り、この終焉を前後として朝鮮社會の舊制には一大變革が斷行され、宗教の信仰自由も亦確保された。東學系類宗の徒が革命成就、民衆解放運動の指導者を以て訪稱するのも、輕微ながらその運動に參加した點から觀て、故なきにあらずとも考へられる。

總督政治が始まつてから數年官民一途たゞ生活の甦生と改善とに餘念がなかつた。然るに官の孜々撓まざる指導は漸く民衆の倦むところとなり、倦むに從つて之を嫌忌し甦生の生活を苦痛視するに至つた。たま〳〵歐洲戰亂の終熄に依つて歐洲の錯綜せる小國に提唱された民族自決主義の傳へらるゝ、天道教主孫秉熙は、この新生に倦み嫌忌せる民心を察して苦痛なる生活甦生よりも民族解放に依つて樂天地の現出すべきを說き、この解放運動は從來民衆解放運動の指導者たる天道教に依つてのみ可能なるかの如く自負し、遂に大正八年三月一日を期してその民族解放宣言を發表した。かくて全鮮各地に於ける天道教徒その中心となつて民族解放示威運動の擧に出で半島の天地は一時騷然たるものがあつた。この三・一示威運動こそ朝鮮の民衆に民族意識を喚起し或は植付けたものであつて、爾來朝鮮の民衆には、それが容易に刺戟され、且つ刺戟に應じて快よき反動を感ずる潛在意識となつたのである。

民族意識は有智と無智と男女と老少とを問はず民衆全般に共通な性情であり、概して盲目的に感情的に舊き傳統を尊重保守して新生活を嫌忌し、何とはなしに共通傳統圈外の者を排斥せむとするを特色とし、少しく刺戟せらるれば容易に昂奮し、この昂奮を煽動する者に對して同情ある味方の如き魅惑的好感を懷くに至るものである。是に於てか類似宗教は、この民族意識を植付ける事に成功した天道教は勿論他の多くのものも一樣に、この民族意識を利用し、この民族意識を喚起し煽動し以て、一方民衆の歡心を得ると同時に一方民衆の味方として活躍するが如く裝ひ、競つてこの民族意識を刺戟し爭つて教徒の獲得につとめ、依つて以て教勢の確立に邁進

したのであつた。

然しながら如何に民衆意識を刺戟することに依つて、民衆の歡心を買ひ得るにしても、その刺戟が舊き傳統そのものに復歸せしむるが如きものでなければ、民衆全幅の信頼を受くることは出來ない。舊き傳統への復歸、それは現狀から再び民族を解放する革命に期待しなければならない。從つて民衆全幅の信頼を一手に收めむとするものは、この民族意識を刺戟するに須らく革命思想を以てするの要がある。そこで探し出されたものが李朝中世以後に發達した「鄭鑑錄」說であつた。この「鄭鑑錄」說は高麗末葉に論ぜられた風水的地氣衰退說に、支那古來の易世革命信仰が結び付きて出來た王都宿命信仰であり、李氏朝鮮の後には必ず鄭氏の世となりその國都は南鮮鷄龍山なるべしと云ふ革命的豫言であるが、大正六、七年以降類宗爭つてこの豫言に各自勝手の檢討と解釋を下し、鄭氏出現前に大變革あり、鄭王は今や着々出現の準備をなしつゝありなど、極めて荒唐の言辭を弄して只管民衆を迷信せしむるに努めたのである。類宗が民衆に迷信を流布したことは數限りない程であるが最も民衆をして確信せしめ且つそれが爲に故郷を捨て產を破るに至らしめたものは、この鄭王新都の迷信であらう。

民族意識と革命信仰との兩者が準備せられたにしても、それと教との關係乃至それと教徒との關係が明確を缺き、或はまたたとへ教がこの運命のリーダーとして活躍しても、その成功せる曉何等直接の效果が教徒に約束されなければ、民衆のその教に對する關心は決して大なるものではない。是に於てか類宗各教は何れもその成功時に於ける教徒への福音を約束するに吝でなかつた。曰く鄭王若し我教の力に依つて王たり得ば、必ず我教徒をして新政府の重要なる地位に就かしめ又あらゆる特權を賦與せらるべし、故に教徒は一度入教してその誠を致さむか、將來の榮華富貴は期して待つべしと。入教して誠米或は誠金を納付せば、やがて高位高官か適宜の特權を與へられ、何等の勞なくして千金の富を握ることが出來るとすれば、誰か教に入らず孜々として生業に勤勞するの愚を笑はざらむ。かくして入教者は日に〳〵增加し、教徒の勤勞精神はその日から次第に退嬰し去つたのである。

第四十表　全鮮教別影響表　その一　生活上・政治上

影響類別		天道教
生活上	入教後生計に困窮	五
	教本部に移住し破產した	—
	強制的に入教、金錢を搾取されるので種々の弊害を釀す	—
	生業に不自由を感ず	—
	教徒の宅を交互に訪問し宿泊饗應を受け致誠金を強要する弊がある	—
	役員たらんとして金員を不正に空費する弊がある	—
	附屬事業から經濟的利益を受く	三
政治上	騷擾事件を惹起し民衆を煽動	二七
	妄言を流布し人心を惑亂	三
	官の施設に反對	三
	舊慣を固持し振興運動に馳背	三
	恰かも官の諒解あるものゝ如く布教するので振興運動に支障がある	一
	書堂を建て、新教育を排撃	—
	倒產者續出し地方治安を害した	—
（地域數）		一九五

影響類別 ＼ 教名	无窮道	天命道	无極大道教	天法教	元倧教	小計	普天教	無極大道教	甑山道教	甑山大道教	彌勒佛教	太乙教	龍華教	東華教	元君教	大世教	仙道教	小計
生活上 入教後生計に困窮						四	七						一			一		三九
生活上 教本部に移住し破産したもの						五	五											五
生活上 強制的に入教、金錢を搾取されるもの種々の弊害を醸す																		
生活上 生業に不自由を感ず																		
生活上 教徒の宅を交互に訪問致し宿泊饗應を受け致し金品を強要するあが弊ある誠							三											三
生活上 役員らの費金を不正にしたるあが弊ある																		
生活上 附属的事業利益を受け経済から																		
政治上 暴民を煽動し授産事業を起件を惹							二七											
政治上 妄言を流布し人心を惑乱し						二	四	一										四
政治上 官の施設に反對								一	一	三								二
政治上 舊慣を固持し興運動に振背馳							三五			七	一							六
政治上 恰かも官の諒解あるもの如く布教に支障あるが振興運動							一			一								一
政治上 書堂を建て新教育を排撃																		
政治上 倒産者續出し地方治安を害したもの							一											一
（地域數）	一	一	一	一	一	一二	四六九	一五七	二四	九	一	四	四	一	八	一	一	一二

影響類別 ＼ 教名	侍天教	青林教	上帝教	水雲教	大道教	人天教	大華教	東學教	大同教	平化教	天伏教	白々教
生活上 入教後生計に困窮	三	二	三	七						一		
生活上 教本部に移住し破産したもの			一	四								
生活上 強制的に入教、金錢を搾取されるもの種々の弊害を醸す												
生活上 生業に不自由を感ず												
生活上 教徒の宅を交互に訪問致し宿泊饗應を受け致し金品を強要するあが弊ある誠												
生活上 役員らの費金を不正にしたるあが弊ある					一							
生活上 附属的事業利益を受け経済から												
政治上 暴民を煽動し授産事業を起件を惹												
政治上 妄言を流布し人心を惑乱し				二								
政治上 官の施設に反對												
政治上 舊慣を固持し興運動に振背馳								一				
政治上 恰かも官の諒解あるもの如く布教に支障あるが振興運動												
政治上 書堂を建て新教育を排撃												
政治上 倒産者續出し地方治安を害したもの												
（地域數）	四七	二四	八三	六七	一	一五	二	九	三	四	四	四

影響類別 ＼ 教名	生活上					政治上					
	入教後生計に困窮	教本部に移し破産し住たし	強制的に入教、金錢でのるれさ取搾を種々の弊害を醸す	生業に不自由を感ず	教徒の宅を交互に宿泊饗應を受けるす要求致し金を強請するあが弊	役員を金費をしとんらた不正を要するてし空にあが弊	附属事業から利益を受く清事	騒擾事件を民衆を煽動し起惹	妄言を流布し人心を惑亂し	官の施設に反對	舊慣を固持し興運動に振興運動に背馳
金剛道	三										
圓覺玄元教											
先華教											
正道教											
大覺教											
佛法研究會											
甘露法會											
靈覺教											
佛教極樂會											
圓融道											
小計	三										
檀君教											
三聖教											
大倧教											
箕子教											
七星教											
關聖教											
靈神會											
崇神人組合			一	一							
皇祖敬神崇神教											
聖化教			一						一		
文化研究會			一								
西鮮神道同志會											
矯正會											
神理宗教											
知我教											
詠歌舞教											
小計			四	一							
太極						三					
大聖院						一					
（地域數）	七	二	一	一	二	一	七	二	五	三	一	四

影響類別 ＼ 教名	政治上											
	恰かも官の如く布教するあるもの振興運動に障支が解諒	書堂を建て排撃し新教育を	倒産者を出し地方治安を害し									
金剛道												
圓覺玄元教												
先華教												
正道教												
大覺教												
佛法研究會												
甘露法會												
靈覺教												
佛教極樂會												
圓融道												
小計												
檀君教												
三聖教												
大倧教												
箕子教												
七星教												
關聖教												
靈神會												
崇神人組合												
皇祖敬神崇神教												
聖化教												
文化研究會												
西鮮神道同志會												
矯正會												
神理宗教												
知我教												
詠歌舞教												
小計												
太極												
大聖院												
（地域數）	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

影響類別 ＼ 教名	孔子教	性道教	大宗教	大成教會	慕聖院	小計	天人道	東天教	覺世道	濟化教	天化教	小計
生活上 窮困に計生後教入			一			一						
住移に部本教し破産たし												
種々の弊害を醸す強制的に入教、金錢でのるれさ取搾を												
生業に不自由を感ず												
問訪致受互交を宅の徒教し宿泊饗應を強要するあが弊金を誠												
空てしとんらた員役金費るに正不を員るす						五	一					
經く受を益利的屬事業から附済												
政治上 起動煽を衆民を件事提騒し惹												
亂し布流を言妄人心を惑												
對反に施設の官												
振背馳に動運興し持固を慣舊												
もるあでのるあが障支に動運興振るす教布く如ゝの官の諒解か恰												
て撃排を育教を建て堂書新						一						
地たし害を安治方倒産者續出												
（地域數）	一	四	八	一	一	二〇	一	一	一	一	一	五

第四十表　全鮮教別影響表　その二　社會上・思想上

影響類別 ＼ 教名	天道教	侍天教	青林教	上帝教	水雲教	大道教	人天教	大華教	總計
社會上 一般に扱はれる者端異らか	三	三	一	八	三				四〇
排の年青元地く受を動運撃									一〇
位地的會社たし得獲教入一でのるいてれ得し重視を般									四
たし害妨を療醫	一								一
りあ影響好上蒙啓	二								三
作小に故がるな徒教たれらげ上取を權	一								五
思想上 民し吹鼓を想思命革むしらな厚濃を識意族	四			二	二	二			三
く付植を信迷				二	二				二七
害阻を神精勞勤	三			一	三				二五
生發動運會社種各る作を礎基の達發	二								五
鑑に路末の徒教同と教宗無に般一みい多が者たつな			一						四
富に念觀德道・厚温ん重を道人義正みたつにうよるず	一	二							二
し成養を神精勞勤て以を業作地實面一す示を範に般一									一
（地域數）	一九五	四七	二四	八三	七六	一	五一	二	二七四

影響類別 ＼ 教名	社會上	思想上
	一般から異端視される者は地元青年の排撃運動を受ける	革命思想を鼓吹し民族意識を厚濃ならしむる
	教徒は社會的地位を獲得し得るものと重視されている	迷信を植付く
	醫療を妨害し	勤勞精神を阻害する
	啓蒙上好影響あり	各種社會運動の發達を基礎として發生する
	教徒を小作に追ひ上げ	同教徒の末路に鑑みて一般宗教に無関心なつた者多い
		温厚・道德觀念・正義人道を重んじ	温厚・道德觀念・正義人道を重んじ
		勤勞精神を養成し以て實地作業を示す	勤勞精神を養成し以て實地作業を示す
東學教	一		
大同教	二		
平化教	二		
天伏教	一		
无窮道	一		
白々教	一		
天命道	一		
无極大道教			
天法教			
元倧教			
小計	四		
普天教	三五		
無極大道教	一		
甑山教	一		
甑山大道教	一		
彌勒佛教			
太乙教			
龍華教			
東華教			
元君教	一		
大世教			
仙道教			
小計	二九		
金剛道	一		
圓覺玄元教			
光華教			
正道教	二		
大覺教			
佛法研究會			
甘露法會			
（數域地）	一七	二五	三一

影響類別 ＼ 教名	社會上	思想上
	地元青年の排撃運動を受ける	迷信を植付く
	教徒は社會的地位を獲得し得るものと重視されている	勤勞精神を阻害する
	醫療を妨害し	各種社會運動の發達を基礎として發生する
	啓蒙上好影響あり	同教徒の末路に鑑みて一般宗教に無関心なつた者多い
	教徒は小作に追ひ上げ	温厚・道德觀念・正義人道を重んじ	温厚・道德觀念・正義人道を重んじ
		勤勞精神を養成し以て實地作業を示す	勤勞精神を養成し以て實地作業を示す
東學教	一		
大同教	二		
平化教	二		
天伏教	一		
无窮道	一		
白々教	一		
天命道	一		
无極大道教			
天法教			
元倧教			
小計	四		
普天教	三五		
無極大道教	一		
甑山教	一		
甑山大道教	一		
彌勒佛教			
太乙教			
龍華教			
東華教			
元君教	一		
大世教			
仙道教			
小計	二九		
金剛道	一		
圓覺玄元教			
光華教			
正道教	二		
大覺教			
佛法研究會			
甘露法會			
（數域地）	一七	二五	三一

影響類別 ＼ 教名	社會上	思想上	（地域數）
靈覺教			一
佛教極樂會			一
圓融道			一
小計	二		二
禮君教			一
三聖教			一
大倧教			一
箕子教			一
七星教			一
關聖教			一
靈神會			一
崇神人組合			一
皇祖敬神崇神教			一
聖化教			一
文化研究會			一
西鮮神道同志會			一
矯正會			一
神理宗教			一
知我教			一
詠歌舞教			一
小計	二		四
太極教	一		一
大聖院	一		一
孔子教			一
性道教			一
大宗教			一
大成教會			一
慕聖院			一
小計	二		六
天人道			一

影響類別 ＼ 教名	社會上	思想上	（地域數）
一般か異端は扱る			一
地元撃運青年動を受の排く			一
入教獲得し得る般に重視されてい社會的地位一でのるて			一
醫療を妨害したり			一
啓蒙上好影響あり			一
教徒なるが故に小作たれらげ上取を權			一
民し吹鼓を想思命革族むしらな厚濃を識意族			一
迷信を植付く			一
勤勞精神を阻害			一
各種社會運動の達發を基礎作る生發			一
同教徒の末路に般一みと教宗無い多が者たつな鑑			一
温厚・道德觀念に正義人道を重んみたつなるずにうよ			一
勤勞精神を實面一作業地を以て成養し示範に一般			一
（地域數）			一

備考　昔てありし教團―現在教徒數未詳―をも便宜計上す

（附）第四十一表　各道教別影響表

1. 京畿道

影響類別 ＼ 教名	東天教	覺世道	濟化教	天化教	小計	總計 六七
社會上 一般か異なる者は扱ひ端						六
社會上 地元青年の排撃運動を受く						五
社會上 數入を得獲し得るのでの社會的地位を重視されてゐる一般						二
社會上 醫療を妨害し						二
社會上 啓發上好影響あり						四
社會上 教徒を基礎とするが故に小作人たる取扱ひ						一
思想上 革命思想を吹聲し民族意識を厚濃にしらむ						五
思想上 迷信を植付く						六
思想上 勤勞精神を阻害						四
思想上 各種社會運動の發達基礎を生發する作						二
思想上 同一教徒の末路に宗教無と一般に多い者						一
思想上 温厚・道德觀念に富み正義人道を重んずるようになつた						三
思想上 勤勞精神を養成し一面實地作業を以て一般に範を示す						一
（地域數）	一	一	一	五	七	七四

影響類別 ＼ 教名	天道	侍天教	青林	水雲	大道教	人天	大華	白々	普天	圓覺玄元	正道	大覺	佛法研究會	甘露法會
生活上 強制・金錢的に入るのを														
生活上 弊害を醸し種々の														
生活上 禍を依存し														
生活上 不自由														
生活上 感ず														
政治上 妄言を流布し人心を														
政治上 惑亂														
社會上 一般か異なる者は扱ひ端														
社會上 ら														
思想上 迷信を植付く														
思想上 革命思想を吹聲し民族意識を厚濃にしらむ														
思想上 鼓														
思想上 意														
思想上 識														
思想上 を														
思想上 想														
（地域數）	三	三	一	一	一	一	一	七	一	一	一	一	一	一

影響類別／教名	生活上		政治上		社會上		思想上		(地域數)
	強制的に金錢を取り立てる弊害を醸す	教團の制度に依存し自由を不安に感じ	妄言を布き人心を惑乱し流言を		一般異端者は異端扱ひにする		迷信を植付く	革命思想を鼓吹し民族意識を厚濃なる	
靈覺									
佛教極樂會									
圓融道									
檀君									
關聖									
靈神會									
崇神人組合									
聖化									
文化研究會									
矯正會									
神理宗									
大宗									
大成教會									
天人道									

2. 忠清北道

影響類別／教名	生活上		政治上		社會上		思想上		(地域數)
	入教に困窮生計	舊慣を振興し固持し背馳	倒産者を出し地方治安を害し		一般異端者は異扱ひにする		迷信を植付く	革命思想を鼓吹し民族意識を厚濃なる	
天道	二				三			三	九
侍天	一								三
青林									一
上帝	七				三				八
水雲	二								七
人天									一
東學					一				一
普天	二	一							六
無極大道									一
金剛道	二				一				三
總計	二九	三	一		一		一	二	五一

3. 忠清南道

影響＼教別＼名類	生活上	政治上		社會上		思想上		
	教に入る計	振興を固持し背運を	倒産者を害し治方を出續し安た	一般の者には端異扱からにる	徒なる小取れるが作上たにを故權げ	勤勞を阻害し精神	迷信を植付く	革命思想を鼓吹し意識を民族を厚濃むし
天道教	一	六	一					五
侍天教	一			一	一	一	一	九
總計	一七	一	一	三	一	二	一	三
光華								
聖化								
詠歌舞								
性道								
大宗	一							
地域（數）								四

4. 全羅北道

影響＼教別＼名類	生活上	政治上		社會上		思想上		
	教に入る計	騒擾民を起し煽動	妄言を人心流	一般の者には端異扱	徒なる小取れるが作上たにを故權げ	勤勞を阻害し精神	迷信を植付く	革命思想を鼓吹し意識を民族を厚濃むし
青林	一							
帝上	一							
雲水	一		二					
華大								
同大	一							
伏天								
天普	二							
道金剛	一							
華光								
君檀								
子箕								
星七								
聖關								
化聖								
道性								
道覺世								
總計	一八	六	二	二	五	四	六	六
（上域地）								空

教名 ＼ 影響類別	生活上：入教後生計に困窮	政治上：妄言を流布し人心を惑亂	政治上：舊慣を固持し振興運動に背馳	社會上：一般から異端者に扱はる	社會上：啓蒙上好影響あり	思想上：革命思想を鼓吹し民族意識を濃厚ならしむ	(地域數)
天道	|	|	|	|	|	一	三
侍天道	|	|	|	|	|	|	一
青林	|	|	|	|	|	|	一
上帝	|	|	|	|	|	|	八
水雲	|	|	|	|	|	|	三
大華	|	|	|	|	|	|	四
東學	|	|	一	|	|	|	一
普天	三	一	一	|	|	一	一〇
無極大道	|	|	|	|	|	|	一
甑山	|	|	一	|	|	|	三
甑山大道	|	|	|	一	|	|	一
彌勒佛	|	一	|	|	|	|	三
太乙	|	|	|	|	|	|	三
東華	|	|	|	|	|	|	一

教名 ＼ 影響類別	生活上	政治上	政治上	社會上	社會上	思想上	(地域數)
元君	|	|	|	一	|	|	一
大世	|	|	|	|	|	|	一
光華	|	|	|	|	|	|	一
佛法研究會	|	|	|	|	一	|	三
聖化	|	|	|	|	|	|	一
大聖院	|	|	|	|	|	|	一
大宗	|	|	|	|	|	|	二
總計 二一	三	二	三	二	一	二	三九

5. 全羅南道

教名 ＼ 影響類別	生活上：入教後生計に困窮	政治上：騷擾事件を惹起し部民を煽動	政治上：妄言を流布し人心を惑亂	政治上：舊慣を固持し振興運動に背馳	社會上：一般から異端者に扱はる	社會上：地元青年の排撃運動を受く	社會上：醫療を妨害した	社會上：啓蒙上好影響あり	思想上：勤勞精神を阻害	思想上：迷信を植付く	思想上：革命思想を鼓吹し民族意識を濃厚ならしむ	思想上：溫厚・道德觀念に富み正義人道を重ずるようになつた	思想上：勤勞精神を養成し一面實地作業を以て一般に範を示す	(地域數)
天道	四	二	二	|	六	|	|	|	|	|	五	一	|	二〇
侍天道	|	|	|	|	一	|	|	|	|	|	|	|	|	二
上帝	二	|	一	|	二	|	|	|	一	|	一	|	|	三
水雲	|	|	|	|	一	|	|	|	|	|	|	|	|	二

6. 慶尚北道

影響類別 / 教名	生活上 入計教に後困生窮	政治上 騒擾民事を起を言し煽惑を人部動	政治上 妄布を言し人流心亂	政治上 舊し動慣振に興馳か者固持運背	社會上 一異扱地の動般端は元排を青擊受年運く	社會上 醫害療をし妨た	社會上 啓影蒙響上あり好	思想上 勤を勞精阻神害	思想上 迷信植を付く	思想上 革命鼓吹意識なしら思民想族厚濃をむし	思想上 温厚念人に富道を重徳んみ正義ずたつなにうよる	思想上 勤成作勞精般一し業を面範に以て示す	思想上 (地域數)
普天	九			三	五	二		一		六		八	
觀山													
彌勒佛			四										
太乙													
東華													
大世		一											
佛法研究會													
總計 一一	二六	二	七	三	一五	二	一	一	二	六	一	一	六二

影響類別 / 教名	生活上 入計教に後困生窮	政治上 騒擾民事を起を言し煽惑を人部動	政治上 妄布を言し人流心亂	政治上 舊し動慣振に興馳か者固持運背	社會上 一異扱地の動般端は元排を青擊受年運く	社會上 醫害療をし妨た	社會上 啓影蒙響上あり好	思想上 勤を勞精阻神害	思想上 迷信植を付く	思想上 革命鼓吹意識なしら思民想族厚濃をむし	思想上 温厚念人に富道を重徳んみ正義ずたつなにうよる	思想上 勤成作勞精般一し業を面範に以て示す	思想上 (地域數)
天道													
侍天													
青林													
上帝													
水雲													
東學													
天伏													
普天		一											
無極大道													
觀山													
東華													
皇祖敬神崇神													
總計 一二													

最も勢力のある普天教を通じて本道内宗團全般の影響を觀るに

生活上―相當資産を有してゐた者が入教後獻金のため全財産を賣却し、生活の途なきに至つたので止むなく全北井邑本所に移居した等の例に乏しくない。

政治上―教主登極・天變地異等の無稽の言説を流布し、總督政治の無力なること、振興運動指導員の命に服從の要なし等の迷言を逞しふし、之がため農村振興運動の發達に及ぼす

影響が少くない。

社會上―一般民は最早之等の言説に耳を藉す者なく、反つて教徒を侮蔑嫉忌し各種教徒等の農振組合加入に對しても鄉土の更生發達を阻害するものとして排斥しつゝある。

思想上―勤勞精神を阻害した。

7. 慶尙南道

影響類別 ＼ 教名	天道	侍天	青林	上帝	普天	無極大道	甑山	龍華
生活上 入計教に後困窮生				二	四			一
生活上 教移産本住し部破した					二			
生活上 教互饗誠徒に應金弊の訪を問受を宿強が宅受け要あ交泊致す					二			
生活上 利附屬經事業濟受か的く	一							
政治上 妄布言心流を人惑亂					一			
政治上 舊慣振興運動背持固を動に駈し	二			一	五			
社會上 一般異端扱は者か らに				一	二	一	一	
社會上 地元教排斥又は年青運動所布教を同の受け襲撃さる					二			
思想上 革命鼓吹思想民族厚濃意識を無知を	三							
思想上 温厚念義道德富人正重ずんに なるつ道をみよた						一		
（地域數）	三	三	三	三	三	一	四	三

8. 黃海道

影響類別 ＼ 教名	大覺	佛法研究會	大倧	總計
生活上 入計教に後困窮生	一			七
生活上 教本破部産移し住た				二
生活上 強錢種制的々挽取の弊害を入れさ教酬で金のる・す				
政治上 騒擾事件民部を煽動起惹				二
政治上 妄言心流布亂惑人を し				一
政治上 官施設に反對				
政治上 舊慣興運動背持固を動に駈し振				一
政治上 書堂新教育を建て排を擊				八
政治上 醫療妨害を				
社會上 一般者端異か に らは扱る				六
社會上 地方尻教布運動所を受け襲撃さ教排又は年青の同				二
思想上 勤勞精神阻害を				三
思想上 迷信植付を く				
思想上 革命鼓吹思想民族厚濃意識を無知を				一
（地域數）	一	二	一	五〇

9. 平安南道

影響類別 / 教名	生活上 入計教に後困部生窮	生活上 教本部に移し破産した住	生活上 強制的に入金・教ものるれさ取挿錢ずの弊害を醸す種々	政治上 騒擾民部を扇動事件を煽動起件を	政治上 妄言を流布し人心を惑亂	政治上 官の施設に反對	政治上 舊慣を固持し振興運動に背馳	社會上 書堂を建て新教育を排撃	社會上 醫療を妨害	社會上 一般者には異端扱	社會上 啓蒙上好影響あり	思想上 迷信を植付く	思想上 革命思想を吹鼓し民族意識を厚濃なしらむ	思想上 温厚・正直・念義・重人道・道義・道徳をつんずるなにうみをよたつ	(地域數)
天道	一			六	一	一			二		二		二		一六
同(六任)															
同(聯合會)															
侍天															
青林															
上帝															
水雲		三													三
人天															四
平化	一														一
天命道					一										一
无極大道					一										一
普天		一			三										四
太乙															一

影響類別 / 教名	生活上 入計教に後困部生窮	生活上 教本部に移し破産した住	生活上 強制的に入金・教ものるれさ取挿錢ずの弊害を醸す種々	政治上 騒擾民部を扇動事件を煽動起件を	政治上 妄言を流布し人心を惑亂	政治上 官の施設に反對	政治上 舊慣を固持し振興運動に背馳	社會上 書堂を建て新教育を排撃	社會上 醫療を妨害	社會上 一般者には異端扱	社會上 啓蒙上好影響あり	思想上 迷信を植付く	思想上 革命思想を吹鼓し民族意識を厚濃なしらむ	思想上 温厚・正直・念義・重人道・道義・道徳をつんずるなにうみをよたつ	(地域數)
平化															
白々															
无窮道															
普天	三	二			四	一	一〇			七					一七
彌勒佛															
仙道															
正道															
箕子															
崇神人組合				一											
聖化					一										
太極															
性道															
總計一九	三	三	一	八	五	一	二	一	一	三	一	一	二	一	八〇

影響類別 / 教名	檀君	西鮮神道	同志會	天化	總計 一四
生活上 入計 教に 後困 生窮					五
生活上 教移 本住 部し 破た					四
生活上 附ら 利 屬經 事を 業濟 受 的く か					一
政治上 騒惹民 擾起を 事し 煽を 件 部動 を					六
政治上 妄布を 言し 人惑 流心亂					六
政治上 官肯 のじ 施な 設 い					一
政治上 舊し動 慣を 振に 興馳 固 持運背					二
社會上 一異扱 般端 か は 者 らにる					八
社會上 啓影 蒙響 上あ り好					三
思想上 迷植 信付 をく					四
思想上 革鼓意な 命吹 思し 識ら 想民濃 を族厚 む					三
思想上 温觀正重 厚念 道富 人義 るな ずん に つな をよ たみ					一
（地域數）	一	一	四	一	吉

10. 平安北道　地域數　天道三　侍天四　青林一　普天五　孔子一　計　二〇（特記スベキモノナシ）

11. 江原道

影響類別 / 教名	天道	侍天
生活上 入計 教に 後困 生窮		
生活上 教互 徒に 宅問 交を 宿受 け強 要り 泊致 訪饗 を金 應 弊 す 誠る	二	
政治上 騒惹民 擾起を 事し 煽を 件 部動 を		一
政治上 妄布を 言し 人惑 流心亂		
政治上 教めの 關背 に施 係じ は設 の な た官 を い		
政治上 舊し動 慣を 振に 興馳 固 持運背		
社會上 一異扱 般端 か は 者 らにる		二
思想上 勸を 勞 精 阻 神害		一
思想上 迷植 信付 をく		
思想上 革鼓意な 命吹 思し 識ら 想民濃 を族厚 む		
（地域數）	八	六

教名	生活上 入計 教に 後困 生窮	生活上 教移 本住 部し 破た	生活上 附ら 利 屬經 事を 業濟 受 的く か	政治上 騒惹民 擾起を 事し 煽を 件 部動 を	政治上 妄布を 言し 人惑 流心亂	政治上 官肯 のじ 施な 設 い	政治上 舊し動 慣を 振に 興馳 固 持運背	社會上 一異扱 般端 か は 者 らにる	社會上 啓影 蒙響 上あ り好	思想上 迷植 信付 をく	思想上 革鼓意な 命吹 思し 識ら 想民濃 を族厚 む	思想上 温觀正重 厚念 道富 人義 るな ずん に つな をよ たみ	（地域數）
青林													
上帝													
水雲													
人天													
平化													
白々													
天法													
普天	六	一											
無極大道													
甑山													
東華													
三聖													
七星													
皇祖敬神崇神													
知我													
性道													
大宗													
濟化													
總計 二〇	八	一	一	一	一	一	一	二	八	一	二	一	一〇二

12. 咸鏡南道

影響類別 ＼ 教名	天道	侍天	青林帝	上雲	水天	人々	白綜	元天	普綜	大極	太院	大聖
生活上 入教計 生活困窮	五	二	二	二	一	一	一	四	一	一	一	一
生活上 本部破産し移住した	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
生活上 役員金員を不正に破産し使用する	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
生活上 附属事業から利益を受く	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
政治上 騒擾事件を起し民部を煽動する	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
政治上 官憲の施設を背じないもの	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
政治上 恰もかあるるす如く敎動の局裝ふでのに支障があ振興局諒解布て運	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
社會上 入敎し地位を得獲得し般一般社會的得重視されて般	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
社會上 一般か異端者は扱る	二	一	一	一	一	一	一	一	三	一	一	一
思想上 勸勞精神を阻害	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
思想上 革命思想を鼓吹し民族意識を厚濃なしむ	八	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
思想上 同敎徒の末路鑑みて無宗敎者が多い	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
思想上 各種社會運動の基礎を達作つた	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
思想上 騒擾事件の失敗後は共産主義攻擊敎宗思想的動搖をもたらし	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
（地域數）	一九	六	六	一	四	一	一	一	八	一	一	一

13. 咸鏡北道

影響類別 ＼ 教名	天道	侍天	普天	太極	大宗	慕聖院	總計六
生活上 入教計 生活困窮	一	一	一	一	一	一	一
生活上 役員金員を不正に破産し使用する	一	一	一	二	一	一	三
政治上 騒擾事件を起し民部を煽動する	二	一	一	一	一	一	二
政治上 舊慣を固持し振興運背	三	一	一	三	一	一	三
社會上 一般か異端者は扱らる	二	三	一	三	一	一	六
思想上 勸勞精神を阻害	一	一	一	一	一	一	一
思想上 革命思想を鼓吹し民族意識を厚濃なしむ	一	一	一	一	一	一	一
（地域數）	二	三	四	二	一	一	三
總計	五	一	二	一	一	一	二
	五	一	一	一	一	一	一
	一	一	一	二	三	二	二
	七	三	三	一	一	一	一
	一	一	一	一	一	一	一
	五						

第十一章　類宗の教徒

類宗の教徒がどんな人々であるかを知ることはまた朝鮮の類宗を認識するに必要なことであらう。そこで各教の全鮮に於ける延べ教區七百七十四に就き、その教區に於ける教徒の身分・職業の種類・貧富・智識の程度及び男女の性別を調査するに、次掲第四十二表に示すが如く、身分に於ては、現在社會上地位信望ある者及び傳統的上位階級であつた兩班ある教區が約その八分を占め、社會上地位信望なき者及び傳統的下位階級たる常民のみの教區が約六割五分を占めて居り、これを職業の種類から觀察すれば農業に從事する者のみの教區が約五割を占め、他の職業に從事する者全部で五分を示すに過ぎない。貧富及び智識の程度に就きて觀察すれば、有產階級に屬するものある教區はその四分に足らず、五割五分が無產階級のみの教區に依つて占められて居り、智識の程度に至つては若干の文字を解して社會的智識を有する者ある教區約一割、全くの無學蒙昧なる者のみの教區が五割四分であり、而して男女の性別に於ては男六割三分に對して女三割七分と云ふ割合を示して居るのである。然しながら、この身分・職業其他の割合は、それ不明の分を加へての割合であるが、若しこの不明の分を除き明なるものゝみの數に於てその比を求むれば、次の如く

身分	社會的地位信望ある者及び兩班ある教區	一割強
	社會的地位信望なき者及び常民のみの教區	九割弱
職業	農業に從事する者のみの教區	八割四分
	商工業其他を含む教區	一割五分
貧富	恒產あるものある教區	七分弱
	恒產なきもののみの教區	九割三分強
智識	やゝ文字あり常識あるものを含む教區	一割八分
	無學蒙昧なるもののみの教區	八割二分

と云ふ割合となるのであるが、何れにせよ、類宗の教徒は大部分社會上の身分も低く富もなく智識も無き人々（男女）であることが明らかに觀察せられるであらう。

今之等を調査教區の實數に就いて少しく詳細に觀察すれば、身分に於て

常民のみの教區	三七二
社會的地位信望なき者のみの教區	一二九
兩班の教徒ある教區	五一（尙は以前ありて今なき教區二一）
社會的地位信望ある者を含む教區	九（以前ありて今なき教區一一）

不明の教區	二一三
合　計	七七四

の順序であり、而して、これを職業別に觀れば

農業者のみの教區	三九三
自由勞働者を含む教區	二五
巫覡の多き教區	一六
商人を含む教區	七
漁民を含む教區	五
僧侶を含む教區	三
工業從事者ある教區	二
公職者ある教區	二
教師ある教區	一
李王家女官ある教區	一
不明の教區	三一九
合　計	七七四

の順位をなし、貧富の程度よりすれば

無產者のみの教區	四二三
中產者ある教區	一六(尙ほ以前ありて今はなき教區　三)
有產階級ある教區	一五(尙ほ以前ありて今はなき教區一四)
不明の教區	三二〇
合　計	七七四

であり、而して、これを智識の程度から云へば

無學蒙昧な者のみの教區	四一五
漢文諺文を解する者ある教區	七四(尙ほ以前ありて今はなき教區　一)
社會的智識を有する者ある教區	一八(尙ほ以前ありて今はなき教區一六)
不明の教區	二六七
合　計	七七四

と云ふ順序をなして居るのである。

次に各教系別に依つて教徒の身分狀態を觀察するに、その割合は次の如く

教徒＼教系	身分		職業		貧富		智識		性別	
	兩班 地位あり	常民 地位なし	農業	其他等	有産	無産	有學	無學	男	女
東學系類宗	〇・三〇	〇・七〇	〇・八八	〇・一二	〇・〇六	〇・九四	〇・二〇	〇・八〇	〇・六〇	〇・四〇
吽哆系類宗	〇・一〇	〇・九〇	〇・九五	〇・〇五	〇・〇六	〇・九四	〇・一七	〇・八三	〇・七七	〇・二三
佛教系類宗	〇・一八	〇・八二	〇・六四	〇・三六	〇・一〇	〇・九〇	〇・一〇	〇・九〇	〇・五七	〇・四三
崇神系類宗	〇・三三	〇・六七	〇・四〇	〇・六〇	〇・〇〇	一・〇〇	〇・一〇	〇・九〇	〇・四七	〇・五三
儒教系類宗	〇・六三	〇・三七	一・〇〇	〇・〇〇	〇・四五	〇・五五	〇・七五	〇・二五	〇・九五	〇・〇五

身分上社會的地位ある兩班階級を含む割合からすれば、吽哆系類宗最も少なくして僅に一割にすぎず、佛教系類宗次に位して一割八分、次が東學系類宗の三割、崇神系類宗之に次いで三割三分を示し、儒教系類宗に至つては流石に儒教が兩班の獨占であつた昔の名殘を明に留めて六割三分と云ふ高率を示して居る。之を智識教育の程度から觀察すれば、社會的智識及び學問あるものの割合から云つて、儒教系類宗の七割五分が最高位を占めて類宗中有識者たるの白眉振を發揮して居る外、他の類宗はそれよりずつと低下し、東學系類宗は漸く二割、吽哆系類宗は一割七分を保ち、佛教系類宗及び崇神系類宗に至つては僅々その一割にしか達しない有樣である。次に教徒をその恒産有無から檢討すれば、これだけは何れの系統も無産者が多く、たゞ儒教系類宗のみ、有産四割五分に對する無産五割五分、即ち無産者がやゝ有産者よりも多いと云ふ割合を示して居るが、その他は佛教系に於て有産者一割、東學・吽哆何れも有産者六分、而して崇神系に至つては有産者を發見せずと云ふ極めて貧弱な經濟生活をつゞけて居るものである。教徒の職業は概して農業に從事する者多く、儒教系に於ては全部が農業の從事者、吽哆系に於てその九割五分、東學系に於て八割八分、佛教系に於て六割四分がそれ〴〵農業從事者であるが、只崇神系に於ては農業從事者四割に對し其他の職業從事者六割を示して居る。この崇神系に於ける農業以外の職業從事者六割は、殆んど悉くが巫覡と云ふ祈禱禁厭の特殊業を營むものであつて、之等の業者を唯一の教徒とする崇神系類宗の特色を示すものに他ならないのである。最後に之等類宗の教徒をその性別から觀察すれば、儒教系類宗の男九割五分に對する女五分、吽哆系類宗の男七割七分に對し男二割三分、東學系類宗の男六割に對し女四割、佛教系類宗の男五割七分に對して女四割三分は、何れも男子教徒の多きを示して居るが、たゞ崇神系類宗に於てのみ男四割七分に對して女五割三分と云ふ、女教徒が高率となつて居るのであるが、これまた崇神系類宗には巫覡がその主なる教徒となつて居り而して巫覡には男子よりも女子が多いが爲めにかゝる特異の現象としてあらはれて居るのである。之を要するに、類似宗教の教徒は概して身分低く、無學蒙昧にして、且つその生計にも困難を感じつゝある農民が殆どその絶對多數を占めて居るので

ある。猶ほ詳細は次掲全鮮教別教徒表及び第四十三表各道教別教徒表に就きて参照のこと。

第四十二表　全鮮教別教徒表

教名	身分：社會的信望ある地位	身分：兩班	身分：社會的信望なき地位	身分：常民	（地域數）	職業：農業	職業：工業	職業：商業	職業：漁業	職業：自由勞働	職業：巫覡	職業：僧侶	職業：公職者	職業：教師	職業：李王家女官	貧富：有産	貧富：中産	貧富：無産	智識：社會的識ある知	智識：漢文を解す	智識：無學蒙昧	性別：男	性別：女
天道教	2°/1	8°/6	二七	九六	一九五	一七	二	七	三	三	—	—	二	一	—	3°/4	1°/5	一三九	8°/12	二四	一三六	0・六0	0・四0
侍天教	—	○/四	九	二七	四七	二六	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一	1°/2	三三	1°/1	1°/1	二七	0・六0	0・四0
青林教	一	一	三	一〇	二四	一〇	—	—	—	一	—	—	—	—	—	—	一	九	—	一	八	0・六三	0・三七
上帝教	1°/1	1°/7	一四	三九	八三	四四	—	—	一	三	—	—	—	—	—	2°/2	一	四二	○/一	一〇	四三	0・六九	0・三一
水雲教	—	4°/1	一四	三四	六七	三三	—	—	一	—	—	—	—	—	—	1°/1	—	四〇	○/一	四	三八	0・六二	0・三八
大道教	—	一	—	一	一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0・六五	0・三五
人天教	—	—	四	六	一五	七	—	—	—	一	—	—	—	—	—	—	—	一二	—	—	九	0・五三	0・四七
大華教	—	一	—	七	一二	三	—	—	—	—	一	—	—	—	—	—	—	三	—	—	三	0・四〇	0・六〇
東學教	—	—	—	一	九	二	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一	—	—	二	0・八三	0・一七
大同教	—	—	一	一	二	一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	二	—	一	二	0・六〇	0・四〇
平化教	○/一	—	一	二	四	二	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○/一	—	三	—	—	三	0・五八	0・四二
天佚教	—	—	—	一	二	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一	0・七七	0・二三
白々教	—	—	—	三	四	四	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	二	—	—	二	0・六三	0・三七
无窮道	—	—	一	—	一	一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一	—	—	—	0・五七	0・四三
天命道	—	—	一	—	一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一	—	—	一	0・六七	0・三三
无極大道教	—	—	—	一	一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一	—	—	一	0・九四	0・〇六
天法教	—	—	一	—	一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一	—	—	一	0・三三	0・六七
元倧教	—	—	—	—	一	一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一	○/一	—	—	一	〇
小計	4°/3	17°/17	八六	三三二	四六九	二五三	二	七	五	一八	一	—	二	一	—	7°/8	2°/9	二七七	12°/13	1°/41	二六六	0・六〇	0・四〇
普天教	○/六	4°/11	二六	七八	一五七	九八	—	—	—	二	—	—	—	—	—	6°/3	1°/3	九九	○/四	三三	九七	0・七九	0・二一
無極大道教	一	二	三	一	二四	二	—	—	—	一	—	—	—	—	—	—	一	四	—	一	四	0・六五	0・三五
甑山教	—	一	二	三	九	三	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○/一	—	四	—	—	四	0・七四	0・二六
甑山大道教	—	—	一	—	一	一	—	—	—	一	—	—	—	—	—	—	—	一	—	—	一	0・六〇	0・四〇
彌勒佛教	—	一	一	—	四	二	—	—	—	一	—	—	—	—	—	—	—	二	—	—	二	一	〇
太乙教	—	—	一	二	四	三	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	三	—	—	三	0・八〇	0・二〇
龍華教	—	—	—	一	一	一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一	—	—	一	0・八四	0・一六
東華教	—	—	—	四	八	三	—	—	—	一	—	—	—	—	—	—	一	三	一	—	一	0・九四	0・〇六
元君教	—	—	一	—	一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一	—	—	一	一	〇

類別 ＼ 教名	大世教	仙道教	小計	金剛道	圓覺玄教	光華教	正道教	大覺教	佛究會法	甘露法會	靈覺教	佛極樂會	圓融道	小計
身分 社會的信望地位あり			6°/1											
身分 兩班			4°/16											四
身分 社會的信望地位なし			三五											三
身分 常民			九〇	三										一五
（地域數）			二一	四			五		七					二七
職業 農業			一三	二		三	三		二					九
職業 工業														
職業 商業														
職業 漁業														
職業 自由労働			六											
職業 巫覡														
職業 僧侶					一			二						三
職業 公職者														
職業 教師														
職業 王家李女官							一							
貧富 有産			7°/5											
貧富 中産			1°/5						一					
貧富 無産	一		二九	三		一	三		二					九
智識 社會的知識あり			4°/1											
智識 漢文を診解す			二四											
智識 無學蒙昧	一		二五	一		二	三	一	二					九
性別 男	一		〇・七七	〇・五九	〇・三九	〇・六一	〇・六一	〇・六〇	〇・四六	〇・一九	〇・四〇	〇・八〇		〇・五七
性別 女	〇		〇・二三	〇・四一	〇・六一	〇・三九	〇・三九	〇・四〇	〇・五四	〇・八一	〇・六〇	〇・二〇	一	〇・四三

類別 ＼ 教名	檀君教	三聖教	大倧教	箕子教	七星教	關聖教	靈神會	崇神人	皇祖敬合	神崇神教	聖化教	文化研究會	西鮮神道同志會	矯正會	神理宗教	知我教	詠歌舞教	小計	太極教
身分 社會的信望地位あり																			
身分 兩班																			
身分 社會的信望地位なし																			
身分 常民																			
（地域數）	七	二	二	二	三	三	一	一	一	一〇	六	一	一	一	一	一	一	四	四
職業 農業	二									三	一						一	一〇	二
職業 工業																			
職業 商業																			
職業 漁業																			
職業 自由労働																			
職業 巫覡	一									六	二	一	一	一				一五	
職業 僧侶																			
職業 公職者																			
職業 教師																			
職業 王家李女官																			
貧富 有産																			
貧富 中産																			
貧富 無産		三								三	一							一二	
智識 社會的知識あり																			
智識 漢文を診解す																			
智識 無學蒙昧		二								一								三	
性別 男	一	一	一			一				一	二	一	一	一				一一	一
性別 女																			

類／教名別	大聖院	孔子教	性道教	大宗教	大成教會	慕聖院	小計	天人道	東天教	覺世道	濟化教	天化教	小計	總計六七
身分 社會的信望あり地位	一	一	一	一	一	一	1°4	一	一	一	一	一	11°9	一
身分 兩班	一	一	一	二	一	一	八	一	一	一	一	一	21°61	一
身分 社會的信望なし地位	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二九	一
身分 常民	一	一	二	三	一	一	六	一	一	一	一	一	三七	三
職業（地域數）	一	一	四	八	一	一	二〇	一	一	一	一	一	五六	五
職業 農業	一	一	一	三	一	一	七	一	一	一	一	一	三四	一
職業 工業	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二	一
職業 商業	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	七	一
職業 漁業	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	五	一
職業 自由勞働	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二五	一
職業 巫覡	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一六	一
職業 僧侶	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	三	一
職業 公職者	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二	一
職業 教師	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
職業 李王家官女	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
貧富 有産	一	一	一	一	一	一	四	一	一	一	一	一	14°16	一
貧富 中産	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	3°16	一
貧富 無産	一	一	三	四	一	一	六	一	一	一	一	一	四三	一
智識職 社會的信望あり知識	一	一	一	一	一	一	三	一	一	一	一	一	16°18	一
智識職 漢文を諺解す	一	一	一	四	一	一	六	一	一	一	一	一	1°74	一
智識職 無學蒙昧	一	一	二	一	一	一	三	一	一	一	一	一	四五	一
性別 男	一	一	〇・五二	〇・六三	一	一	〇・九五	〇・〇一	一	一	一	〇・五五	〇・六五	〇・九〇
性別 女	〇	〇	〇・四七	〇・三七	〇	〇	〇・〇五	〇	〇	〇	〇	〇・五〇	〇・三七	〇・一〇

備考　○印は「嘗ては斯かる者もあつた」の意である。…印下の數字は現在數を示す。

（附）第四十三表　各道教別教徒表

1. 京畿道

類／教名別	天道	侍天	青林	水雲	大道	人天	大華	白々	普天
身分 兩班	一	一	一	一	一	一	一	一	一
身分 常民	三	一	一	一	一	一	一	一	一
（地域數）	二三	三	一	一	二	一	一	一	七
職業 農業	一	一	一	一	一	一	一	一	一
職業 僧侶	一	一	一	一	一	一	一	一	一
職業 李王家官女	一	一	一	一	一	一	一	一	一
職業 自由勞働	一	一	一	一	一	一	一	一	一
職業 巫覡	一	一	一	一	一	一	一	一	一
貧富 無産	一	一	一	一	一	一	一	一	一
智識 漢文を諺解す	一	一	一	一	一	一	一	一	一
智識 無學蒙昧	一	一	一	一	一	一	一	一	一
性別 男	〇・七三	〇・五三	〇・六〇	〇・六〇	〇・六五	〇・五三	〇・八九	一	〇・八四
性別 女	〇・二七	〇・四七	〇・四〇	〇・四〇	〇・三五	〇・四八	〇・一一	〇	〇・一六

類別＼教名	身分 班兩	身分 民常	地域（數）	職業 農業	職業 倡僧	職業 官女家王李	職業 自由勞働	職業 巫覡	貧富 無産	智識 漢を解し文を諳す	智識 無學蒙昧	性別 男	性別 女
圓覺玄元	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	〇・三九	〇・六一
正道	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	〇・六七	〇・三三
大覺	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	〇・五九	〇・四一
佛法研究會	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	〇・四〇	〇・六〇
甘露法會	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	〇・一九	〇・八一
靈覺	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	〇・四〇	〇・六〇
佛教極樂會	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	〇・八〇	〇・二〇
圓融道	一	三	二	一	一	一	一	一	一	一	一	〇・七六	〇・二四
檀君	一	一	二	一	一	一	一	一	一	一	一	〇・五四	〇・四六
關聖	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	〇	一
靈神會	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	〇・一五	〇・八五
崇神人組合	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	〇・三三	〇・六七
聖化	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	〇	一
文化研究會	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	〇・三九	〇・六一

2. 忠清北道

類別＼教名	身分 社會的信望ある地位	身分 班兩	身分 社會的信望なし地位	身分 民常	地域（數）	職業 農業	職業 自由勞働	貧富 有産	貧富 中産	貧富 無産	智識 漢を解し文を諳す	智識 無學蒙昧	性別 男	性別 女
矯正會	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	〇	一
神理宗	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	〇
大宗	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	〇・三八	〇・六二
大成教會	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	〇
天人道	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	〇・九九	〇・〇一
東天	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	〇
總計二九	二	六	五	三	二	一	七	四	一	一	二	一	〇・五四	〇・四六

類別＼教名	身分 社會的信望ある地位	身分 班兩	身分 社會的信望なし地位	身分 民常	地域（數）	職業 農業	職業 自由勞働	貧富 有産	貧富 中産	貧富 無産	智識 漢を解し文を諳す	智識 無學蒙昧	性別 男	性別 女
天道	一	一〇・一一	一	八	八	四	一	〇・一一	一	八	一	六	〇・五九	〇・四一
侍天	一	一	一	三	三	一	一	一	一	二	一	三	〇・五六	〇・四四
青林	一	二	一	一	一	四	一	〇・二	一	三	一	四	〇・七〇	〇・三〇
上帝	一	一〇・一一	一	六	七	二	一	一	一	五	一	五	〇・七三	〇・二七
水雲	一	一	一	八	八	一	一	一	一	五	一	四	〇・六〇	〇・四〇

3. 忠清南道

類別＼教名	人天教	東學	普天教	無極大道	金剛道	光華	聖化	詠歌舞	性道	大宗	總計一五
身分 社會的信望位地あり	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	三
身分 班兩	一	一	1.2	一	一	一	一	一	一	4.8	
身分 社會的信望位地しな	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
身分 民常	一	一	五	一	三	一	一	一	二	二	四
地域（數）	一	一	六	一	三	一	一	一	一	二	四五
職業 農業	一	一	一	二	二	一	一	一	一	二	二〇
職業 自由勞働	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
貧富 有産	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	4.1
貧富 中産	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	三
貧富 無産	一	一	六	一	二	一	一	一	一	二	三五
智識 漢諺を解す文	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二	六
智識 無學蒙昧	一	一	五	一	一	一	一	一	一	一	三〇
性別 男	一	一	〇.六六	一	〇.五六	〇.八〇	〇	〇.四六	〇.八〇	〇.六〇	〇.七〇
性別 女	〇	〇	〇.四四	〇	〇.四三	〇.二〇	一	〇.五四	〇.二〇	〇.二〇	〇.三〇

類別＼教名	天道	侍天	青林	上帝	水雲	大華	大同	天伏	普天	金剛道	光華	檀君	箕子	七星
身分 班兩	1.1	二	一	二	二	一	一	一	五	一	一	一	一	一
身分 社會的信望位地しな	二	一	一	六	四	一	一	一	三	一	一	一	一	一
身分 民常	六	二	一	四	五	五	一	一	八	一	一	一	一	一
地域（數）	九	二	一	二	一〇	五	二	一	二	一	一	一	一	一
職業 農業	五	一	一	八	三	三	一	一	四	一	一	一	一	一
職業 自由勞働	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
職業 巫覡	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
貧富 有産	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
貧富 中産	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
貧富 無産	八	一	一	六	五	三	二	一	九	一	一	一	一	一
智識 漢諺を解す文	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
智識 無學蒙昧	四	一	一	一	一	一	一	一	四	一	一	一	一	一
性別 男	〇.六九	〇.八〇	一	〇.七〇	〇.五七	〇.三〇	〇.六〇	〇.八五	〇.五九	〇.七〇	〇.六七	一	〇.八九
性別 女	〇.三一	〇.二〇	〇	〇.三〇	〇.四三	〇.七〇	〇.四〇	〇.三三	〇.四一	〇.三〇	〇.三三	〇	〇.一二

4. 全羅北道

類別＼教名		關聖聖化	性道	覺世道	總計一八
身分	班兩				一〇
	社會的信望位地				一九
	民常	二	二	一	三九
(地域)		二	二	一	六三
職業	農業		一	一	三〇
	漁業				一
	自由勞働				一
	巫覡				一
貧富	有産				一
	中産				一
	無産	一	一		四〇
智識	社會的識見を有す				一
	漢文諺解を解す				一〇
	無學蒙昧	二	一	一	四
性別	男	〇・五五	〇・四〇	〇・五三	〇・六三
	女	〇・四五	〇・六〇	〇・四七	〇・三七

類別＼教名		天道	侍天	青林
身分	班兩			
	社會的信望位地			
	民常			
(地域)		三		一
職業	農業			
	商業			
	自由勞働			
	巫覡			
貧富	有産			
	中産			
	無産	三		
智識	社會的識見を有す			
	無學蒙昧			
性別	男	〇・七〇	〇・五八	一
	女	〇・三〇	〇・四九	〇

類別＼教名		上帝	水雲	大華	東學	普天	無極大道	甑山大道	甑山	彌勒佛	太乙	元君	東華	大世	光華	佛法研究會	聖化	大聖院	大宗	總計二一
身分	班兩																			
	社會的信望位地																			
	民常																			
(地域)		八	三	四	一	一〇	一	一	二	二	二	一	一	一	一	三	一	一	二	九九
職業	農業					二														九
	商業																			
	自由勞働																			
	巫覡																			
貧富	有産								一											一〇・一
	中産																			
	無産																			一四
智識	社會的識見を有す																			
	無學蒙昧																			一三
性別	男	〇・六五	〇・六七	〇・四三	不明	〇・五九	〇・七五	〇・六〇	〇・八〇	〇・三八	一	一	〇・六七	〇・六七	〇・四〇	不明	一	一	〇・六七	
	女	〇・三五	〇・三三	〇・五七	〇	〇・四一	〇・三五	〇・四〇	〇・三〇	〇・六二	〇	〇	〇・三三	〇・三三	〇・六〇	不明	〇	〇	〇・三三	

5. 全羅南道

類別＼教名	天道	侍天	上帝	水雲	普天	甑山	彌勒佛	太乙	東華	大世	佛法研究會	總計 一一
身分 社會的信望あり地位	一	一	〇一	一	〇三	一	一	一	一	一	一	〇四
身分 兩班	〇二	一	一	一	二	一	一	一	一	一	一	二〇
身分 常民	二〇	二	三	二	一八	二	一	一	二	一	一	五九
（地域數）	二〇	二	三	二	一八	二	一	一	二	一	一	六一
職業 農業	二〇	二	三	二	一八	二	一	一	二	一	一	六〇
職業 漁業	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二
職業 自由勞働	一	一	二	一	一	一	一	一	一	一	一	五
貧富 產有	〇一	一	一	一	〇三	一	一	一	一	一	一	〇四
貧富 產中	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二
貧富 產無	一九	二	九	二	一八	二	一	一	一	一	一	五六
智識 社會的知識を有す	〇一	一	〇一	一	〇一	一	一	一	一	一	一	〇五
智識 漢文を解す	二	一	三	一	七	一	一	一	一	一	一	三
智識 無學蒙昧	一九	二	二	一	一八	一	一	一	一	一	一	五六
性別 男	〇・六三	一	〇・八〇	〇・九〇	〇・七二	〇・八八	一	〇・六八	〇・八三	一	〇・六二	〇・六九
性別 女	〇・三七	〇	〇・二	〇・一〇	〇・二八	〇・一二	〇	〇・三三	〇・一七	〇	〇・三八	〇・三一

6. 慶尚北道

類別＼教名	天道	侍天	青林	上帝	水雲	東學	普天	天伊	無極大道	甑山	東華	皇祖敬神崇神	總計 一二
身分 社會的信望なし地位	一	一	一	一	一	一	〇三	一	一	一	一	一	〇三
身分 常民	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
（地域數）	一〇	四	五	二	七	七	一	七	一七	二	一	一	八九
職業 公職者	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
職業 覡巫	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
性別 男	〇・七三	〇・八二	〇・八三	〇・六五	〇・八〇	〇・八二	〇・九〇	〇・五〇	〇・六八	一	一	〇・二五	〇・八二
性別 女	〇・二七	〇・一八	〇・一七	〇・二五	〇・二〇	〇・一八	〇・一〇	〇・五〇	〇・三三	〇	〇	〇・一五	〇・一八

身分欄―往時に於ける教徒中には兩班儒生が相當多かつたが、現在のそれは兩班儒生二〇%常民八〇%の割合となつて居り孰れも社會的地位最も低く頑迷の徒が多數を占めてゐる。

職業欄―概して農業。

貧富欄―往時は有產階級が少くなかつたが、漸次教の爲に家財を提供して貧困となり、又は脫教者を出して現在は大多數無資產者なり。

智識欄―往時の有識階級の教徒は漸次脫教し、現在は無學者五五%、漢諺文を解する者四四%にして新教育を受けた者は一%に過ぎず。

7. 慶尙南道

教名	身分 社會的地位	身分 班兩	身分 社會的地位	身分 民常	(地域數)	職業 農	職業 商	職業 漁	職業 自由働勞	職業 僧侶	職業 工	職業 公職者	貧富 有產	貧富 無產	智識 社會的有知	智識 漢諺解文	智識 無學蒙昧	性別 男	性別 女
天道	1/2	1/1																	
侍天			一	三	一	一	三	一	一		一	一	一	四	四	二	五	〇・七四	〇・二六
青林			一	一	四	二								三		一	三	〇・六五	〇・三五
上帝	1/1		一	六	二	七		一	一					六		三	七	〇・六九	〇・三一
普天	1/2			五	三	九								八		四	七	〇・九一	〇・〇九

8. 黃海道

教名	身分 社會的地位	身分 班兩	身分 社會的地位	身分 民常	(地域數)	職業 農	職業 商	職業 漁	職業 自由働勞	職業 巫覡	職業 工	職業 公職者	貧富 有產	貧富 無產	智識 社會的有知	智識 漢諺解文	智識 無學蒙昧	性別 男	性別 女
無極大道	一		一	二	二													〇・五八	〇・四三
龍華			一	一	二													〇・六四	〇・三六
大覺					一													〇・八四	〇・一六
佛法研究會					二													〇・九四	〇・〇六
大倧	一				一													〇・二六	〇・七四
總計	3/6	七	三	五	三六	三	二	三	一	一	一	一	三	三五	四	一〇	二七	〇・九九	〇・二一

教名	身分 社會的地位	身分 班兩	身分 社會的地位	身分 民常	(地域數)	職業 農	職業 商	職業 漁	職業 自由働勞	職業 巫覡	職業 工	職業 公職者	貧富 有產	貧富 無產	智識 社會的有知	智識 漢諺解文	智識 無學蒙昧	性別 男	性別 女
天道			一	三	八	九		一					一	七		一	四	〇・九四	〇・五一
侍天					五	六								七			三	〇・六六	〇・三四
青林					一									一			一	〇・三四	〇・六六
上帝			一		八	九								八		一	七	〇・六〇	〇・四〇
水雲					七	七								七		一	四	〇・七三	〇・二八

類別＼教名	人天	大華	平化	白々	无窮道	普天	彌勒佛道	仙道	正道	箕子	崇神人組合	聖化	太極	性道
身分 社會的信望あり位地										一				
身分 兩班										一			一	
身分 社會的信望なし位地	三		一		一	一四			一					
身分 常民		一		一		三		一	一		一		一	
（地域數）	四	一	一	一	一	一七	一	一	四	一	一	一	一	一
職業 農業	四		一	一	一	一七	一	一	三				一	
職業 自由勞働														
職業 巫覡											一			
貧富 有産														
貧富 中産														
貧富 無産	三				一	一三	一		三					
智識 社會的有識を知す														
智識 漢文を諺解す						一								
智識 無學蒙昧	三	一				一三	一		三		一			
性別 男	〇・六九	〇・五三	一	〇・四二	〇・五七	〇・八三		（不明）	一	（不明）	一	一	一	
性別 女	〇・三二	〇・四八	〇	〇・五八	〇・四三	〇・一七	〇		〇		〇	〇	〇	

9. 平安南道

類別＼教名	天道	同（六任）	同（聯合會）	侍天	青林	上帝	水雲	人天	平化	天命道	无窮大道	總計一九
身分 社會的信望あり位地									一			二
身分 兩班						一						二
身分 社會的信望なし位地	五	二			一		一〇	一	一	一		三五
身分 常民	二	二	一	二		三	三	三	一	一	一	二六
（地域數）	一六	四	一	二	一	四	一三	四	二	一	一	一三
職業 農業	一三	一	一	二	一	一	八	二	一	一		八〇
職業 自由勞働	一											一
職業 巫覡												一
貧富 有産									一			一〇
貧富 中産	三					一						五九
貧富 無産	一三	四	一	二	一	三	二	四	一	一	一	一七
智識 社會的有識を知す	四											五二
智識 漢文を諺解す	五	一				一	一					〇・五六
智識 無學蒙昧	七	三	一	二	一	三	二	三	二	一	一	〇・四四
性別 男	〇・六三	〇・六〇	〇・六〇	〇・五五	一	〇・六二	〇・六一	〇・六七	〇・六〇	〇・六七	〇・九四
性別 女	〇・三七	〇・四〇	〇・四〇	〇・四五	〇	〇・三八	〇・三九	〇・三三	〇・四〇	〇・三三	〇・〇六

10. 平安北道

類別＼教名	天道教	侍天教	太乙君道	檀君教	西鮮同志會	普化神道	天道教	總計
身分 位地的社會信望あり								一〇
身分 班兩								一
身分 位地的社會信望なし			三	一				二六
身分 民常			九	一	三			四七
（地域數）			一四	一	四			一六
職業 農業			二	一	二			四
職業 商業								一
職業 工業								一
職業 巫覡								一
貧富 產有			一					一〇
貧富 產中			一					四
貧富 產無			二	一	三			五七
智識 社會的有識を知す								四
智識 漢諺を解す			三					二
智識 無學蒙昧			一〇	一	四	一		五二
性別 男			〇・八七	一	〇	〇・五〇	〇・六二	
性別 女			〇・一三	〇	一	〇・五〇	〇・三八	

類別＼教名	天道教	侍天教
身分 班兩		
身分 位地的社會信望なし		
身分 民常		五
（地域數）		三 四
職業 農業		一 八 三
職業 商業		一 一
職業 自由勞働		四
貧富 產無		一 九 四
智識 漢諺を解す		
智識 無學蒙昧		三 二
性別 男		〇・五六 〇・五六
性別 女		〇・四四 〇・四三

11. 江原道

類別＼教名	天道教	侍天教	青林教	普天教	孔子教	總計
身分 位地的社會信望あり						
身分 班兩	一	二			一	一
身分 位地的社會信望なし						六
身分 民常	一五	四	一	五	一	四四
（地域數）	一八	六	五	一五	一	二四
職業 農業	一六	四	一	四		二六
職業 自由勞働	二					一
職業 巫覡						
貧富 產有	一	一				四
貧富 產中		一				二六
貧富 產無	一五	三	四	六	一	二七
智識 社會的有識を知す	〇五	一				
智識 漢諺を解す	二		一	一		二七
智識 無學蒙昧	一三	三	一	一		四七
性別 男	〇・六四	〇・九〇	〇・六〇	〇・六三	一	〇・五七
性別 女	〇・三六	〇・一〇	〇・四〇	〇・三七	〇	〇・四三

類別＼教名	天道教	侍天教	上帝教	青林教	水雲教	人天教	平化教	白々教
身分 位地的社會信望あり				一				
身分 班兩	一	二			一			
身分 位地的社會信望なし								
身分 民常	一五	四	一	五	六		一	一
（地域數）	一八	六	五	七	三	四	一	一
職業 農業	一六	四		三	七	一		
職業 自由勞働	二							
職業 巫覡								
貧富 產有	一	一			一			
貧富 產中		一						
貧富 產無	一五	三		四	六	二	一	
智識 社會的有識を知す	〇五	一			一			
智識 漢諺を解す	二			一				
智識 無學蒙昧	一三	三		一	七	二	一	
性別 男	〇・六四	〇・九〇	〇・六〇	〇・四〇	〇・七四	〇・四〇	〇・五五	〇・五五
性別 女	〇・三六	〇・一〇	〇・四〇	〇・二〇	〇・二六	〇・五〇	〇・四五	〇・四七

12. 咸鏡南道

教名＼類別	天法	普天教	無極大道	甑山	東華	三聖	七星	皇祖敬神崇神	知我	性道	大宗	濟化	總計 二〇
身分 社會的信望あり地位													一
身分 兩班		二											7/1
身分 社會的信望なし地位	一		二										五
身分 常民		三				一		五					六
地域（數）	一	三	三	二	四	一	二	九	一	一	一	一	二〇
職業 農業		三		一	一		一	三					六
職業 自由勞働		一											三
職業 巫覡								五					五
貧富 有産											一		1/3
貧富 中産		1/1											3/4
貧富 無産	一	三	二		一			三					五九
智識 社會的有識を知す		0/三											10/1
智識 漢文を解診す												一	五
智識 無學蒙昧	一	三	三	一	一	一	一	七					六三
性別 男	〇・三三	〇・七九	〇・六七	〇・五〇		〇・七一	〇・六二		一	一	一	一	〇・七四
性別 女	〇・六七	〇・二二	〇・三三	〇・五〇		〇・二九	〇・三八		〇	〇	〇	〇	〇・二六

13. 咸鏡北道

教名＼類別	天道	侍天教	青林帝	上帝	水雲	人天	白々	元倧	普天教	大倧	太極	大聖院	總計 一二
身分 社會的信望あり地位	0/1											一	0/3
身分 兩班	一										一	一	二
身分 社會的信望なし地位	一				一				一				三
身分 常民	一七	五	六	一	三	一			七	一			四
地域（數）	一九	六	六	一	四	一	一	一	八	一	一	一	五〇
職業 農業	一五	五	五		四	一	一	一	八	一	一	一	四二
職業 商業	一												一
職業 教師	一												一
職業 自由勞働	一												一
貧富 有産									二			2/2	2/2
貧富 無産	一六	六	四		四	一	一	一	七	一		一	四一
智識 社會的有識を知す	1/1							一					2/3
智識 漢文を解診す	一								一			一	四
智識 無學蒙昧	一四	五	五	一	三		一		七	一			三六
性別 男	〇・六三	〇・六四	〇・六七		〇・六四	〇・七五	〇・七八		〇・七〇	〇・七八	一	一	〇・六七
性別 女	〇・三八	〇・三三	〇・三三		〇・三六	〇・二五	〇・二三		〇・三〇	〇・三三	〇	〇	〇・三三

類別＼教名	身分 社會的信望ある位地	身分 兩班	身分 社會的信望なし位地	身分 常民	地域（數）	職業 農業	職業 商業	職業 自由勞働	貧富 有産	貧富 中産	貧富 無産	智識 社會を諸漢を解する 知識	智識 有學	智識 無學蒙昧	性別 男	性別 女
天道教	一	一	七	二	二	四	一	二	二	一	六	一	二	一〇	〇・九四	〇・〇六
侍天教	一	一	三	一	三	二	一	二	二	一	一	一	一	三	〇・七〇	〇・三〇
普天教	一	一	三	一	四	二	一	二	一	一	一	一	一	三	〇・九九	〇・〇一
太極教	一	一	一	一	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	〇
大宗教	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	〇・六六	〇・三四
聖教院	〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	〇
總計六	一〇	二	二	二	二	一〇	一	二	四	二	七	三	五	一六	〇・九六	〇・〇四

因に、第四十二表職業別欄に「教師」とあるは、咸鏡南道元山天道教青年黨代表で現在元山孤兒院附屬春城學院の教師を勤めて居る教徒である。又同欄に「公職者」とあるは、一は慶尙南道昌寧に於て昭和九年四月天道教徒中から、郡農會通常議員一名昌寧面書記一名、梨房面協議會員一名を出したものであり、一は慶尙北道慶山郡慈仁面に昭和三年六月平安北道定州の天道教徒某が面書記として赴任したものである。

第十二章　類似宗教の教跡

朝鮮の新興類似宗教がその發生以來今日に至るまで、朝鮮の社會文化の上に如何なる跡づけを效したか、これを考察することは之等新興類似宗教の宗教的價値を窺ふ上に於ても、また朝鮮の民衆がかゝる宗教運動に如何に導かれ或は順應したかを考へる上に於ても、可なり重要な意義あることであらう。そこでいま之等新興類似宗教の教跡を思想的なもの（主として宗教思想的なもの）と現實活動的なもの（主として社會活動的なもの）との兩面から觀察することゝした。

第一節　類宗の宗教思想運動

朝鮮の類似宗教が、他の宗教と等しく當時の人々の生活苦を解脫せむとする要求に應へて出發したものであることは既に第一章に於ても述べたところであるが、朝鮮の類似宗教はこの解脫の要求に應じて精神的な解脫運動と物質的な解脫運動とを二つながら策立した。朝鮮の類宗活動は、客觀的に專ら物質的解脫運動にのみ偏り奔つたかの如き觀あるけれども、凡そ人の運動殊に社會的な運動は意識的にその運動をリードし無意識的にその運動の原動力となるところの思想の存在活動なしに豫想されないものであるから、表面物質的解脫運動即ち社會的活動

のみに終始したが如く觀らるゝ朝鮮類似宗教にも、その一面、その社會運動を意義あらしむる根本的な思想運動即ち精神的な解脱運動が、たとひ表面にあらはれないにしても、相當に活躍して居たものであることを看過してはならない。

一　宗教綜合化

然らば民衆の生活苦を精神的に解脱し、且つ物質的解脱運動の原動力となつた、類宗の宗教思想運動或は思想的宗教運動には如何なるものがあるか。この運動を考察するに當り先づ第一に吾等の忘れてはならないことは、之等の類似宗教が、他の既成宗教たる佛教や耶蘇教の如く外來の宗教でなく、朝鮮に於て新たに生れた新興宗教である事である。この事即ち之等の宗教が朝鮮に於て新たに叢生したものであると云ふ事は、その教の內容及び社會上の價値が如何なるものであるにせよ、朝鮮文化思想史の上に於て永く特筆せらるべき跡づけであることは論ずる迄もない。處がこの特筆せらるべき跡づけがまた、之等類宗の發生當時まで朝鮮文化史に多少なりその跡づけを印したもの、就中宗教的信仰的なものを、既に枯死せるものは之を甦生し現に活動するものはこれを採用し、之等を綜合することに依つて一の濟世力豊かな新宗教と成し、之を以て民衆の解脱的要求に應ぜむとした極めて興味あるものである。即ち類宗の大部分が、その綜合の技巧に於ては素朴の憾あるにしても、綜合宗教、統合宗教を以て自ら任じ、朝鮮の宗教意識界に存在する幾多の宗教及び信仰を打つて一丸となさむと努めたのである。從つて之等の類宗は云はゞ宗教綜合化、信仰統一化の運動に努めたものと見なければならぬ。

この各宗教を綜合せむとする觀念は、之等類宗の綜合觀念とはその根本に於ては同一であつても、幾らかその趣を異にしたものとして朝鮮には既に遠き上代の三國時代に存在し、中世以降近世に至るまでその存在を跡づけ得られる傳統的な觀念である。從つてこの觀念は、特に類宗に依つて始めてあらはれたものでなく、寧ろ類宗がこの傳統的觀念に動かされたものと觀ることが妥當と考へられるが、その數の上に於て活動の上に於て、斯くも盛大を極めしは未だこれあらざる事である。故にこの傳統より視れば之等類宗の宗教信仰綜合活動は、古來の傳統思想がこの類宗に於てこゝに劃期的躍進を展開したものとも考へられるであらう。

この類宗に依つて躍進的展開を致した傳統的觀念、それはそも〳〵如何なるものであるか、それは遠くは高句麗寶臧王の時、國に儒佛の兩教あれども未だ道教あらず、三教は鼎足の如しその一を缺けば國危ふしと云ふので、使を唐に遣はして道教と道士とを迎へ之を尊崇したことに表明され、近くは李朝末世既に以前から排斥せられた佛教も道教も將たまた國教の如く尊崇せられた儒教も民衆の安心を繫ぎ得なかつた場合、民衆歸依の唯一なるものとして民間信仰界に絕

大の勢力を張つた巫教の本尊が玉皇上帝・日光・月光・七星・觀音・藥師・三佛帝釋・關羽・崔瑩・城隍神等の道・佛・儒三教神合流であることにも表現されて居るものであつて、前者はその一を缺けば國危ふしと云ふ三教の絶對併信であり、後者はその一つ〳〵を缺くも差したる痛痒を感じないのであるから、その重視の程度に於ては相異あれ、前者は護國の要求、後者は除災解寃依賴者の希望を滿すに都合よかれのものであつて、その根本觀念たる、現實的苦難を解脫するが爲めには、一に依賴するよりも二に、二にたよるよりも三に、兎に角いくつかのものにすがる方が、その目的を達するに効果大なりとなす依多的功利觀念に他ならないものゝ如くである。

朝鮮の類似宗教がこの宗教綜合に先鞭をつけたものは、近世類宗發生の先驅をなした東學であり、東學の教祖崔濟愚に依つて手際よく企てられた儒・佛・道三教の合一である。一度びこの企てが發表せられ、東學が民衆の間に汎く歡迎せられるや、之に次いで發生した類宗悉くこの三教合一をその教内容となすと稱し、こゝに類宗の特色は三教合一にありと云はるゝに至つたが、これまた類宗の先驅をなした東學の企てに模倣したものである事は明白な事實である。從つて朝鮮類宗の三教合一は、類宗の先驅をなし三教合一の先鞭をつけた東學の三教合一に依つて代表せられるであらう。處がこの儒・佛・道三教の合一運動は朝鮮の傳統ばかりでなく、又朝鮮類似宗教の先驅者東學に依つて創められたものでもなく、この三教の存在した支那に於ても日本に於ても企圖せられ、支那に於ては隨唐時代に既に三教の融合論あり（南齊の顧歡は「孔子・老子は佛なり」と論じ、隨の王通は「三教は一なり」と云ひ、唐の柳子厚は「老子は亦孔子の異流であり、釋氏は要するに孔子と道を同じうする」と述べて居る）、宋儒の勃興は實に道・佛の啓培的影響に依るものである事は周知の事實であり、日本に於ても神・儒・佛の三道は夙に相圓融する有樣であつたが、明治二十年頃西洋模倣・歐米心醉即ち歐化思想の流行するや、之が反動として神・儒・佛三道を調和して國民道德を鼓吹せんとせる大道社の樹立あり、之が學的調和を試みんとする哲學館の創立を見たのであつた。

さて然らば東學の企てた三教合一とは如何なるものであつたか。これを東學の創始者崔濟愚の言に徵すれば「天道は儒・佛・仙に由來するものでなく、儒・佛・仙こそ天道の一部分をなすものである。儒の倫理と佛の覺性と仙の養氣は人性の自然に賦與せられたものであり、天道の固有な部分であるが、吾道はその無極大源を得たものである云々」或は又「吾道は儒・佛・道三教を兼ねて之を一に圓融するものである。即ち五倫五常を立て仁に居り義を行ひ、正心誠意己を修めて世に及ぼすは儒教に取り（孔子）、慈悲平等を心となし身を捨て世を救ひ道場を淨潔にして口に神呪を誦し手に念珠を取るは佛教に取り（釋迦）、玄を極めて無極に至り榮利名聞を顧みずして無慾清淨に身を持し神髓を煉り終に昇天を希求するは道教に取る（老子）、然れども審にその源頭に

溯れば此の三道は共に一の天道に歸す」と云ふにあるのである。處がこの合一教は三教それぞれの宗旨を抽象して並べた理論的な組合せにすぎず、理論的には三教の粹を蒐めた立派なものではあつても、民衆の感情に滿足を與へてその生活苦から解脱せしむる宗教性を缺くの嫌がある。そこで東學の教祖崔は之等三教の粹を統一して一の宗教體系を作る必要を感じ、こゝに彼が最も嫌忌し、實はその侵入と盛行とに慨歎して新宗教樹立を發起した程の西學即ち耶蘇教から、天主の宗教觀念を採用し、三教の教理を天主の作用中に統括調和せむと試み、この作用を東洋的の意味に於ける造化と見做し、從つて天主と人とは終に不二なるものなりと說明して、西學耶蘇教の天主觀念を全く東學(東洋的な)的に變化し、こゝに三教を統合して東學教の一宗教體系を形作るに成功したのであつた。

二　後天開闢觀

かゝる三教合一の思想運動に次いで朝鮮類宗に窺はるゝ特色の一つは所謂「後天開闢」の宗教觀念である。この觀念は往昔と今日以後の世界を時運に依つて區別せむとする一種の運命觀念であつて、現在までを先天の世となし、先天は昨日までに完了し、今日以後は後天の世が開闢せられる、而してそれは人爲的なものでなく天運に依つて決定時にさう定まつて居る。從つて今日からは新しい宗教に依つて新しい人生が導かれ、やがて昔にもなかつた新しい立派な社會が建設せらるべき大運の時代に一歩を踏み入れたのであると云ふのである。この後天觀念、時運觀念も亦朝鮮の類宗に依つて考へ出されたものではない。この觀念は古き昔から支那に於て、或は易姓革命說政治思想)として或は像法末法說(佛教思想)として或は先天後天說(陰陽五行思想)として熟されたものであり、政治思想、佛教思想、陰陽思想の傳播につれて支那文化の及びし所には何處にも迅く既に入つて居り、朝鮮に於ても政治說として將た陰陽說として充分一般の常識となつて居たものである(日本に於ては、政治思想、陰陽思想は發達し得なかつたが、佛教思想だけは相當に發達して鎌倉時代を前後して親鸞・日蓮に依り末法の時運に適する宗旨が高唱され、時運の先後あることが强く印象された。朝鮮に於ては、政治思想はそのまゝ肯定され、陰陽思想は或は陰陽學として儒林學者の間に、或は風水說として民間に汎く知られたものであつた)。然しながらこの時運觀念が朝鮮に於て宗教的に發展せしめられたのは、之等類似宗教の思想運動に依るものであつて、この點大いに注目に値するものである。

類宗の後天說はその基礎を或は東學系の如く人天關係に、或は吽哆系の如く天運循環關係に、或は其他の類宗に於けるが如く鄭鑑錄の豫言に措くものなど、その後天開闢新世出現說の基礎づけにはそれ〴〵多少の相違はある。

即ち東學系では、三王五帝その他の聖賢が輩出し、且つそれら聖賢が天に代つて人を教へ導き

得た時代を先天時代とし、之等聖賢の教導も功なきに至るや、天が直接に人心に降つて教導するがこの時代が後天時代で、今や將にその時の開闢であると說き、先天は人と天とが代天者を媒介した人天關係の間接時代、後天は天が直接に人に交涉する人天關係の直接時代と考へて居る。

吽哆系の普天教では陰陽の循環論に立ち、天地(太極陰陽から發して活動する八罫の配位)は今や伏羲氏の定めた先天時代の運でもなく、又文王の定めた後天時代のそれでもなく―伏羲時代の天地は乾(南)、坤(北)、離(東)、坎(西)、兌(南東)、巽(南西)、震(北東)、艮(北西)の運勢に位置して居たが、文王時代には離(南)、坎(北)、震(東)、兌(西)、巽(南東)、坤(南西)、艮(北東)、乾(北西)に變じたものであつた―今や三變して將に坤(南)、乾(北)、艮(東)、兌(西)、巽(南東)、離(南西)、坎(北東)、震(北西)の運に遭遇する天地となつて居るから、今の時勢でない前二者を先天時代、而して今將に開かれて居る第三變化循環)を後天時代と云ふのである。因にこの第三變化の天地位(八罫配位)は吽哆教祖姜一淳が忠淸南道の易學者金一夫の造詣に依るものを傳受したものであると云ふ。この第三運の八罫配位中、南と北との配位は正しく伏羲の配位と正反對になつて居る。伏羲先天では南が乾陽、北が坤(陰)に對して一夫後天では南が坤(陰)、北が乾(陽)となつて居るのである。普天教本所の聖殿が正門も本殿(十一殿)も悉く北面して居るのは、かくて第三後天の運に順應して建てられたものである。又曰く、現代の世相に女權擴張の氣運旺盛なるは正しく天地がこの後天期(第三後天)に入りしを證するものであると。猶ほ以前より朝鮮に信ぜられた鄭鑑錄豫言には、舊王朝の運盡きたる後には必ず天命を受けたる偉人が出現して王となり新國都を建設すると云ふ新王都建設豫言と、世界に大變亂が生じ天變地異が勃發して人類は絶滅の災殃に直面する、その時眞人が出現して世の立て直しを斷行すると云ふ災變革新豫言との二つがあるが、類宗中前者を採るものは既に李王朝の退位が實現したのであるから、今や將に新王新國都の建設期に入つたものでありとなし、後者に基づくものは世道人心の頽敗は將に世紀末の姿と見られる、從つてやがて豫言の如く災變革新の大變動が勃發する時期に入つて居るのであるとなすものである。(猶ほ、鄭鑑錄の王都豫言に關しては本府調査資料第三十七輯朝鮮の占卜と豫言第十一章第六節(二)新興王都の豫言信仰參照のこと。)

その基礎づけが如何なるものにせよ、今日が既に後天開闢期に達して居るとなす觀念は、やがて新社會が展開せられるであらうと云ふ將來の生活に對する豫想の下に、舊來の苦惱多き生活に艱苦を嘗め盡して居た民衆に何程かの好奇心・あこがれ・希望を惹起さしめ、從つて將來に對する光明に依つて自暴自棄の深間に陷ることを救濟するの功あり、同時に舊時代には舊時代に適した宗教があつた如く新時代にはこの新時代に適した新しき宗教に歸依して始めてその生活展開が可能であり、その最も新時代に適し最も新時代の生活を指導する新宗教こそわが教を措きて他にないのであるから、新世を希ふ者は必ずや我が教徒となるべきであると云ふ、類宗各教

が自教の宣傳及びその教勢擴張に最も都合よき名題たるを失はない。

三　地上天國思想

壓迫と苦惱の生活に喘ぎつゞけ、不安と恐惶の爲め心中些の落つきもなかつた民衆にとつては、後天開闢の觀念だけでも、その開闢に依つてあらはれる新人生、新社會がたとひ善かれ惡しかれ、兎に角現狀を打破するものである限り、現に受けつゝある苦痛から解脫し得る希望として、思つただけても好ましき慰安であるに相違ない。然しながら將に展開すべき新社會が現實に於て經驗し得べきものであるか否かが明瞭に示されざる限り、後天開闢に對する好感もやがて以前にも增したる失望と化することは當然である。朝鮮の民衆は佛教に依つて死後の世界に極樂と云ふ理想世界の存在する事を久しく聞かされて居た、しかしこの極樂世界は死後の世界なるが故に生前にそれを經驗することが出來ず、それは到底現實的なものとは信じられなかつた。從つて朝鮮の民衆にはかゝる現實性薄きものでは何等の興味もひくものでなかつた。當時盛な普及力を發揮した耶蘇教は理想世界の「天國」なるものゝ存在を教へた、しかしこれ亦死後昇天して後に行くべき世界であつて、その現實性は極樂と同じく薄弱である。朝鮮の民衆は古來理想よりも現實、未來よりも現在に重點を置くことを生活主義とした。是に於てか、後天開闢を說きこの後天開闢期に主役者を以て任ずる類宗は、來世でなく現世に於て、理想的でなく現實に、所謂極樂、天國に於ける生活と等しき生活が、その教徒となり又その教義信條に隨順することに依つて、正に確實に經驗し得らるゝ地上天國、生きて味はふ此の世の極樂世界を保證したのである。佛教に極樂世界と云ひ耶蘇教に天國と云ふ、何れもその教徒の享受せむことを希ふ現實的生活慾望の達せむとして達し得ざる滿さむとして滿し得ざりしものゝ理想的表現に他ならない。從つて朝鮮民衆の求める此の世の極樂、地上天國も、亦朝鮮民衆の現實的生活希望の求めて容易に求められず久しくあこがれ望んで居たものが、其處では苦もなく充分に享有し滿足し得るものでなければならぬことは勿論であらう。然らば朝鮮民衆は如何なる生活希望を地上天國にかけ、類似宗教はこの希望に添ふ如何なる地上天國を觀念したであらうか。

東學の教祖崔濟愚は、常に天主に敬侍し心を守り氣を正しくして精進懈怠しなければ遂に天主の德たる無爲而化し造化をなすの至聖に到る、至聖は神仙である、この神仙の居る處即ち地上天國であると說き、吽哆教祖姜一淳も亦呪文を誦して誠を致せば遂に神明に交通して靈術を發揮することが出來る、この通靈の域に達すれば行くとして行ふとして意の如くならざるはない、この如意の域に達した者の住む所そこも亦如意の境であると教へた。天地の造化力を發揮し得るに至れば、通靈して如意の域に達せば、別に天國も極樂も求める必要がない。しかし之等造

化力を發揮し、如意の域に達することは大衆一般のよくするところでもなく、又容易なことでもない。從つて崔濟愚や姜一淳の在世時には多少の入教者があつたにしても、それはこの地上天國を望んでではなく、多くは教祖の造化力或は靈術を信仰して病氣の平癒を乞ひ災厄の防止を願ふ者が大多數で、造化力、靈術獲得に精進したる者は極めて稀有であつたのである。

元より東學教も吽哆教も濟世の動機に出發して居る。然るにかくの如き個人の信仰修業に依つて個人の精神的天國を開いて居たのでは、到底本來の濟世とか廣濟蒼生とか云ふ大事業は百年に亙るも之を遂行し得べくもない。そこで東學教は天道教に至り、吽哆教は普天教に至つて何れも本來教祖の天國觀念を革め、民衆の漏れなく住み得る、從つてこれを民衆の希望を總じて滿し得る、而も短時日の間に成し遂げ得べき物質的天國と觀念したのである。民衆の希望を總じて滿し得る物質的天國、それは畢竟民衆に共通せる生活希望を滿し得る現實の生活社會に他ならない。民衆に共通せる生活希望、それは要するに民衆一般に苦痛とするものを除去せむとし民衆一般に快樂とするものを享受せむとすることである。

朝鮮の近世このかた民衆の共通な苦痛となやみは、綱紀地を拂つた韓末の虐政と特權階級の壓迫とであり、國際勢力の壓倒的侵入であり、併合以後の新政に對する順應への努力とであつた。而してこの間に於ける民衆の共通な快樂享有の願望は、かゝる變轉極りなき動搖期に乘じて、久しきに亙り羨望の的であつた所の官位と特權とを獲得することであつた。是に於てか天道教は勿論普天教其他大部分の類宗は、等しく民衆に向つて之等の願望が必ず達せらるべき地上天國建設を約束し、一人でも多くの教徒を集め得たものが先づこの地上天國建設に成功すべしと信じ、各々猛烈な勢を以て教徒獲得に競奔し、荒唐無稽の言辭を弄して民心の收攬に努め(大正十二年東京地方大震災のあつた時など、各類宗とも競つて今ぞ新天地出現の秋なりと稱し、索强附會の迷說を傳へて教徒の獲得に熱中したものだ)遂には社會運動敢行とまで進展するに至つた者さへあるのである。併しながらかゝる民衆の共通生活希望を達せむが爲めの運動は、當然宗教運動より離れて一種の政治運動化せざるを得ないものであつて、これ類宗幾多のものが宗教の假面にかくれて政治運動をなしつゝあり」と世に評せられる所以であらう。

四　奇蹟と救世主

一般に宗教及び宗教的信仰には必ず奇蹟、靈術が許容せられるものである。元來宗教及び宗教的信仰は、信者が自分一人では到底出來ないと信ずるものを何とかして得たいものであると云ふ願望から、それが容易に出來ると信ずる者に接近し依賴して、その願望を滿足せむとするところに出發するものであるから、その接近し依賴せむとする對象は、信者の願望が人力に依つて

能くし得ざるものとなるに隨つて愈々超人的なものと觀念せられるに至り、かくてその對象の作用は人間の思量を超絶したもの、所謂不可思議な働きとなされるものである。この不可思議な働きが靈力・靈術であり、この靈力に依つて致されたものが奇蹟である。つまり宗教及び宗教信仰に於ける靈術・奇蹟なるものは、一般に信者に依つて定められたものであり、且つその信者の思慮判斷の可能限界を超えた作用であるから、信者の思考批判能力に逆比例して增減する主觀的なものであるが、それが主觀的なものだけに永遠に消滅し去るものではない。處が人々の批判能力は、また主觀的願望の感情熾烈なるに從つて往々その客觀妥當的判斷力を低下することがある。從つて宗教及宗教的信仰に於ても、信者の懷く願ひ事に對する感情が强く激しきものであればそれだけその批判能力は低下し、それに應じて靈術・奇蹟の範圍と作用は汎く且つ力强きものとなされることも尠くないのである。

朝鮮の民衆は傳統的にその民間信仰全般に渡り、靈術と奇蹟を多分に肯定して來た。鬼神の信仰、神仙の信仰、風水地理の信仰、及び占卜豫言の信仰等一切として民衆の信仰界に入らざるものなく、又之等のもの一切として靈術・奇蹟として觀念せられざるものはないのである。從つて若しも朝鮮の民衆をして宗教的にリードし、宗教信仰に依つて之を教導せむとする者あらば、民衆生活の大いなる精神內容を形成する之等の民間信仰を顧みず、之等の信仰に含まるゝ靈術・奇蹟肯定の觀念を無視するの愚を演ずる者は無いであらう。是に於てか、朝鮮に新興し、朝鮮民衆の救濟を以て任ずる類宗が、この大衆信仰に氣づかず、その靈術・奇蹟觀念を看のがす筈はなかつた。況んや時は將に不安恐怖時代、民衆の拔苦與樂に對する願望はいやが上にも高調せられ、民衆の關心は一層强くこの靈術と奇蹟とに向けられて居る秋に於ておや。

朝鮮の類宗は、朝鮮の民間信仰に含まるゝ總ての奇蹟と靈術信仰を採用した。その立教に際して現存する既成宗教の綜合化を企てしが如く、各民間信仰から奇蹟と靈術とをピックアップして此處にも亦その綜攬を試みた。從つて朝鮮の民間信仰は、その靈術と奇蹟とを輸したる點に於て類宗に依つてほゞ綜合せられたと觀ることが出來るであらう。併しながら茲に注意すべきことは、類宗のこの靈術綜合は、單に民間信仰からそれ等を漏さず採用し併用したのみでなく、それ等を特定者一人の作用として統一調和したことであつて、これまた類宗の宗教思想運動に於ける一特色を成すものである。一人の特定者とは何ぞや、それは通靈に依つて神明の域に到達した救世主に他ならない。

この靈術と奇蹟とが人に依つて營まれると云ふ宗教思想は、朝鮮固有の巫覡思想に於ても、道教に由來する仙人思想に於ても、將又佛教に由來する神印思想(三國時代に既にこの靈術奇蹟を自由になし得ることを主張する神印宗なるものがあつたから、今暫らく佛教系の靈術奇蹟觀念

を神印思想と云つて置く)に於ても存在した。然しながら之等の靈術奇蹟は相對的なものであり從つて有限なものであつた。處が類宗の觀念するものに至つては、それは全く絶對的なものであり、且つ無限なものとされた、こゝに類宗の奇蹟靈術思想に統一的伸展を認めることが出來るのである。然らば如何にして絶對的な無限性なものに統一されたか。それは他なし、類宗にあらはれ來つた救世主の觀念に依つてゞある。類宗の觀念する救世主は、宇宙の絶對神聖たる天主又は上帝の、或は降靈したものであり(東學の救世主)或は降臨したものであり(呼哆教の救世主)或は天命を受け天運に應じて出づるもの等であるが、要するに絶對的宇宙の本源體たる天そのものゝ用として人界に降つた者である。絶對の活動はまた無限でなければならぬ。從つて宇宙絶對の體現者たる救世主の作用―奇蹟靈術―も亦相對有限であつてはならない。かくして類宗の救世主は如何なる靈術も奇蹟も出來ないものはなくなつたのである。天道教に「無爲而化」「造化」と云ひ普天教に「天地公事」「如意」と云ふ、等しく絶對的な奇蹟靈術に名づけたものに他ならないのである。

この類宗に依つて統一せられた靈術奇蹟の無限思想、これこそ從來幾多の靈術と奇蹟とを肯定し信じ來つた朝鮮民衆の宗教思想に大なる刺戟を與へたものであり、之に對して多少の疑惑を抱いた者も、天の絶對なるを信ずる限りその絶對の靈に通じた者は、天地のはかり知り得ざる不可思議活動の可能なるが如く、天地の活動に等しき無限力が發揮し得られることを確信するに至つた。是に於てか、類宗の教徒等はかゝる靈力を體得せる者に信頼すれば必ずや世も救はれ天國も出現せられ、久しきに渡つての宿願たる地位も名譽も如何なる慾望も充分に滿足し得らるべしと信じ、大船に乘り込む如き安心を以て救世主を擁する教へと入教したものである。それであるから、この絶對奇蹟思想は民衆及び教徒に對して不動の安心を與へ、爲に入教者の數を增加し類宗の天國建設的運動に大いに役立つところあつたが、同時に、通靈して上帝に一如すればやがて無限の靈術を得ることが出來ると云ふ思想から、續々として救世主があらはれ、この救世主を擁してこゝに濟世救民を標榜する類宗の叢出を捉し、また遂には世人を狂惑し、殺人・詐僞或は婦女誘淫等の惡らつなる事を敢てする救世主すら輩出するに至つたのである。

以上朝鮮の類宗はその宗教思想運動に於て、或は三教合一を試み、或は後天開闢地上天國觀を樹立し、乃至救世主を以て奇蹟信仰を統一する等幾多の興味ある教跡をのこして居るが、之等の宗教思想を概して精神的解脱よりも物質的に、理想的よりも現實的解脱に重點を置いて解釋せしが爲め、類宗の多くは實際社會解放運動に熱中して、その運動の根本たるべき宗教思想の研鑽を顧みる處なく、從つてそれ等の社會運動も亦何れも充分なる成功を收め得なかつたのである。かくて、社會運動の基礎たる之等の宗教思想は、自づから一般より何等價値なきものと蔑視せら

れるに至つた。然るに各敎たゞ自敎の社會的存在の影が日に〳〵薄れ行くことのみに焦慮し、宗敎思想の研究發達に些の關心なき有樣は類宗そのものゝ爲にも採らざる處である。

第二節　類似宗敎の社會運動

朝鮮類宗の宗敎思想運動が從來の宗敎思想に一生面を開拓して幾多の興味ある伸展を效したことは前節に於て述べたことであるが、之を要するに之等の宗敎思想は概して理想よりも現實生活に、精神よりも物質生活に重きを置く傾向が著しかつたので、之等類宗の運動は一般に精神的解脫運動よりも物質的解放運動即ち現實生活のよりよき開拓活動に一層の努力を拂つた樣に考へられる。中には見るべき宗敎思想即ち敎理敎義の確立なく、只管他に模倣して社會解放運動のみに沒頭すると云ふが如き極めて淺薄なものもないではなかつた。かくの如く現實生活の解脫に專念したと考へられる類宗は、然らば如何なる活動を展開したであらうか、いま此等の活動中その社會的なる活動と認められるゝものに就いて觀察すれば、東學黨亂、一進會活躍、三一騷擾運動及び聖都建設運動等が數へ上げられるであらう。以下之等の運動に就いて略說を試みる。

一　東學黨の亂

この東學黨の亂に關しては既に本書第二章第三節東學敎團の沿革三、東學黨に於いてやゝ詳細に說述してあるから、再びこゝにそれを繰返す煩を避けるが、要するに此亂は明治二十七年東學の宗敎思想たる造化靈術と後天開闢の天運到來を信仰する敎徒が、救世主と仰ぐ敎祖の刑死及び邪敎として嚴重なる取締りと特權階級たる土豪兩班の侵虐に對する復讐に燃ゆる時、一擧に地上天國を建設して敎祖の靈を慰め、信敎の自由と社會的壓迫からの解放とを獲得せむとする急進分子の指導精神に鼓舞せられて一揆と化し、その勢盛にして各地の城都一たまりもなく占領せられ、地方中央の官軍また隨所に擊敗せらるゝや、從來抱ける野望を達するの機として馳せ參ずるもの、或は危禍を免れむが爲に敎徒に假裝して運動に參加する者續出し、半島の各地相呼應するもの八十五、總勢立所に三百萬を突破し、時の政府をして手をつかねて策の施すところなく、遂に救を淸國に乞ふて出兵を求め、この出兵が國際條約を無視するものであつた處からこゝに日淸戰爭の端を發するに至つたものである。

然しながら、かくも燎原の火の如き勢に出發した東學黨は淸兵を驅逐した日本軍の向ふところ容易に潰滅し、翌明治三十八年主魁全琫準が京城に處刑せられしを最後として暴動の幕は閉ざされたのであつた。どうして容易に潰滅したか、その主要なる原因は、日本兵との遭遇戰に於て黨軍の士氣が一時に阻喪してしまつた事である。黨軍の士氣は靈術(胸に弓乙符を貼り、口に

三七の呪文を唱へて居れば造化の靈力で砲彈も當らず、又に死せず向ふところ前なしと教へられて居た)の信仰に依つて鼓舞されて居た。然るにその靈術は少數の日本兵に依つて見事打破されてしまつた。この靈術無效の現實を見た時、黨軍には非常な恐怖が漲り渡つた、信仰が恐怖と措きかへられた時、そこには士氣阻喪以外何物もあり得ない、潰滅の迅速なりしことまた當然の歸結であつた。

この運動の目ざす地上天國建設は失敗に終つた。然し教徒は云ふ、この運動を契機として朝鮮には各種の社會改革が行はれ、舊來の陋習は打破された、從つて從來虐げられて居た大衆の社會生活は解放された、少くも下層大衆に反動の意氣を鼓吹したことに依つて、特權上層階級をして幾分恐怖心を生ぜしめ、昔の如く横暴を恣にせざるに至らしめた事は、朝鮮下層民衆の爲に萬丈の氣を吐いたものであると。然り、民衆生活の社會的解脱に若干の寄與したことは沒すべからざる功績であらう。然しながら之を朝鮮全社會の立場から觀察すれば、朝鮮は之を契機として全半島戰役の巷となり、之を契機として國際的危機を招來し遂に露西亞勢力の半島進出を效し、次いで日露戰役へと益々國歩をして艱難に陷らしめた事は、この東學運動の免れがたき罪責ではなからうか。

二　一進會の活動

一進會とは明治三十七年日露開戰に際し、東學の殘黨を糾合せる進歩會が他の在野社會團體たる一進會に合同して出來た一箇の政治的宗教的社會團體であり、而してその運動は日露角逐の機會に乘じてなすあらむとしたものであることは既に本書第二章第三節四、一進會の項の下に述べたところであるが、そのなすあらむとした事は、明治二十七年以來東學黨が賊徒の如く見做さるゝので影をひそめて居たものがこの機を利用してその汚名を雪ぐ事であり、同時に優勢に進展する日本軍に近づいて、その社會的地歩を確保せむと云ふ事でもあつたが、その會員の大部分が元東學教徒である處から看過し得べからざる點は、東學の傳統的指導原理たる地上天國建設の宗教思想が本會の活動精神であつたと思はるゝ事である。從つてその綱領には獨立基礎の鞏固、政府の改善、軍政財政の整理、人民生命財産の保護等極めて新しき政策を揭げ、舊來の陋弊を一掃して生活の新生面展開に邁進したのであつた。從つて本會に入會する者各地に續出し、その數一百萬と云ふ大いなる勢力を形づくつたのである。然るに日露戰爭の終局して世は平靜にかへつた明治三十九年に至り、天道教主孫秉熙は會長李容九と意見合はずして分裂し、李容九等は政治運動に沒頭するが吾は教祖の遺志を尊重して純宗教的運動に依つて濟世を期す

と聲明し、會員の過半數を率ゐて一進會と分離した。爲に一進會の勢力は頓に振はざるに至つたが、この孫の聲明は彼の宿論たる教政一致の主義に一致せざるところ、これは李容九等の指導精神と一致しないが爲に一進會を以てしては彼の理想とする地上天國が建設されず、且つ若し一擧にして地上天國が建設されなければ、時態の平靜に復するに隨つてやがて在野結社たる一進會は解散の運命を免れず、かくては折角東學の宗教精神に依つて振ひ立つた勢力を一朝にして地に墮せしむる事となるから、この政治的色彩濃厚なる結社を離れて教團を組織し以て東學團體の勢力を維持し、暫らく好機の到來するを待つて已の理想とする地上天國を建設せむとしたものゝ如くである。然らば指導精神に於ける孫と李の相異點は何處にあつたか、それは彼等の行動に依つて察するところ、李容九は他の大なる力に依頼隨從して地上天國を建設せむとし、孫秉熙は飽くまで自己が救世主と仰がるゝが如き地上天國を建設せむとするにあつたのであつて、一は事大協和の天國を考へ一は獨裁專制の天國を志したものゝ如くである。從つてこの意見の不一致から遂に一進會は天道教と侍天教とに分裂し、地上天國建設の運動らしきものは表面にあらはれ得なかつたけれども、一進會活動の根本精神にはやはり東學の宗教思想たる後天開闢、地上天國觀念が本流を成して居たことは看過すべからざるところであらう。

三　三・一騷擾運動

この運動は大正八年三月一日、元天道教主孫秉熙及びその幹部であつた者等が基督教徒・佛教徒其他の有志三十三人と自から朝鮮民族代表を以て任じ、宣言書を發して民族の解放自決を中外に表明し、檄文を各地に飛ばして都鄙一齊に萬歳高唱の示威運動を敢行せしめたものであつた。この運動はその發するや、飽くまで民族解放意志表明のデモンストレーションであつたが、勢の趨くところ遂に騷擾化し治安を害すること尠からず、爲に出版法並に保安法違反に問はれた者孫秉熙外三百五十六人の多きに達し、尙ほ若干の犧牲者さへ出すを餘儀なくされて鎭まつたのであつた。故に世に稱して三・一運動、萬歳運動或は騷擾事件と云ふ。

この運動は世界大戰の後仕末に際し、再びかゝる慘劇を繰返へさざる一策として國際紛爭の蘊釀地たる西歐の諸小國に民族的結合を促すべく國際會議に提唱されたアメリカ大統領ウィルソンの民族自決主義に刺戟せられ、この機會に民族自決の意志を中外に表明すれば必ず國際議題となつて容易に民族自決の實を擧げ得べしと信じ、好期逸すべからずとして起されたものであるが、この運動の主謀者が天道教主及びその重要幹部であり(この運動の宣言書に署名し、且つ失敗せる曉は犧牲を大ならしめざるやう教主はその教主たる地位を退いて居た)且つ各地に

於けるデモ及び騒擾のリーダーは概して天道教徒であつた事などより觀察すれば、國際會議に民族自決主義の提唱されたこの好機こそ實に、從來期待しつゝも幾度か尚早に失敗した後天開闢の無爲而化(自づからにしてなされた)であり、而して民族自決こそ絶對的な民族解脱即ち地上天國の實現に他ならず、今こそ彼等の信ずる宗教觀念が完全に現實化せられるものと信じ、この宗教思想の表現として勃發され、少くも教徒はこの思想に本づいて民衆をリードしたものと考へられる。

この運動は保安法に依つて官憲に取締られ、且つ所謂民族自決は西歐の平和が保證されない小民族にのみ適用すべく提唱せられたものであつて、確固たる平和を享有するものは問題とされて居ない事が了解せしめらるゝに至つて間もなく終熄した。しかし之を契機として朝鮮の民衆に民族意識の勃興とその意識の社會全般への浸潤を促し、且つ民衆をして現在の生活が束縛せられたものゝ如く感ぜしめ、爲めに一方施政に對して不滿の情を誘發して社會生活向上發展の進程を鈍らせ、一方解放の思想を普及してやがて階級解放を目的とする各種の思想運動團體勃興の氣運を醸成したのである。

猶ほ天道教の民族解放運動は、この教の傳統的なものであるから何等かの機會ある毎に社會的に活動せむと企てゝ居るが、最近に於けるその一例としては昭和九年八月以降京城・平壤・順天・中和・定州・義州・谷山・殷山等に於て天道教不不黨・天道教吾心黨の兩秘密結社の一味二百數十名が治安維持法違反の嫌疑に依つて大檢擧を受け、その内幹部約七十餘名が平壤地方法院檢事局に送られた事件がある。この結社は大正十二年頃天道教青年會員に依つて組織されたものであつたが、昭和四年分れて不不黨(京城中心)、吾心黨(平壤中心)の兩黨となり、熱心に同志の獲得資金の募集につとめたる結果、京畿・黄海・平安・平北・咸南の各道にわたり二百數十名の黨員を獲るに至つたが、たま〳〵滿洲事變勃發して一般民心に著しき變化を來したると有力幹部の罹病等にてその活動は不振に陥つたのであつた。そこで兩黨協力して共同戰線を張ることとなし、昭和六年天日紀念日(四月五日)京城に於て兩黨會合の上、黨員は天道教を十年以上信奉したる教徒中から詮衡して入黨せしむること、千九百三十五、六年〇〇の政治的危機を機會として朝鮮〇〇運動を起すこと、及びその運動資金の募集に着手する事等の數項を決議したが、民心の乘ずべき隙が見出し得ざる爲め活動は意の如くならざるところ、端なくも官憲の探知するところとなつて一網打盡されたのであつた。

四　聖都運動

類宗の宗教思想たる地上天國觀念及び救世主觀念の具體的表現としてあらはれたものゝ一

つに聖都運動がある。(運動を指導する根本精神から云へば寧ろ王都運動と名づけるのが至當とも考へられるが、中には表面王都運動たるを忌避するものあり、且つたとひそれが王都運動にせよ、現實には宗教的運動に依り宗教團體の本所を樹立したものであるから、聖都運動と云ふ穩當な文字を使用することゝした)

類宗に依る聖都運動中第一に指を屈すべきは鷄龍山聖都建設運動であらう。鷄龍山は忠淸南道論山郡の北境に聳ゆる秀麗な山であり、その南麓新都內(新都內とは新都の域內を意味す)と稱する數箇部落が所謂聖都建設運動の基地をなすものである。朝鮮には古來王朝の姓を易へる毎に王都を變更した。この慣習が地理風水說に解釋せられて王の治世と王都とは宿命的に一定せるものであるとなされ、高麗朝末には王都の地運に依つて王の世運が決定せられると信ぜられるに至つた。そこで高麗に代つて朝鮮王となつた李氏は極力永遠に王位を享有し得るの地運ある王都を探求したが、その時此處新都內も有力な候補地の一となり新都として土工が始められたとも傳へられて居る。然るに李朝中世以降朝鮮の民間に「鄭鑑錄」なる豫言秘書があらはれた。それに依れば李朝は久しからずして亡び、替つて王たるものは鄭姓の人でその時の王都は鷄龍山であると云ふのである。然るに幸か不幸か、李氏王朝は明治四十三年庚戌(開國五百十九年)開國四百八十二年誕生あらせられた坧殿下を以て終りを告げた。然るにこれは漢陽李氏五百年の鄭鑑錄豫言が的中したことも考へられる。況んや此年庚戌は鄭鑑錄中に秘められた讖文「方夫人才□或多禾」(方夫は庚、人才は戌、□或は國、多禾は移、即ち庚戌國移となると云ふ、及び鷄龍山連天峰上の岩面に(後附寫眞參照)印せられた讖文「方百馬角□或禾生」(方は四、馬は午即ち八十、角は二本だから二、□或は國、禾生は秧にして移の古字、從つて四百八十二國移となると解す)に悉く的中すると解釋せられた。

大正八年三・一運動は、幾度かの地上天國建設運動に止を刺したものであつた。從つて單なる地上天國說は最早民衆の關心事とはならない。けれどもこの運動に依つて民衆の民族意識は欝然として勃興するものがあつた。是に於てか類宗は競つてこの鄭鑑錄に依る豫言信仰を地上天國思想に附會し以て巧みに動搖せる民心を捕へ、鷄龍山と鄭氏の新都とを目標として教勢の擴張を策したものであつた。(前揭國移讖文の解釋は皆類宗に依つてなされたものである)皆曰く、吾が教と新王鄭氏との間には默契あり、故に若し吾教に入教して誠を致すものは新王出現の曉高官と特權とを授けらるべしと。或は曰く、吾教は新王と默契あるが故にその本所を新都內に置きて、新都たるの規模を開拓して以て新王を迎へむとす、この規模開拓に努むる者は後福あるべしと。かくして鄭氏の新王都を地上天國となす類宗の教徒は續々として增加し、新都の規模開拓に參して將來の幸福を望む者は各地より家產を賣り故舊を棄てゝ此地に移住し、それ

までは不毛の一寒村に過ぎなかつた新都内は數年ならずしてその戸口約三倍に增加し、大正十三年には戸數千五百、人口七千を數へ、學校も市場も開設せる立派な新興部落を形成するに至つたのである。

この鷄龍山新都内に次であらはれた聖都運動の地は、全羅北道井邑郡笠岩面大興里である。これは吽哆教の後身たる普天教に依つて經營せられたものであつて、井邑の井は水の源、水は萬物を生育するもの、故に井邑の地方には萬物を生育する王者の出現すべきところ、大興里は大王の興起を意味するの地(この興の字は朝鮮では王家發祥せし處とか王妃の發祥せし處とかの地名に慣用した)、而してその南方には笠岩山あり、笠は冠であるから、此地には必ず王者の出づべき所でありとなし、その準備として十一殿即ち太極殿を建設し、輪奐の美を極めたる王宮類似の造營をなし、大王興起の準備着々として進捗するに及びこの實際に眩惑せる民衆は、吾教に入教致誠する者は必ずや高位高官を得べくその功績顯著なるものは重臣功臣として大臣宰相に叙せらるべく以下その誠心に應じて監司(道知事)守宰(郡守等)に任ぜらるべしなどと稱する布教者の甘言を確信し、入教する者の增すは勿論產を携へて此處に移住する者續出し、之等移住者及び頻りに出入する教徒を顧客とする商人の居を構へるなど、此地も亦戸口の增加を致し一小都邑を形成するに至つたのである。(第三章、第三節(ロ)教の沿革參照)

以上の如く表面、王都建設運動としてではなく、宗教的な地上天國を建設して宗教的にその生活向上を計らむとするもの、所謂聖都建設を企てた所には、忠淸南道大田郡炭洞面秋木里、忠淸南道燕岐郡錦南面金川里及び咸鏡南道文川郡雲林面馬汗里などがあり、その何れも聖都として仙境として教徒の移住を促したものである。秋木里は大正十四年水雲教主李象龍がその私宅を此處に新築するや、教徒の親近せむと來り集る者多く、爲に昭和二年同里錦屛山下を卜して天壇を築き、教本館も亦此處に移して本教の本山本部としたもので、此處も各地よりの移住者二百戸に達し、大きくはないが一箇の宗教的新興部落を形成して居る。金川里は大正十五年金剛道主李尙弼がこゝを佛儒仙三道を實踐窮行して仙境に達せむとする理想鄕としたもので、自ら釋迦及び老子・孔子に代つて蒼生を救ふ救世主教導者を以て任じたので、教徒の此地に移住する者少からず、こゝも亦宗教的新興部落の一を形成したのである。馬汗里は人天教に依つて計畫された仙境であり、昭和二年第一世教主全廷芸の遺志を繼いで紀念閣を建設しこゝを俗界と離れた聖境となし、各地の教徒を移住せしめて教徒のみの別天地をつくり、相互共助に依り精神的にも物質的にも解脫の生活を樂しまむとしたものであり、各地から約三百餘名の教徒を招來して一時さゝやかながら信仰に結合せる一部落を形成したが、その後生活困難と、第一世教主の殺人罪を犯した事實が露見するに及び、教徒の離教する者續出するや、此地の移住者も次第に他に轉出